

に係りて、桁行七十五尺、梁間七十八尺、軒の高さは二丈に近く、西塔一院の大衆永日を此所に費して、一天泰平の祈願を修する所、堂内人無く扉堅く閉じて、讀經の聲も聞えず、峯吹く風檐の風鈴に響きて物寂しく、陰晴極り無き大空の雲、或は暗く或は明るく、はらくと來る通り雨の額を打つに驚きて、右なる坂路を登れば、聖徳太子が嘗て帝良の里に幸し給ひし時、此の山に登りて堂を建て、其の傍に椿の御杖を立て給ひしが、枝葉繁りて幹に苔深く、花幾度か咲き散りて椿堂の名を得たる小さき御堂は、坂の右に有りて、杉暗き道は折しもの曇に愈暗く、七八間登れば長き廻廊の左右に二つの堂あり、案内の老爺に聞けば、辨慶が肩に荷ひし故荷ひ堂と呼ぶと答えしが、之れ即ち法華常行の二堂にして、常行堂は西の方、本尊は阿彌陀如來、脇士は金剛界法利因悟の四菩薩、寛平五年の創立にて、法華堂は本尊普賢菩薩、天長二年に建立する所、廻廊を潜りて木の下闇を出づれば、雨降りながら射す斜陽の光勾欄に輝やき、落葉に埋れし屋根の草の僅かに青むも哀れに

て、忙しくスケッチを終れば之より道は平らかに、雜木の若葉生ひ茂れる木深き谷の片岨傳ひ、山吹の花危き崖に咲けるを見捨て、雨に濕りし土を踏み、傳教大師の廟に至る、小さき門を入れば、苔蒸す敷石長く續きて、清水吐く池の片ほとり、蘭の花白く咲き満ちたるに、得ならぬ香り袖にうつるも尊く、箔落したる金銀丹碧の古雅なる建築面白く、拜し終りて門を出づれば、此所ら一面道なきまでに茂りたる叢山苔は、露しと々に美はしく、僅かに其の上を歩みて、うねく曲る谷沿ひの小暗き棧道を進み行く。晴れ曇りする定めなき空は、折々小雨を落し來り、山風寒く吹き上げて、木の葉さわめく物寂しさ、何とも知らぬ細き木に、白き花雪の如く咲き満ちたるを、何ぞと聞けど、薪の木とのみにて過ぎ行くに、右に峙つ崖の上より、走り落ちる水潺々として、滯れて色増す齒齶の葉に、草より青き雨蛙の雨を呼ぶ聲心細く、木蔭草蔭に次第に迫る夕闇の、そこはかと無く擴がり行くに何と無く急かれて、石垣高き行光坊のほとり、清冽氷の如き辨慶水の前を過

き更に廣き道を登り、戒壇堂に至りぬ。  
 小高き丘の土は踏むに危き苔に蔽はれ、灰色の霧茫々として襲ひ來り、二重の堂の頂は中は烟雨の中に消えて、錆たる白緑群青の古色蒼然たる趣何と無く床しく、暫時呆然として眺めしが、降る雨繁く風寒ければ、いるがはしく走り下り、大講堂の前に至る。四邊の木立濃く薄く霞みて、左右に並ぶ石燈籠の雨に濡れたる苔の色更に美しく、朱塗の殿宇色褪せて、綠青浮かぶ蓮辨の擬寶珠閉せる葺、高き勾欄、斯かる山上にありと思はれぬまで結構の美を盡したるに驚きて、中を覗へば、堂内暗く濕氣を帯びし風何所とも無く吹き來り、三世の諸佛微かに金色の光を放ちぬ、深く鎖せる物の影は數百年の秘密を包み、幾多の名匠此の山より出で、幾多京都の歴史は此の山に依つて飾られぬ。四明か嶽の將門純友、日吉神輿を奉せし衆徒、日蓮を出せし天台法華部、南北朝の争、其等様々なる事胸に浮びて佇みしが、雨の小止を待ちて危く滑る道を下り、力餅賣る茶店に至る。案内の老爺は之れにてお別れなり

と云ひて一行の徳利を渡し、店の老婆と暫時立話をなせしが、定めめの賃銀を受取るや、厚く禮して返り行きぬ。  
 雨晴れし空の雲早く飛び、ばらばらと音する木の葉の雫と寂しく、大塔宮が居給ひし堂の趾、今を限りの山櫻白く咲き亂れしが、無情の雨に濡れ、はらりと散り來る風情畫の如く、地に委したる花は空しく人の踏むに任して、影さへ見ゆる行潦、都の春は既に逝き、深山の春も今去らんとす、あはれ悲しきは旅の情かな。  
 根本中堂の建築を見んと茶店を出で、左にだらりと降れば、長く連る朱の廻廊ありて、廻廊の中央に二層の樓門有り。其所より中を覗へば左右の廻廊五十間、朱の圓柱太しき立てる彼方には、青銅の屋根高く聳えし薬師堂、人氣無ければ只空吹く風の音のみ荒たり、堂内の法の燈火幾百年の昔時より、暫時も消えし事なしと傳へ聞きしも、拜する間無く、險しき石磴を登り、開山大師が在唐の時、天台山香爐峰の神人より傳へしといふ榿の木を眺めたる

も、何の風情もなければ少時にして此所を去りぬ。

夕闇迫る文珠樓の、山門の如きを仰ぎつゝ、唐の五臺山の風を摸せしと云ふ

素木の建築、丹碧

燦爛たるに比して

味深く、圓き柱に

残る納札の數々、

霧に朽ちたる色、

寂びを含みし趣面

白く、一歩くくに

苔蒸す石階を降り

て、坂本道に出で

ぬ。之より道は只

下るのみにて、杉の村立蔭暗く、あやなき闇もたゞくしう、飛ぶが如くに走



竹生 36

り行くに、麓を包む夕靄は、白く烟りてたそがれし漫々たる琵琶の湖、貫  
之朝臣の墳墓を、残り惜しくも立寄りて、猶下る事六七町、竹生島見ゆる所に  
て、息つぎのヌゲツチを爲し、相呼び相應しつゝ、岩多き道を直下りに降り  
て、一時間許りにして、五十二段の嶮に至る、大學林を右に下り果てし所  
は、松杉枝を交へし青き芝生左に遙か白き道あり、日吉神社と記しぬ。暮れ  
しばかりの薄靄闇に、燈籠の火黄に輝やき、三津川のさやけき響濠々として  
聞えたり。

祭の宵宮と覺しく辻々の書行燈、提灯紅く點りて、子供の騒ぐ聲華やかに、  
ぼつりくゝと又も落ち来る雨の音、濡れぬ中にととある旅店に入りて、疲れ  
し足を休め、聽て案内に従ひて奥まりたる一室に至る、廊下より見れば藤這  
ひかゝる土塚の上に、一線白く微けき琵琶の湖、雲低う垂れし水の面灰色に  
烟りて、霧の中行く漁笛の長吼、物寂しくも淡れ行く。

昨夜の雨の名残の雲未だ晴れやらぬ東は、湖水の面漫々として、灰色に烟れる山より山、夢の如く射す弱き日銀光に流るゝ水平線上、蘆の緑青く連りて、眠る白帆の影は淡として消なん許り、朝响の膳に向ひて、次第に晴れ行く湖上の雲を眺めつゝ、雑談に時を移せし我等は、汽船の出帆に間も無しと聞き、忙しく仕度をなしたつ。

町は祭の賑ひに子供の走り廻る様嬉しげに、囃屋臺の若衆笛太鼓の拍子面白く踊る前を過ぎて坂を下り、左に遠く湖を望めば、葉末の雫ばららと散るあらし松原長く連り、柳の緑打烟る汽船發着所の白き旗朝の風に翻りて、ポツポツと鳴る汽笛は湖上遙に擴がりつゝ、雲より雲を傳ひ行く。水際に至れば白き船棧橋にかゝり、煙突を出る煤烟横に靡きて、今しも出帆の用意をな

三

す所、早くくと呼ぶボーイの聲に急ぎ立てられて、大津迄の切符を購ひ、漸くにして甲板に登りぬ。

汽船は岸を離るゝに従ひ、風靜に、波穏かに、坂本の町比叡の山、朝日を受けし白壁粉壁、青葉の中に隱見して、あらし松原白き砂地、微かになり行く太鼓の響、其等道すが



らの印象は、次第／＼に薄れ行きつゝ、湖上遙かに隔る儘に、雲未だ晴れぬ頂の四明が嶽の暗き緑は、灰色の雲と相接して、物寂しき事限無し。船は水を截る音心地好く、蜿蜒として長く引く船尾の泡沫を残しつゝ、東に遠く三上山の翠黛を望み、西に起伏する山の幾連互、麓に坂本城の趾なりしといふ小高き丘を眺めし時は、午前八時の頃なりき。

甲板は奇麗なる青莖を敷きぬ、菓子は如何と押賣する船員の、何所も同じ風俗の厭はしきはあれど、湖上の波静かにて、次第に展開し行く景色の面白きに慰められつゝ、彼の山の頂を三卷半巻きしといふ大蜈蚣は、如何に大なるものなりけんなど、果敢なき物語に時の移るを知らず、いつしか幾多の漁村を過ぎ、網干す家のくね柳、釣する人、赤き祠、波のまに／＼漂へるうつろ舟の、蘆の若葉に隠るゝなど、水郷の初夏の趣深く、蘆に續ける麥畑、菜の花の黄に霞みし彼方は、既に唐崎の松にして、岸の石垣を洗ふ波は、だぶり／＼と大きくうねり、耳を劈く汽笛の音は、水を渡りて響き渡る。

近づく儘に好く視れば、枝葉繁りて幹太く、翠蓋四方に擴がりし八景の一なる一つ松は、幾百の支柱に支へられて、青龍の蟠るが如し、志賀の都のいや榮に昌えし頃、植えしものなれども中に枯れて、今残れるは天正十九年に植えしものと聞きぬ、往ぬる昔、山崎の一戦に、果敢なき夢を破られし明智の一族、明智左馬之助が、大津の濱の戦に敵を思ふ様駈け腦まし、さんぶと許り馬を湖水に乗り入れし琵琶湖乗切の趾は、即ち南の方遙か一里を隔つれども、墨繪の龍の陣羽織を夕の風に吹かせつゝ、水に濡れたる愛馬の鬣を靜に叩き、西に傾く日を受けて、松に手綱を結びしは、昔ながらの此の枝にして、星移り世は變れども、松の緑は色かへず、湖水の水は千古の音を傳へて、我等の旅情を誘ふもの多かりき。松の傍には赤き幟立つ小さき祠あり、松より左青き芦原一面に連り、水の中なる二基の墓寂しく立ちて、朝な夕な波の音、永久の眠りの枕に通ふも哀深し、此所に新しき乗客を迎へて、波を截りつゝ、浮かび出づれば、日は暖かに白き甲板を照らして、柔かき風輕く

渡り、遙かに淡る、竹生島、空や水、水や空なる湖の、波のまにまに浮寐する白き水禽、悠々として遊ぶも静かなりき、次第に近づく大津の市街、瓦葺粉壁の影水に落ちて、棧橋近き渚には、赤き幟五色の吹流、晴れたる空に棚引く美はしさ、乗合の客に尋ねれば、三井寺の開帳なりと云ふに、折好くも來合せし事の喜しく、比叡に續く山々の、南に見ゆる山寺は高観音、棧橋の眞上に高く五色の旗幟翻るは、彼れぞ名高き三井寺と、中澤子の語る中に、舟はいつしか岸に着きて、どやどやと上る群集に誘はれ棧橋を傳ひ、疏水の流に沿ふて進み行く。

三井寺

長いく爪尖上りの坂路の兩側は、開帳の紅い長提灯が下つてゐて、白い脚絆に草鞋穿きの近郷近在の隣中らしいのが、ぞろぞろと繋がつて登つて行く。雨

上りの空を飛ぶ、霞の様な淡い雲が低く動いて、斜めに家の陰影を落す初夏の日は、ほかりく暖かく濡れた土から立つ水蒸気が柔かく顔に觸るのだ。軒を擦り抜ける燕子が、ひらりくさ白い腹を見せては、さつと返つて行く柳の緑、こもり繁つた樹の蔭に、長等山正觀世音菩薩と書いた、朱い大提灯二がつ並んでゐて、坂の突當りを右に折れると、稍廣くなつた境内の彼方此方に、ぎつしり並んだ露店が大聲に客を招いてゐる。人形屋、蛤屋玩具屋などの、大きな塗色の傘が幾つと無く重なつてゐる上に、むつと高い朱塗の樓門が青葉に包まれて立つてゐた。一行は狭い露店の前から、長等酒を賣る店を過ぎ、大津畫の並んだ家に来た。大津名所案内と大津畫を三四枚買つて、眞直に行當つた所から右を見る、花崗石の白い石段が、きらきら日光に輝いて、山の上から賑やかな鐘太鼓の音が落ちて来る。鐵柵に縋りつゝ、次第くに登つて行けば、眼下に低い若葉の森、其の又下に擴がつた大津の町の瓦の波が、うねく長く連つて、白く光るは湖水の水、漫々として果も無い中に青い洲が長くなつて湖上に浮かぶ白帆の影や、烟を長く引いた汽船まで、一望の中に集つて来る。石段を登り切つた所は右に月見の亭、古びた宮作りの軒に金鈴の青く



錆びたのが下つて紫の幔幕がひらり／＼と静かなる風に揺られてゐた。廣  
い境内は觀世音開扉と記された紅や青や紫や緋や藍色や、様々の色の大織  
が空を隠す迄に立て連なり、本堂の前に寄附の酒樽米俵牡丹櫻の造り花、西國  
三十三番と書いた萬燈などが並んでゐる堂の中は香の烟燈明の光ばら／＼  
と降る賽錢の雨に、讀經の聲と鉦鼓の響きが入り交つて、只雑然と喧がしい。  
山本君が御幸山の紀念碑に登つてゐる間に、自分は月見の亭を寫生して、石段  
の邊に來ると、中澤君は辨慶の力餅賣る茶屋を描いてゐた。  
本堂は天智天皇七年の創建、天智天武持統三帝御降誕の時の産湯の水は、此の  
境内の清泉で、往昔は七堂伽藍八百五十の僧房を構へ、比叡山延曆寺と其の威  
を争つた、圍城寺と云ふのは即ち之れで、其後度々の兵燹にかゝつて、今では僅  
か五十坊丈残つてゐる。本堂の右の鐘樓が即ち三井の晩鐘で、下から覗く  
と、廻つて上る様になつた階段の上で、案内者が一人一錢づゝ取つて、鐘の由來  
を話してゐる、暫らく立つて聞いて居たが、餘り面白くも無いので、其所を出  
て、濕つた土のだら／＼下りになつた、暗い森の下蔭を抜ける、廣い道で老杉  
暗き森を透けた強い日光が、所々の若葉に輝やいて、怪しい鳥の聲が微かに聞



える。赤穂義士遺物展覽と書いた寺の角を右に曲つて、圓滿院の練塀を左  
に、村雲橋を渡る、左右の木立は鬱蒼として、木の葉の匂ひが高く、何所とも無  
く丁子の花の香がする、暗い森の中に、げつと輝く山吹の花、ほろ／＼と落ちる椿  
の花が、白つぽい砂地に散らかつた風情は、如何にも静かで、今迄騒かしかつた  
本堂に比べるゝ殆で、山奥の様に思はれた。  
奥の院の金堂は其所を突當つた所で、堂の正面に大きな石燈籠が立つてゐ  
て、暗い杉の木の影響が丁度燈籠の下まで伸びてゐる、本尊の彌勒佛は、陳の南  
岳大師の禪室に有つたのを、百濟から傳來したので有るが、堂内暗く人も居な  
いので、三重の塔に進んで行く、何れも辨慶の釣鐘を是非見やうと云つて  
入口から這入ると、一錢づゝの案内料を取られた。暗い古びた腰板の廻りを  
廻ると、高い庇から落下する外光が、蒼い釣鐘に射つて寂しい色に光り、四邊の  
暗さは愈々深くなつて來る、朽ちなんとする四隅の柱は太さ一抱へも有らう  
か、釣鐘を吊つた太い梁、龍頭のくい込む邊が非常に深く凹んでゐた、案内の男  
の年は五十許り、縞の唐襪に黒木綿の紋付、長い竹の棒を持つて、か／＼と釣  
鐘を叩きながら、

「抑も此の鐘は朱雀天皇の御宇、倭藤太秀郷といふ人があらしつて、瀬田の長橋を通行せられた。其時に龍宮の乙姫様が頼んで云ふには、向ふに見える三上山に住む蜈蚣が山を三巻半巻いた、あれが妾の命を取る程に助けられえと斯う申された。三巻半巻いた、よろしいか、其所で秀郷さんが、其弓と矢あ持つて、其の大蜈蚣を殺されたので、龍宮と云ふ所に連れて行かれて、此の釣鐘を貰ふて歸られた。其を當山に奉納されたので、此の鐘樓は昔から只の一度も建て替た事が無い、朽ちることは切つて下し、初めは高かつたのかだん／＼と切りつめたので、此の様に短うなつた。其の後比叡山の衆と此の三井寺との戦が有つて、三井寺の方は敗けて了ふた、其の時辨慶が衰い力持で此の鐘



を引擦て、えいさ／＼と坂本の坂を曳きすり上げられたが、夜になると、三井寺にいなう、三井寺にいなうとおほせられるので、辨慶が腹あ立しつて、谷の中にころ／＼と投げ込んで了はれたのだ。其を漸う引上げて来たので、此の様に鐘が傷だらけぢや。此の龜裂も初めは豪う大きかつたが、今では之れ丈になつて了ふた。其で之なる丸い穴は、天文十七年盆の十五日、今迄女人禁制の御山で有つたのを參詣を許した所が、夕方一人の若い女子が有つて、龍宮の鐘からは非鏡が欲しいと云ふので、釣鐘の周圍をぐる／＼とめぐつては撫でめぐつては撫で居る中に、はるりと落ちたのが、此所の金ぢや、其の女子は其の儘何所が見えなくなつた。云ふ事ぢや、さあ後の衆はすうつと中に御道入り」

と又かん／＼と鐘を叩いては、饒舌つてゐる。自分等は其の儘暗い鐘樓を出るさ、かつと射す初夏の光が木にも草にも流れて、遙かに本堂の方の響が聞える。暖かい日に蒸された風がむつと顔を掠めて、幾千と無く飛ぶ羽蟻の群が、森から森へと飛んでゐる。



四

紅き提灯を吊せし低き屋根舟の中には、既に八九人の乗客を満し、先なる舟の洞口に消ゆるを待つて、今や纜を解かんとするなり。

見上る上は萬疊の緑、志賀山續きの青葉若葉は、雲に近く生ひ繁り、左右に高き絶壁の下を流るゝ疏水の水蒼く渦巻きて、黒暗々たる隧道の中に流れ行く。折しも我等を乗せし舟は、更に年若き婦人と可愛き四歳許りの小兒を加へて、纜を解かんとするに、ぼつり／＼と落し來る小雨、舷を打ち水に落ちて、又も雨かと心細く、低き屋根の下に頭を入れ、今か／＼と待つ間も無く、舟は矢の如き急流に浮かびて、水のまに／＼下り初めつ。苔蒸したる左右の絶壁は、見る／＼中に遠ざかり、壓する如く聳立つ志賀山を、今や名残と仰ぎ視れば、俄に近づく洞口は、あなやと見る間に我等の舟を呑み盡して、

黒暗々たる四壁夜より暗く、流るゝ水の激する音、轟々として轟き渡り、僅かに照らす提灯の火に蠢く人の頭を見るのみ。斯くて後方を顧れば流れ入る外光は暗き水面を走り、波のうね／＼遠ざかり行く洞口は、次第／＼に小さくなりて、水の光も消え去れば、四面只之れ水の聲、エ、ホー／＼と相呼應する舟夫の聲水に響きて恐ろしく、其所とも知らず流れ行く事三十分許り、水吹く風冷やかに、常世の國を旅する如き心地して、只黙然と眺むれば、俄に滄々たる音洞内に飭して、次第／＼に近づくに、音する方は俄に白く、提灯の火に映じて、右に高き絶壁の上より、五尺餘りの瀑布靉々として落下し來る。

舟は流るゝ儘に揺めきつゝ、水に映る紅き光を碎き、夢現とも分ち難き境を、幻の如く眺めながらに下り行けば、何とも知れぬ虫提灯の火に集り、ぱたり／＼と水を掠めて飛ぶ蝙蝠の聲いと幽かに、今か／＼と洞内を出るを待てば、遙かに遠く小さき光顯れて、一寸／＼大きくなり行く待遠じさ、四

壁に響く水の音はいつしか耳に慣れて暗々たる岩、清水滴る苔の色までさやかに見えて、幽かに動く波の痕、次第／＼に迫り来る外光は、仄白く水の面を走り、寸となり尺となり行く洞口の、若葉を照らす日光、赫奕として燃ゆるが如し。

舟は静かに第一の隧道を出れば、俄に動く大氣の動搖、日光遍き草に木に、初夏の風爽やかに渡り、葦たんぼ、六形花水にすれ／＼咲く花の影を追ふて流れ行けば、右は巖々たる断崖の、緑を破る赤き躑躅、山吹の黄に亂れ散る風情面白く、恍惚として過ぎ行く前面に、第二の隧道は顯はれぬ。

吸ふが如く我等の舟は暗々たる洞口に入る。ごとり／＼と響く舵の音、舷を撲つ波いと、寂しく、流のまに／＼下り行く事一時間許り、折しも微かに紅き光見えて、互に相呼び相應じ、舟は擦れなん許りに近づきぬ、舳に立てる黒き影は、兩手に細き繩を握り、流に逆らつて洞内の針線を傳ひ行く様もどかしく、紅き提灯の火影に透かせば、若き女子五六人、仄かに紅き光を受け

て美しく、漕ぎ分れ行く舟と舟と、次第に微かに消えて行く心細さ、譬へん様なく黒白もわかぬ中空に、五色に輝く花火の色の、忽然として消ゆるが如く、戀ならなくに果敢なき人の面影、現に残るも佗しかりき。

斯くて再び洞口を出れば、眩き許り輝ける四邊の風光燦然として、下萌出づる若草に、有るか無きかの風薫り、鶯の音寛く流る、舟悠々として眠るが如し、左は高低極りなき丘の上に、麥の緑打ち續き茅舎村屋點々たるを、後に／＼と見捨てつ、山科の里に着きぬ。

草は烟り、木は霞む、夏まだ早き山里の、酒旗翩翩として麥吹く風に靡き、犬渡り行く土橋に、陽炎ちら／＼立つも暖かく、此里に二三の乗客を下して、舟は再び流れの儘に下らんとす、山科は赤穂の義士大石内蔵之助が閑居の趾今は屋敷の礎も無く、菜畝麥圃、只徒らに鶏犬の聲を聞くのみなりと、客の物語に残惜しくも訪はず、柿の若葉日に透けて、黄に輝く邊を過ぎ、水に従つて漂ひ行けば、山々遠く退きて、緑を敷ける十里の平蕪、斯くて下

る事三十分蹴上の隧道はいつしか我等の前に迫りて、再び舟は闇黒の中に誘はれ、死の海を吹く陰風冷に、黙々として物言はず、煙草燻らす光ばつと明るくなるかと思れば、蒼白き烟のみ暗き中に残りて、寂々寥々たる舟の中、生ながら黄泉路を繞る心地しつゝ、漸くにして蹴上の發着所に至りぬ。蒼き水は靜に澱みて、青葉を涵す深き淵、日の光豊かに照らす山々は、松の緑永久にして雲悠々、我等は川を横ぎる橋を渡り、右に鐵柵の邊に立てば、折りしもインクラインを降る舟は、米俵を山の如くに満載し、細長きトロツクの如き物に乗りし儘、傾斜烈しき坂をレールの儘に下り行く、下なる川は運河に落ちる流にして、舟は水深き所に至れば、トロックを離れて、靜かに彼方に流れ行く様面白く、少時呆然として立盡しぬ。

柳の緑一夜の雨に長く亂れて、晴れたる空を白き雲靜かに動き、家鴨鳴く田家を右に、陶器造る粟田口製陶會社の前を過ぐ、路傍に面して陳列したる花瓶の色美はしく、いづれも暫時立止りしが、其れより道を右に取りて、水車

小屋の角より、里の小川の流を傳ひ、若葉さす雜木の並木、風に戦ける麥畑、鋤き通したる田中の六形花、温める水に鳴く田螺、一步／＼に水に飛込む蛙など、目に入るもの皆活々として面白く、疏水の支流に従つて、打興じつゝ、歩み行けば、青楓婆娑たる影を疊み、鬱々たる深林の奥より、幽かに響く瀑布の音、熊野三所權現を勸請したる若王子の社は森の中に有り、道は流に従つてうね／＼長く曲り行き、遙かに畑を隔て、黒く繁れる森の上に、日に霞みたる黒谷の塔、愛宕の山は有るか無きかに淡れつゝ、青き空より落る雲雀の歌、雲の上にと消えて行く。我等は小さき土橋を渡り、葛這ひかゝる土塀に沿ふて、鹿が谷の尼寺の前より、法然院に至らんと、竹藪暗き邊を過ぐ、此所に松虫鈴虫の墓ありと聞きて、寺の石段を登るに苔蒸す石、苔蒸す老樹、人も訪ひ來ぬ法の庭は、寂寞として畫靜かに、永き日ながら讀經の聲も聞こえず、安樂寺の本堂を左に見て、右に小高き丘を登れば、年經し古木の蔭に小やかなる石塔二基、青葉の風に吹かれつゝ、永久の眠を貪れり。

之や昔時は鳥羽院の寵妃、後宮三千の華麗を空うせし、二十歳の春の朧月夜、君が情に妾が百年の齡は惜しからねども、長生殿裏の夢は永久に連理の契を結ぶ事難く、華清宮の花、馬嵬一片の黄土と消ゆる世の習ひ、朝の露、夕の雨、花、花を追ふて飛び、流水暫も止まらず、翡翠の玉かづら、玉の顔、いつかは北邙の烟と變る果敢なき世に、一日の榮を傲るうたてさを思ひ、姉妹一つに心を定めて、大内山を逃れ出で、法然上人の御弟子となりて、一向専念の道に分け入りし古き昔の夢の跡、往蓮安樂の二僧は、其れが爲めに上皇の怒に觸れて刑に處せられ、法然房は土佐の國へと流されぬ。あはれ花の如き一代の佳人が、教の爲めに隠れたる所、山の緑、松の嵐、千古の夢を語れども、吊ふ人無き石塔は、落葉積り花散りて、春に後れし白き蝶の、翼休めて止るのみ。



此寺を出づれば松杉暗き森の中に、苔に濡れたる敷石長く續きて、濕氣を帯びし風冷やかに、阿育王の塔を右に見て、萱葺の惣門を潜れば、寂々寥々たる境内、物音も無く静まりかへり、只耳に入るは風の音、岩間を落る水の響、掃き清めたる土を踏んで、古雅なる浴室の前を過ぎ本堂の方に至る。嘗ては法然上人草庵を營みし舊蹟にして、萬無上人の開基、六時禮讚の靈場と聞きしが、此の本堂に登りて、世に無き人の供養を頼み、成佛せしや否やを問へば、得道したるものは供養の中ばに、燈火明滅する暗き本尊の後方を、白衣の姿にて現世に有りし形を顯し、影の如くに消えて行き、成佛せざるは經を終る迄姿を示さず、京大阪の者は更なり、遠く北國の端より登り來て、供養を頼む者多しと聞きしも、銀閣寺の見物に、いづれも心急がれしかば、竹村暗き裏門より、椿落散る石階を降り、桑畑續き草青き凹凸道を日に照らされつゝも歩み去りぬ。

銀閣寺

青葉の風が颯と渡る。白い砂に落ちた木の蔭が動いて、ほろりさ椿の花が落ちる。一面苔の着いた敷石は踏む人も無く突當りの中門を道入れれば、右に素木の参観門芝生の縁が柔かく擴がった中を抜けて、薄暗い庫裡の土間に立つて案内を乞ふ。机を控えて帳面を繰つてゐた番僧が、後方を向いて小聲に人を呼んだ。

黒光りのする羽目の前に、長い／＼鎗が立つてゐて、其の傍に盤木が吊してある。森として人氣の無い寒さが身に沁む様で、少時立つて待つて居ると、十四五の小坊主が黒い腰衣着けて顯はれた。此方へ云ふので、靴の紐を解いて上に昇ると、番僧が拜觀料を納めて切符を渡す。先づ玄關を抜けて、ぎ／＼と音のする廣い廊下を行けば、小坊主は先に立つて歩みながら。之れなるは御客殿唐戸の畫は岸文進の筆、岸文進の筆、襖の畫は蕪村の筆、蕪村

置かれた所に來る。之れなるは、森なるは、下陸の御用ゐの御標であり、中の間の仙人畫しは、海北友雪の筆、友雪の筆、東の間の山水は、道達軒の筆、西の間の山水は、狩野隆也の筆、狩野隆也の筆、襖は土



の筆、本尊の釋迦如來は日護上人の御作、と黄ろい聲を張上げて、吐鳴つて來たが、組紐の棚が出来て、金襴の古びた褥の

佐光起、蘆と薄の屏風は相阿彌の筆、相阿彌の筆であります。呼吸も吐かず、饒舌りながら、ずん／＼と歩いて行くので、長く見て居る事も出来ず、東求堂に道入る。

東求堂は足利將軍義政公の持佛堂、逢棚の張付の梅の墨畫は古法眼元信の筆、古法眼元信の筆、腰障子の畫は狩野永納の筆、正面の襖と床は相阿彌か筆、山水の畫は丸山應舉の筆であります。次の間に並んである屏風は總て相阿彌の筆。

と右に曲るので、尾いて行くと、正面に義政公法体の木像が在つて、東求堂と書いた額が有る。

之は義政公の自筆で、素木の建築の何所迄も淡白で寂しい味は、一種胸に迫る様な悲しい趣が有る。此所から見ると、池は直ぐ勾欄の下迄小波を寄せて、蓮の枯葉の中に小さな魚の光るのが、水を透して覗かれる。袈裟形の手水鉢、太秦形の燈籠を見て、客殿の前から廊下を通り過ぎて、庭下駄を穿くと、日は暖かに輝き渡つて高く積んだ直白い砂が眩しい様にきら／＼する。之れなる砂は銀沙灘丸く高い砂は向月臺前の池は錦鏡池と云つて、向ふに見

える山が月待つ山、と小坊主は投出す様に吐鳴つて歩いて行く。蟬で銀閣の下に来ると、下駄を脱ぎ捨て昇るので、下は心空殿、上は潮音閣、未だ銀箔を置かぬ中に、義政公が薨じたので、下塗の儘に年を経た建築は少しの飾も無く、雨に洒され霧に朽ちて、如何にも寂しい色が多い、狭い階段を上ると、中央の壇上には雲慶作の観音像が置かれて有つて、水石の機が一望の下に集るのだ、小坊主は堂内を案内して、再び庭に出た。

前に並んだ石は北斗石と申します、此方に松の木の下にあるのが落星石、落星石、向ふに見える石の橋は迎仙橋、其の右の島が仙人洲、真中に一つ有るのが浮石であります。

と池を右に廻つて行く。

之れなる石は壽星石、左に水に出たのが細川石、山名石、細川石、山名石、此の橋を濯錦橋と云つて、之の石は天柱峯と申します、後ろの間は落照岡、一つ離れてあるのが島山石、右なる木は千代の槇。

と池を繞つて東の方に廻ると、銀閣は日を上から受けて、只暖く、水草浮かぶ池の水は、蒼い空を映して、白い雲が靜かに水面を動いて行く。

落照岡の赤松の幹に、日が照つて草が崩えて、深山葦や虎の尾や、名も無い草の小さな花が、其所ら一面咲き亂れて、深閑とした静かな森から岩間を落る水の音が、深々として響いて来る。

「回雁峯、回雁峯といふのは此の石であります、山から落ちて来る瀑布が洗月泉下なる石は龍蟠石に濯纒石、此の石橋を臥雲橋と申します、池の中の石は大内石、此等の石は皆諸大名献上の石であります。」と山の麓をぐるりと廻つて小さな石橋の上に来た。

「今渡る橋は仙柱橋、之れなる石は香爐峯虎の様なのは伏虎石、右が布袋石に左が白鶴島に釣月臺。」と小坊主はすん／＼先に立つて歩いて行く、いづれの石も同じ様なので、只呆然眺めて居る、此方へ立って茶席の方に伴れて行く。

東求堂の奥に當る四疊半の小さな茶室、薄暗い光が上の方から来て、軸は蕪村の畫らしい畧齋、手を行儀好く膝に重ねて、今か／＼と待つて居る、小坊主は銀閣寺とある紅白の押物の菓子を持って来て、客の前に並べて、少時すると薄茶を一人／＼の前に運んで来た。自分等は之を喫し了つてから、静かに元の廊下に出ると、風吹き渡る池の面は小波が奇麗に立つて、遙かにばん／＼と鳴

る盤木の音が、庫裡の方から響いて来た。

五

真晝の光空に溶けて雲に聲ある揚雲雀、三十六峯の夏濃やかに、風に色ある淺緑は、見渡す限り遠く伸びて、草青く麥繁りたる洛東の田中の小道、蹈む所皆花ならざるはなく、静心なく流れ行く里の小川の水ぬるみて、日に霞みたる塔影樹影、我等はだら／＼上りの坂道を昇り、大の宇山を後に残し、松高き木蔭を過ぎ、左に曲れば赤き山門の邊に出づ。日影を避けて並べし茶店の床几に腰を下し、澁茶二三杯を喫しつゝ、四邊を見れば、左手に廣き石階長く連りて、松高き梢を抜ける三重の塔、飛雲簷にかゝりて、微風幽かに金鈴を動かし、楓の若葉裾を隠せる彼方には、本堂の薨日に映じて輝きぬ、開祖は戒算上人、本尊の阿彌陀佛は慈覺大師の作にして、元白河の女院離宮の地な

りしを、正暦三年此所に伽藍を建立して、真如堂と稱ふ。十夜念佛は、始めて此寺にて行ひしものにて、今猶十一月五日に開きて、十六日の結願、十日十夜の別時念佛息らすと、茶店の老媪の語るを聞きつゝ、晝にす可き所少なき儘に、黒谷に行かんと神樂の岡を右に寂しき町を歩み、南する事一二町、左に狭き小路を曲りて日影に疎き土塀の蔭、若草萌る道を進めば、聽て左手に登る石磴ありて、登り果てし所は即ち紫雲山金戒光明寺、本堂の前に熊谷蓮生坊の鎧掛松あり、須磨の嵐に無常を感じ、此所に遁世したる時、着せし鎧を池にて洗ひ、此の松に掛けしと云ひ傳へられて、幾百年の綠翠蓋を披き、梢吹く嵐朝々暮々の梵音に和せり、我等は阿彌陀堂經藏觀音堂を巡拜して石段を降り、熊谷堂の傍に至る、池に臨める小さき堂には、既に四五人の參拜者あり、中央の壇上二尺許の阿彌陀佛、池水の反映を受けて明るく輝やき、燦然たる堂内は、縷々として立騰る香烟に包まれ、合掌念佛の聲いと々尊く思はれぬ。腰衣着けたる老僧は、長き竿を採りて指しつゝ、

「之れなる脇壇の母衣絹の御影は、法然上人様五十三歳の御筆、源平一の谷の戦に、無官の太夫敦盛卿の首を打たれました世の中の無情を感じ、出家得度の志を起された熊谷次郎直實様は、法然上人様に御目通を致しまして、師弟の誓を遊ばされた、其の時の形見にと御自身鏡に映る影を敦盛卿の母衣に描かれたのが、此の御影であります、其の隣は熊谷蓮生坊自作の御木像、無官太夫敦盛卿十六歳の畫像は、法然上人様の御直筆であります。」

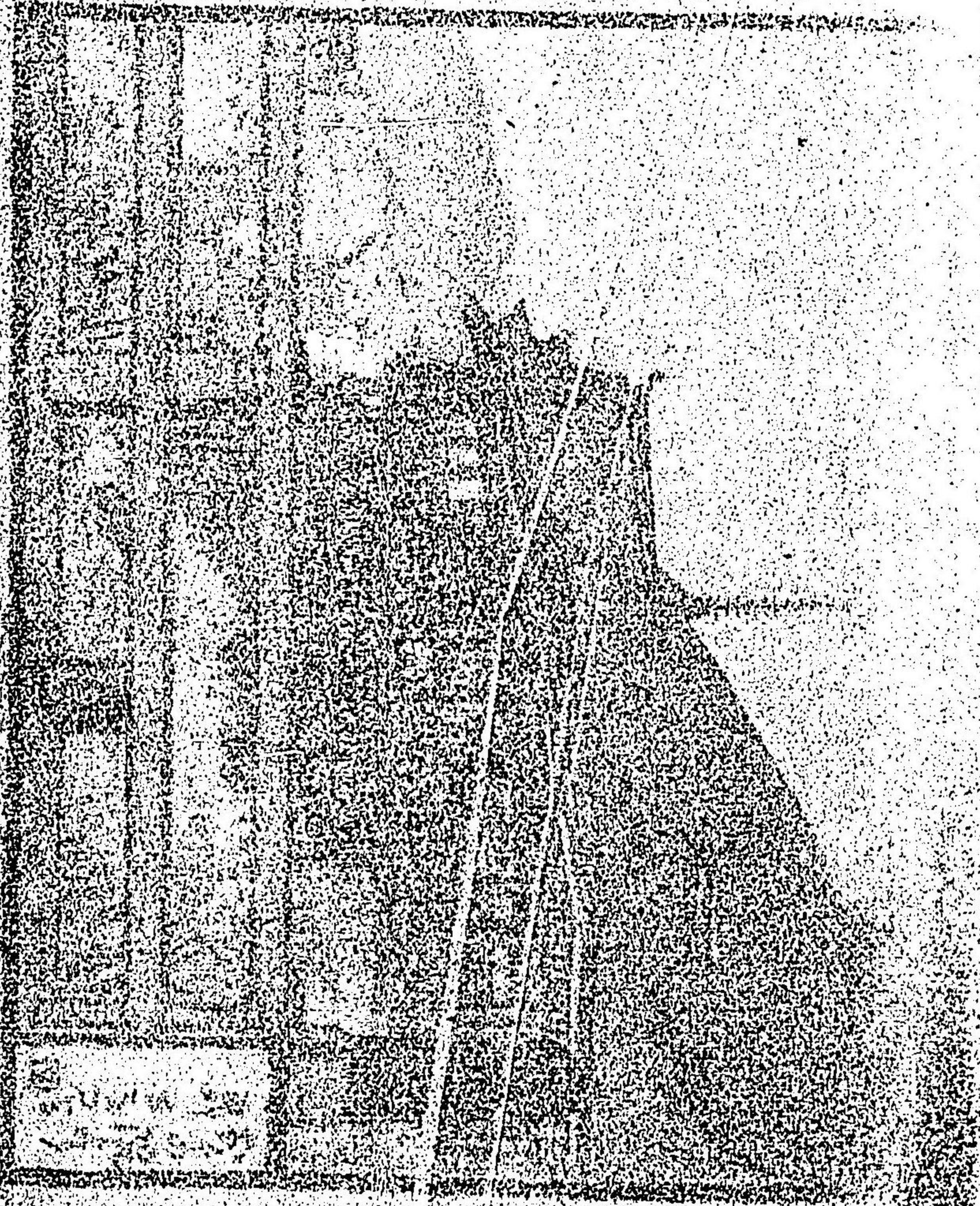
と哀れなる聲にて物語る。此所にて蓮生法師略縁起を求め、池の渚に立ちて後方を顧れば、木立繁れる石階の上に、陰影を落せる綠暗く、青葉若葉に隠れし三重の塔ほのかに見えて、古りたる色彩面白く、闕伽桶さげて登り行く法師の後姿と、日光に輝く石段と、ゆらくと動く地上の影と、時と所にふさはしき自然の色に眺め入りて、歩むとも無く岡崎町を南に、南禪寺停留場に向ふ。

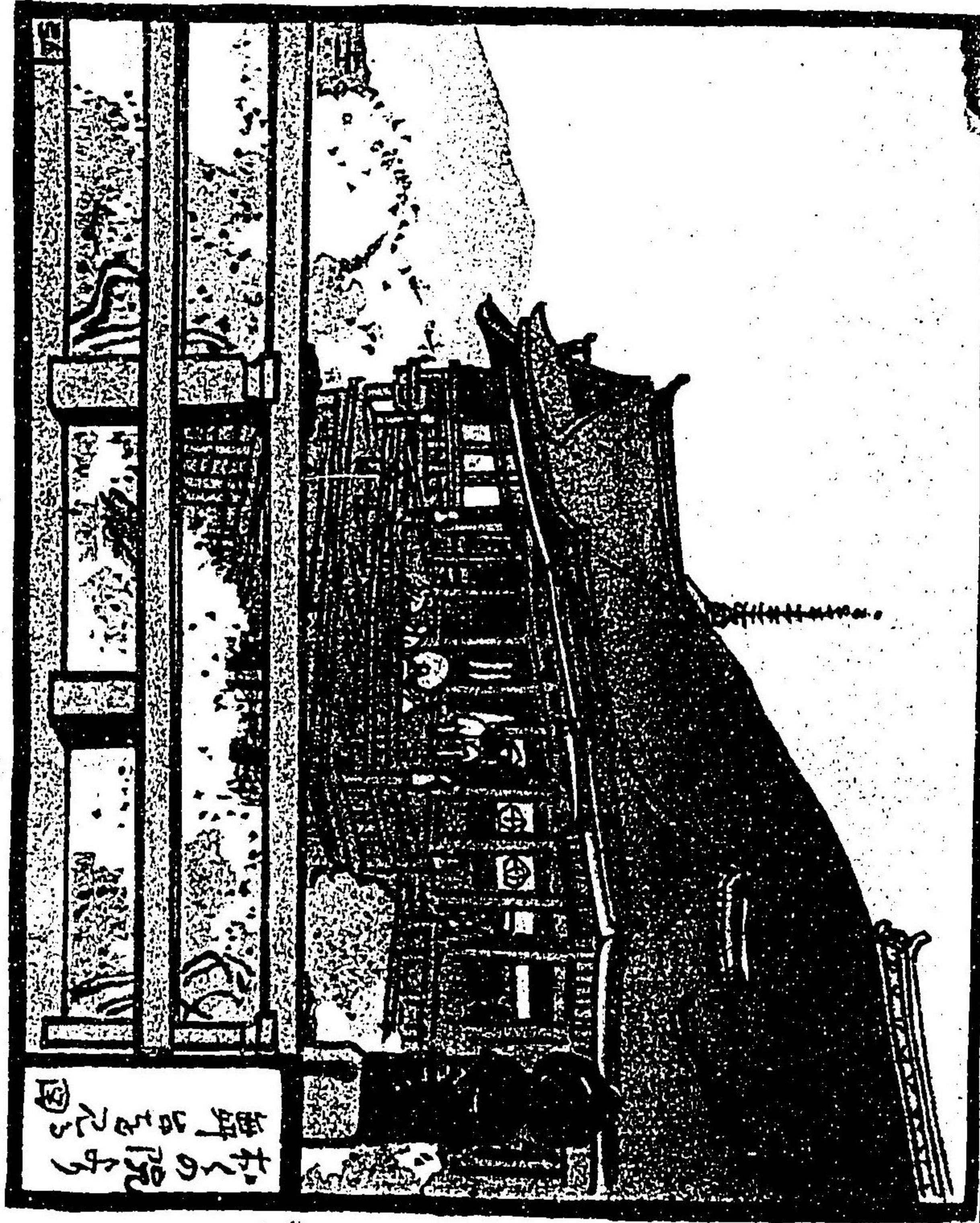
時は既に四時を過ぎて、午餐を認めねば空腹なる事甚しく、とある洋食店に



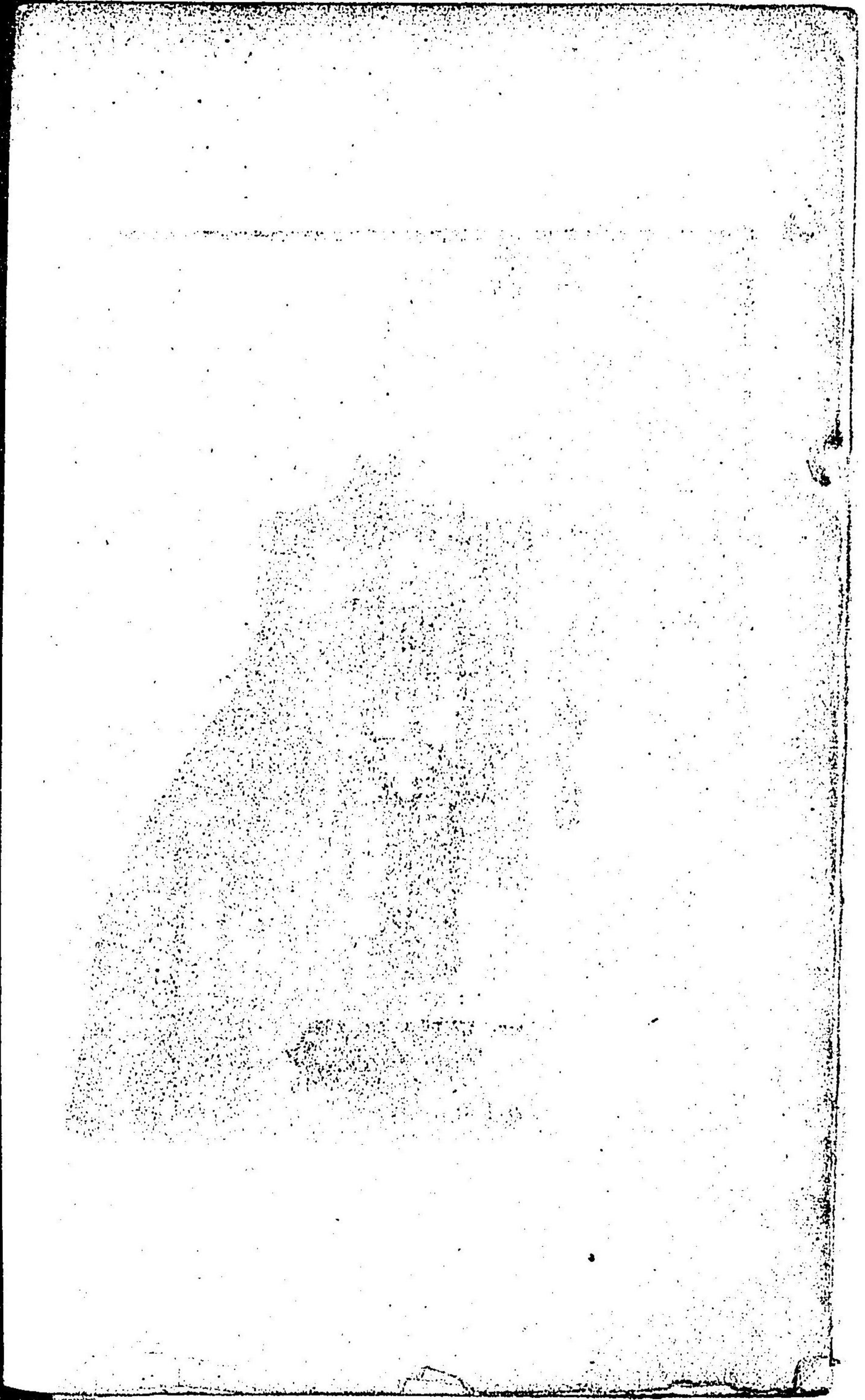
入りて、僅に飢を凌ぎ、南禪寺停留場より電車に乗りて、四條の宿に着きしは夕暮近き頃なりき。

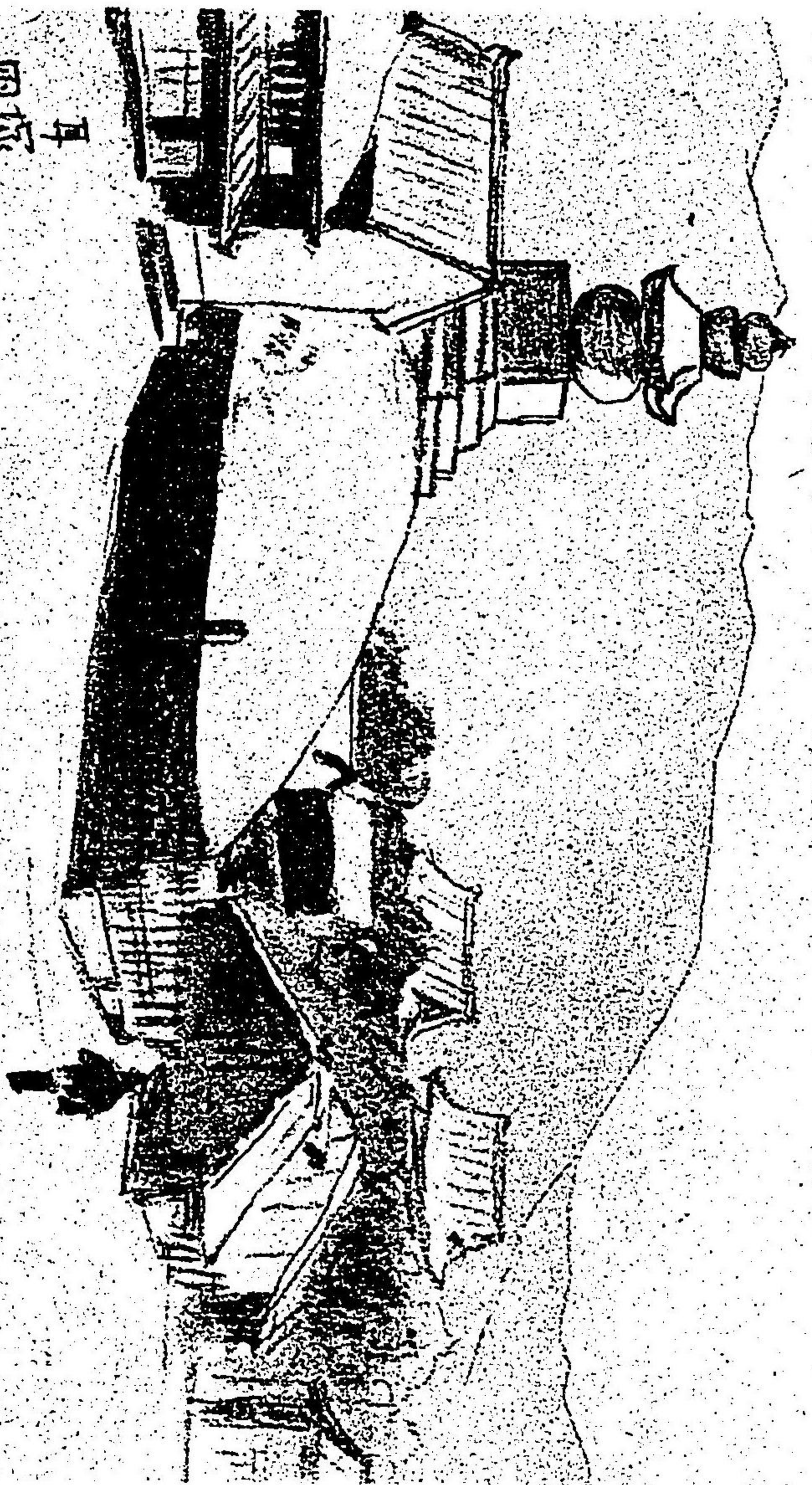
横雲柵引く夕の空に、仄かに浮かぶ十四日の月白く、臙ろに暮るゝ岸の柳、大比叡の頂紅き残暎は、麓の靄に薄れ行きて、川を隔つる燈火ちら／＼と星の如く、蒼茫としてたそがるゝ四條五條、更け行く儘に月光水の如く欄干に流れて、烟り果てたる東山、現とも無く寝ながら聞けば、枕に通ふ鴨川の水聲、絃歌の響、夢路を誘ふ鐘の音陰々として響き渡る。





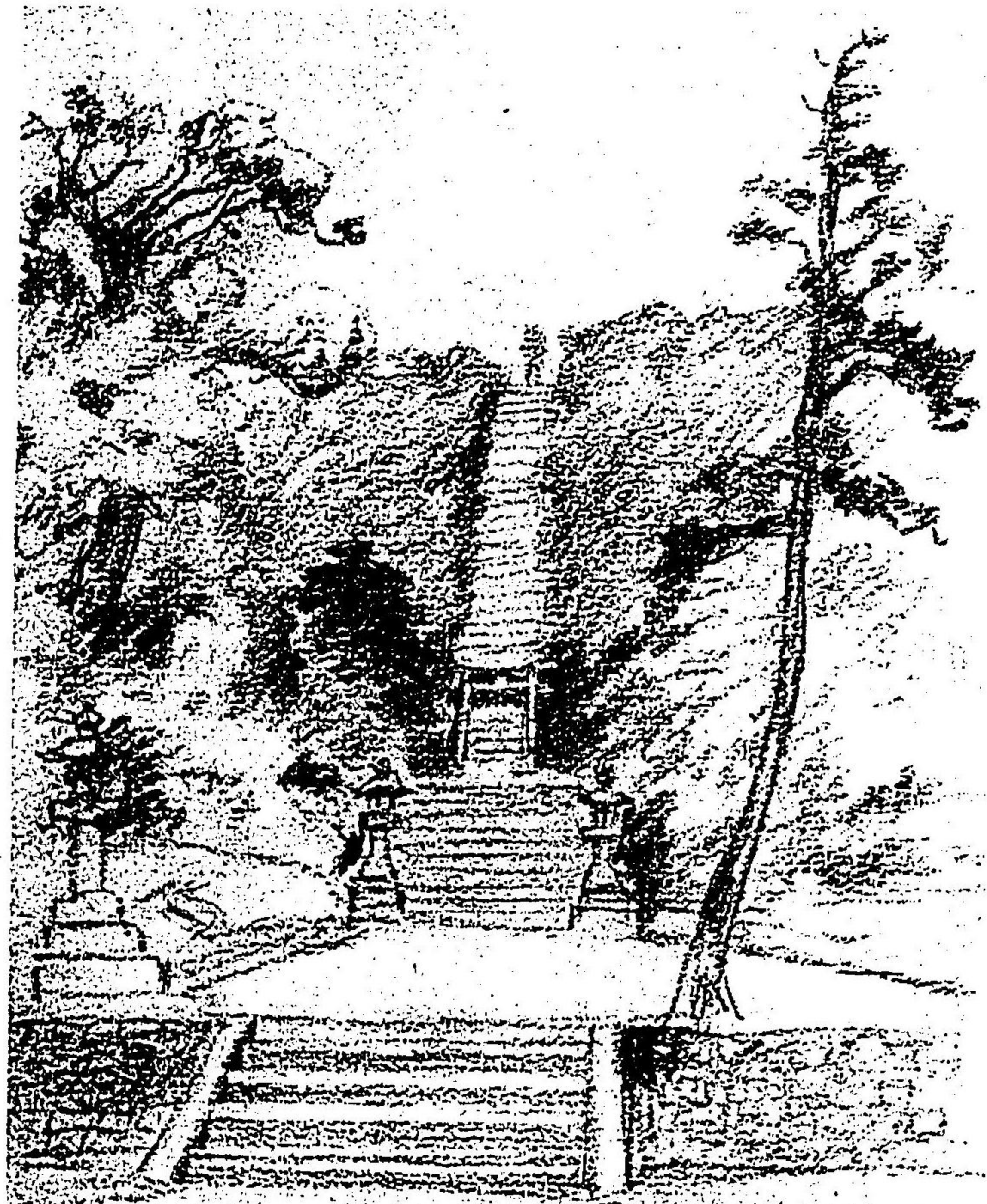
本願寺  
御影堂





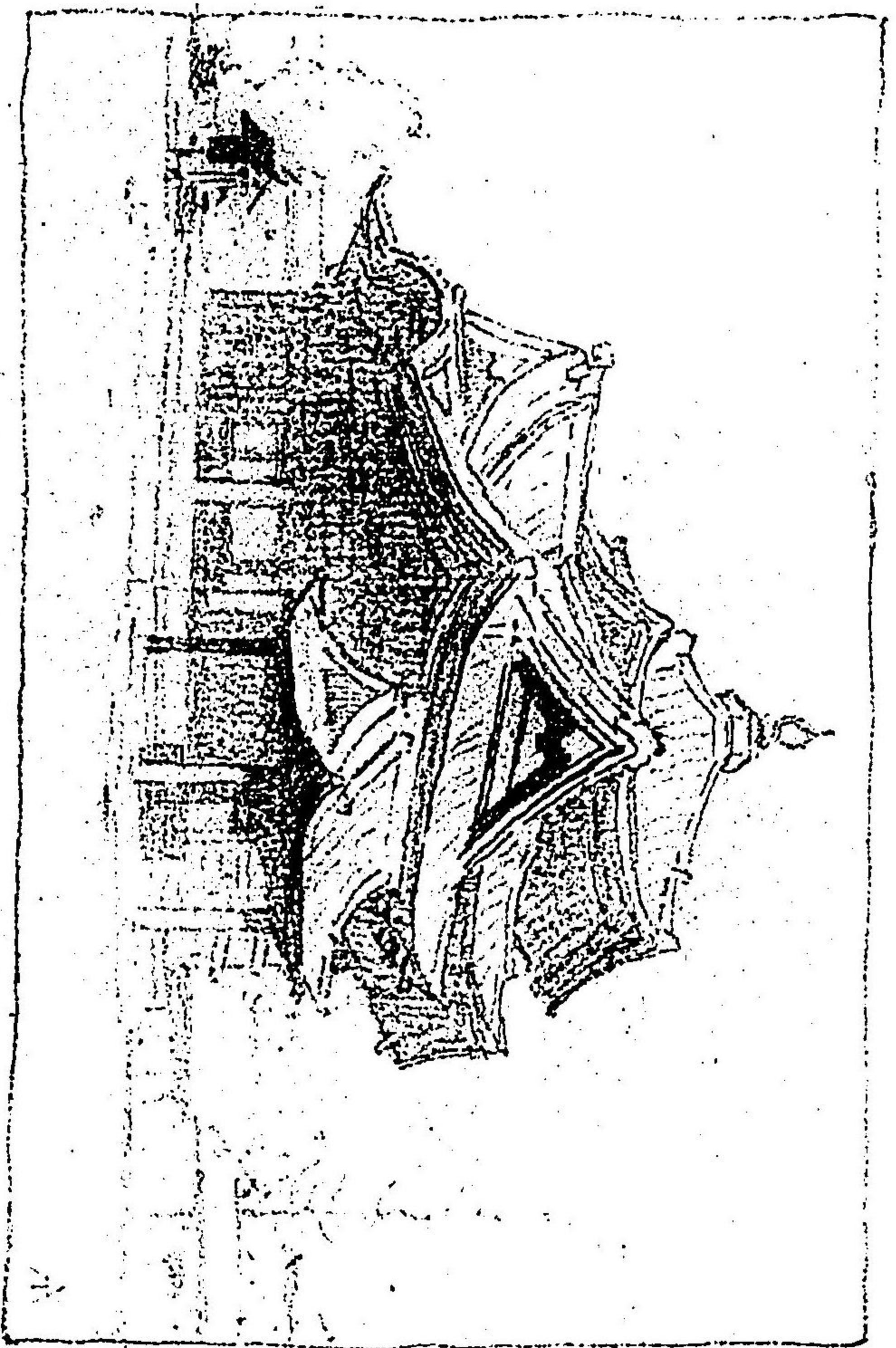
耳  
塚

耳  
塚  
小  
吉  
鐘  
林



阿彌陀  
寺  
田

阿彌陀  
寺  
鐘  
林  
小



六 角 堂 見 恭



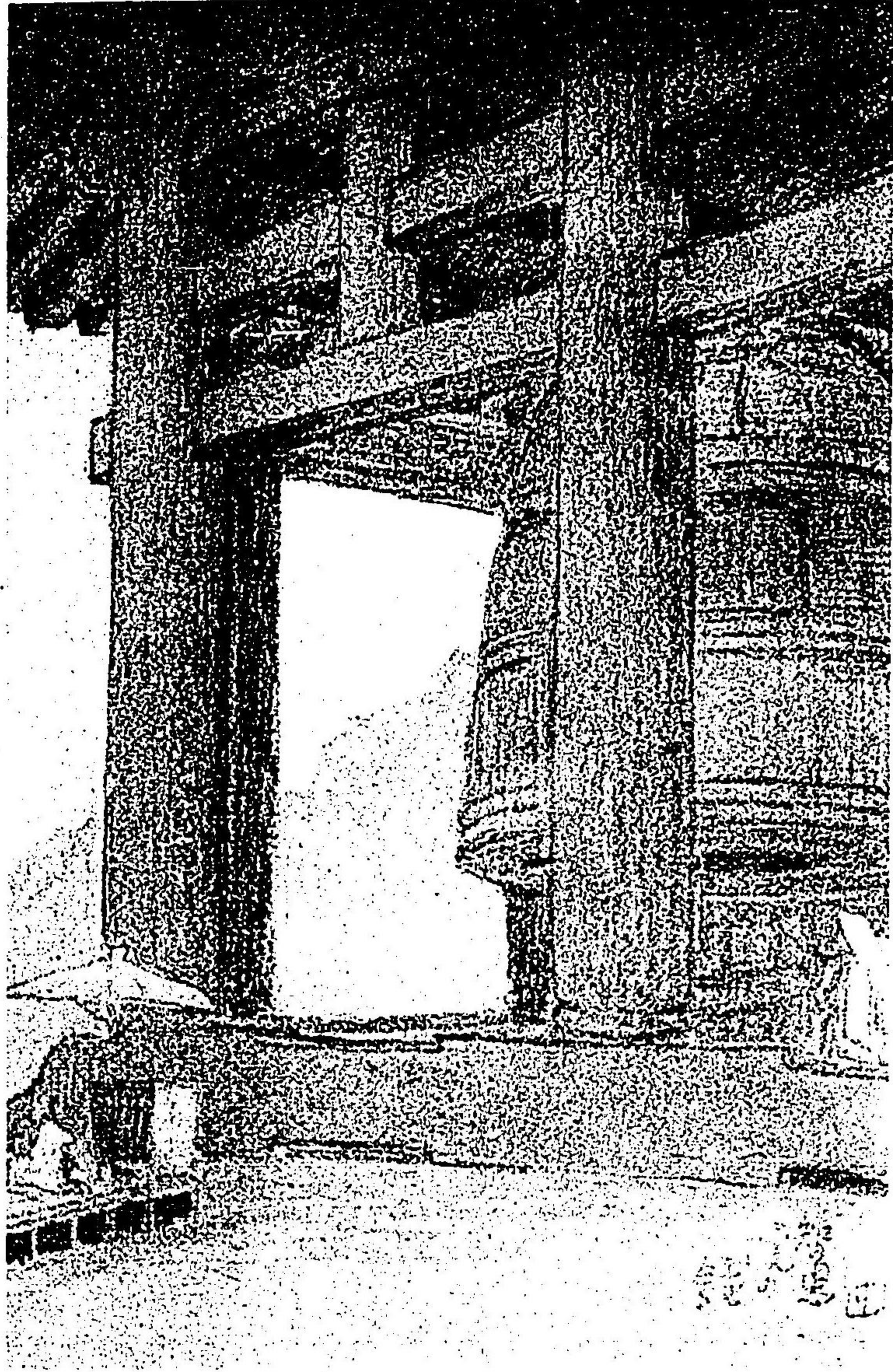
壹 期 永  
高 風 水 小

四



門山寺禪前  
助之森本山





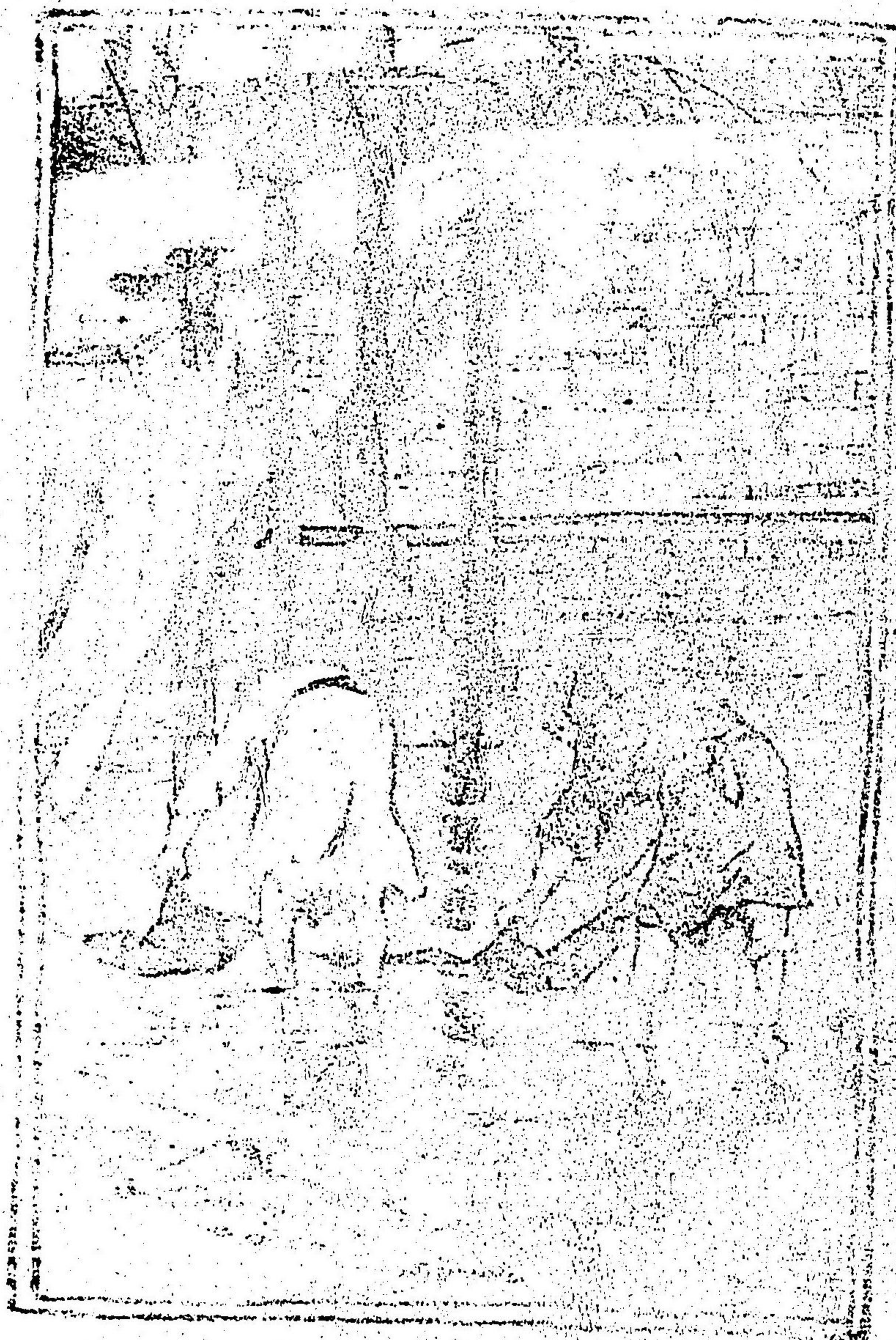
鐘の院恩智  
吉鍾林小





# 東山

幽かに仄めく光隙間を漏れて、枕に近き水の音、起つて雨戸を開けば、流れ  
入る曙光淡き事水の如く、澄み渡りたる大空の、星斗漸う光を斂めて、朝靄  
深き東山、家々の炊烟未だ起らず、川より昇る水氣白く靡きて、夢より明る  
四條五條の朝景色、銀色に満ちたる山と水と、弱き光の描かば如何に面白か  
る可きにと思ふ中、棚引く雲に一脈の紅動き初めて、次第く晴れ行く空  
明るくなり、蟬を出づる鳥の聲川を渡りて飛び去りぬ。  
東山見物に今日の日を暮らさんと、宿を出しは午前八時少し過ぎし頃にし  
て、高く昇りたる日は汗する許り暖く、先づ八坂神社に詣でんと、四條の鐵



橋を渡り、淺井忠氏が補助されしと云ふ、磯田女史の陶器鬻げる店の前を過ぎ、往來賑ふ祇園町を、打連立ちて歩みつゝ、古道具賣る店に立ちて、花瓶の形面白さを探しなごしつ、聽て社頭の石段を昇る。樓門には左右の隨身あり、松の影敷く石疊みを踏めば、梢に通ふ風颯々として、拜殿の彼方に拍手の音高く聞え、詣する人絶ざれば賑はしき事限無し。本殿の後方には。小さき攝社末社數多並びて、日に照らされし丹き祠の色美はしく、日傘翳したる子守の、打群れし様繪の如くなりき。夏の祭は加茂の葵祭と共に年中行事の一に數へられ、練り出る山鉾の美はしきは、一本に數萬の金を費せし古金爛、覺る許りのもの多しと聞きしも、季早ければ見る事能はず、徒に境内の彼方此方を眺むるのみにて、南の樓門を出で、二軒茶屋の前より石の華表を潜り、花見小路を過ぎて建仁寺に至る、樅の木高く繁りて下蔭暗き境内を歩めば、左に古雅なる建築の浴室あり、往昔は堂塔伽藍縷彫の美を極めしも、天文の年の火災に罹りて、今残れるは東福寺より移せるもの、鐘樓の鐘は融

大臣が別業、河原の院に有りしが一度河底に埋もれしを曳上げて運びしと云ひ傳へられつ、前なる道は大和大路、東に繁る竹藪に沿ふて、安井の金比羅の前を登れば、白壁多き家の上に、屹然として聳ゆる八坂の塔、晴れし空と青葉の山と、白く輝く浮雲とを背景にせる景色面白く、次第／＼に登りて、塔の邊に至れば人家密に建て連りし周圍は、寸地を餘さず、嘗ては廣かりし寺内も今は只塔のみ残る物寂しさ。斯て阿古屋茶屋の前を過ぎ、悪七兵衛景清が、暮れ行く春のそゞろ歩きに、笠に散り來る花の吹雪を拂ひもあへず、通ひ詰めたる昔の趾なつかしく、僅に見ゆる藍の布簾に昔時の春を忍ぶのみ。斯て狭き坂路を何所迄もと登りて敷き詰めし道の右左、骨董の店多き中を彼方此方と眺めつゝ、清水坂に出づ。清水焼賣る店より、聲々に客を呼ぶ聲姦しく、小さき陶器の人形、玩具の紅皿など二つ三つ求めて、練り行く人に誘れ三重の塔の邊に至る。廣き石段を昇れば、見渡す限り京洛の町は霞み罩めて、前景に在る三重の塔の、禿げかゝりし白緑群青古色を帯び、散り残

りたる八重櫻の、日に照らさるゝ美はしさ。其れより二重の樓門を潜り、忠  
 僕茶屋の邊を過ぐ、藤の青葉を吹く風爽やかに、早や咲き初めし淡紫の花ゆ  
 らく揺めき、紅き提灯  
 納手拭の敷を盡して下りた  
 るに、遠の山々鶴々とし  
 て、提灯の下に霞める風  
 情、名所圖會の趣多く、西  
 郷南洲の僕此所に居住せし  
 より、忠僕茶屋の名今に残  
 りぬ。茶屋の前には經堂三  
 重の塔あり。坂上田村麿の  
 女春子が懐妊の時、安産ならば三重の寶塔を建てんと祈願せしに、産平らか  
 なりしかば、即ち此所に建てしと傳へられつ。



石の玉垣繞らせる廣場の端に御水屋あり、梟の清水は沸々として湧き上り、  
 手を浸せば冷やかなる事氷の如く、日に輝く飛沫玲瓏として碎け散る。中門  
 を入れば長き廻廊薄暗く、建て連ねたる圓柱の太さは、一抱に餘りぬ。八角  
 の金燈籠、金色に輝く下を歩み、香烟揺曳せる堂内より、一段低き舞臺に降  
 れば、融々たる天日、柔かき光を投げて、花散り果てし木々の青葉は、麓を  
 かけて打烟り遠くは八幡山崎のあたり、西南に長き攝河の山脈、夢より淡く  
 霞みたるに、一大盆地をなせる京洛の瓦葺粉壁、日に映じ霞に消えて、中を  
 流るゝ鴨川の水、白銀の如く閃きぬ。堂は檜皮葺にて紫震殿に擬したり往昔  
 坂上田村麿が平安遷都の砌平城帝より賜りし殿舎を、伽藍に造營せるものに  
 して、初め北観音寺と稱へしを、後清水寺と改めたり。春は花より明くる  
 曙、夏は青葉の雨に聞く杜鵑の聲、秋の紅葉を照らす月、冬は雪に埋るゝ堂  
 塔伽藍、四條圓山の畫に描き盡せし趣なれど、四時の風光美はしき事比する  
 に物なし。本堂の彼方に時つ奥の院、楠の若葉紅く芽出せる中に隠見して、

参詣の人々ちらちら見ゆるを眺めつゝ、本堂の傍より七十二段の石磴を下る。

歌舞伎  
に残る  
清玄が  
櫻姫の  
艶なる  
姿に、  
執着の  
思を寄  
せし所  
にして



青葉の風いさよ涼しう吹き渡り、淙々として落つるは音羽の瀨、新高尾と稱ふ

る楓多き谷を、彼方此方にさまよへば、地上に動く陰影婆娑として、見上げる許り高き清水の舞臺、頭上を壓する如く崖にかゝりて、蒼き空を飛ぶ白き雲、悠々として長閑なりき。斯くてとある茶亭に入り、午には未だ早けれど、晝昫認めんと樓に登り、杯を舉げて少時雑話に時を移せしが、歌の中山清閑寺に詣でんと、午餐を了りて出で立ちぬ。

木立繁れる山に沿ふて、緑樹蒼鬱たる片岨道を進むに、椎の木に交る古杉老松、日影漏らさぬ迄に繁り合ひて、鳥唄はず、虫鳴かず、一路逶迤として奥深く行けば、落葉踏む音のみ聞えて、閑寂なる山中往き遇ふ人なく、小暗き森を出で、山吹咲ける小屋の前を過ぎ、左に登る道を行く、芝青き築地の中は、白き敷石日に輝き、白き石階の上は、素木の小門閉されし清閑寺の御陵、後方を圍む若葉の森に夏の光強く、風に煽る参差たる影、山深ければ春を忘れし老鶯、其所とも知らず鳴く聲、四邊の寂寞を破りて更に物寂しく、右に苔蒸す道を登れば、散り残りたる山櫻、赤き若葉の中に交りて、松の梢

も臃ろなるに、滿地の落花雪より皎く、只尾上を渡る風の音のみ響きぬ。左に小督の墓、高倉天皇の陵と記せし木標立てり、小督の局は、一度嵯峨野に隠れしも、再び清盛の憎む所となりて召出され、清閑寺に入れて尼となせしと傳へられ、あはれ果敢なき佳人の一生は、斯くて紅葉深き歌の中山に埋もれつ。歳華茫茫、幾百年の夢を吹く松の嵐、落花深き所、老僧の昔を語るものも無く、少時悵然として佇みしが、堂後の郭公亭に上らんと、危く滑る道を昇る。

老松の幹に赤き眞夏の光強く輝き、雨露に年古りたる小さき茶亭、中ばは松の蔭暗く落ちて、此所より見れば、萬戸の烟悉く指呼の中にあり、維新の初め、西郷南洲が僧月照と、國事を密議せし遺趾にして、當年の面影を止むる山のたゞすまひ松の緑、亭後の壁には、登臨の客が思ふが儘の落書、數多残るも面白く、少時紀念のスケッチをなし、元來し道を引き返して、空翠烟るが如き深林を横ぎり清水坂の上より、鳥部山の方に歩みを運ぶ。

二

紅顔好く幾時ぞ、春徒に去り、榮華の夢央にして、浮かべる雲の消ゆる恨あり、命は日に従つて促り、息止まれば即ち遠く送る生死の門、三魂七魄空しく消えて、地水火風の源にかへるは、浮世の常と言ひながら、鳥部山の烟、仇し野の露、幾百年の無情の風は、今も日夜に音づれて、長夜の眠りを驚かすに非ずや。獨り生れて、獨り去る、中間に何ぞ必しも人間に伴はんこと、悲觀したる人の心は知らず、美はしき自然と、美はしき人にと、明し暮す、我等が放浪生活は、鳥部山の墓石累々たるを、翠を負へる背景の山と、去年の古草淺緑に萌え初めし、だら／＼山に射す日の色とに、何とも知れぬ美はしきを感じて、歩みながらに寫生しつつ、お俊傳兵衛の墓は彼のあたりと、中澤子の語るを聞きながら、西大谷に出んと、板圍の朽ちかゝりし穢多

町の傍を過ぐ。

倒れん許り古く煤けし圍ゐに柳の緑吹き靡きて、何と無く鼻を襲ふ、革の匂ひ堪え難く、崩れかゝる赤瓦の屋根越しに、遙かに覗へば、蔓草長く這ひ纏りし小屋幾つか續きて、出入する男女の風俗異様なるに、細々と立つ炊烟、淡く消え行くも哀れなり。降り果てし所を左すれば即ち西大谷、門を入りて廣き道を行くに白き石橋あり、圓通橋と稱ふ、



橋下は一面の蓮池、蓮の卷葉僅かに水を抜きて枯葉の間に交りたる、花咲く夏の頃や如何にと思ひ遣られつ。橋を渡れば、石道斜に續きて、盡る所に檜皮葺の唐門あり、松の風微かに音づれて、静かなる日は愈静かに、見真大師埋骨の地として、諸國より参詣の人絶ゆる事なく、白衣の道者珠數繰る老婆我等の前後に長く續きぬ。

大谷を出で、大佛鐘を訪はんと狭き小路を行くに、日影暖く巷に満ちて、往き遇ふ人の日傘の色華かなりき、大佛の境内に入れば、嘗ては堂塔伽藍の結構、壯麗を極めし方廣寺、豊太閤の創建せしものなれば、本尊盧舍那佛の大きき坐像にして六丈に餘り、本堂の桁行四十五間餘、梁行二十七間餘、棟の高さ二十五間、大佛殿の名は残れども、今や即ち茫として、往事の尋ぬ可きなく、僅かに存する顔面の木型を眺むるのみ、堂の入口にて拜觀料を收め中には、薄暗き堂内の中央、巨大なる眼を開きて下瞰する御佛は黒く煤けて、がたりくと階段を歩む下駄の音のみ高し、我等も欄干に寄りて、一歩く



に大佛の頭上高く登り行き、顔の後方に廻れば、其所には大佛の繪葉書、觀音の懸軸賣る店數多ありて賑はしく、本願寺詣の道者が足を停めしもの多かりき。此所を出で、右に鐘樓あり。國家安康の文字今も猶残りて、大阪夏の陣の禍機を醸せる所、維新の初め迄は、撞木を釣るを禁せしとか聞きぬ。豊國神社は、元大佛殿のありし地なりしを、明治十一年建築して豊臣秀吉を祀る、嘗て秀吉の薨するや、豊國大明神の神號を賜ひ、廟を建てしも、徳川氏の世、金碧空しく雨露に朽ちて、荒廢する事甚しく、遂に破毀せし儘なりしと云ふ。唐門は桃山城に在りしを遷せるもの、桃山式建築の縷刻の美を見る可く、遙かに拜して西の石階を下れば、石垣の石の大方三間に近く、如何にして此の大石を運搬せしやを疑はしむ。名所圖會に依れば、此の地往昔平家一門の盛えし頃は、平相國清盛が邸宅にして、北は五條、南は七條を限り、大和大路を前に、殿舎の數は百七十餘宇、二十餘町の間、樓々相連り、水に臨みて水殿を架し、山に依りて飛閣を作り、珠の瓦、桂の簷、金殿

の春酣にして、陽臺の柳濃やかなりしも、壽永の秋の風に誘はれ、西海の波に漂ふ一族郎等七千餘人、雲の波霞の波、に流離ひし都落の趾は、此所なれど、今は僅に六波羅密寺を殘すのみにて、其れぞと思ふ影だにも無し。石段の前より眺むれば、晴れたる空に峙てる白き五輪の塔、青き芝生の上に立ちて、遙かに西の山々、あるか無きかに霞みたり。文祿征韓の役に、諸將敵の首級を得て、鼻を切り耳を削ぎ、醃して之を太閤に献せしを、此所に埋めて菩提を吊らはせしものにして、其の頃の記録に寄れば、大凡二三十萬の數に上りぬ、我等は此所に鉛筆スケッチを走らして、更に南すれば、三十三間堂の前に出づ。堂の後方柳繁れる片ほとりに大弓場ありて、見渡す限り廣き芝生の中に、徑六尺許りの的空しく立てるを、眼早く見たる跡見子は、兼て寸弓を傲る剛の者、大矢數の數は通さずとも、疲れし足の休憩にと云ふ儘に、皆打連れてどや／＼と入れば、風吹き通す廣場を前に、涼しき事限り無し。左手に高さ三十三間堂の長き建築、屹然として聳えたるに、見渡す果は

低き築地に藤の花白く懸り、柳幽かに日に烟れる景色、奈良の趣に似たるもなつかしく、腰打ちかけて眺むれば、跡見子は手近き弓を曳き試みつゝ、前なる矢筒より抜き取りたる矢を打ちつがへ、能く曳いて切つて放つに、弦の響高く鳴つて飛び行く矢は、三十三間を隔てたる大的の真只中を貫きぬ。斯くて十射の中、僅かに外れしは三射許り、澁茶飲みつゝ眺めし我等は、足の疲れも忘れ果て、少時恍惚として時の移るも知らざりき。

棟由來の淨瑠璃に名高き觀世音を拜まんご、東に廻りて階段を昇り、拜觀料を納めて中に入れば、香烟棚引く堂内は、下より射し入る外光微かに光りて、中央に立たせ給ふ千手觀世音は高さ一丈七尺、其を繞りて一千一體の



十一面觀世音の像殆ど等身に近く、塵に埋れ煤に古び、幽かに金色に輝く様、何と無く寂しきに、五彩に彩られし堂内は、年古る儘に剝落して見る影も無く、荒れ果てしも、僅かに残る白緑の色に、昔時の美はしさを思ひ浮かべつ、斯くて端然として立たせ給ふ數多の御佛の前を歩みつゝ、何と無く物恐ろしき心地に追はれて、突あたりし所より忙はしく後方に廻れば、二十八部衆運慶作の彫刻、眉を上げ肩を怒らし、武器を手にして追はんとする形更に慄ましく、所々開きし扉より、漏れ来る光に照らされし、長き床を歩み盡して左に曲り、漸くにして暗き堂内を出づ。柳吹く風心地好く顔に當りて、池の渚の菖蒲長く伸び、壽司、きそばと書きし紅き提灯下る茶店の前を、氷々を賣り歩く聲、早くも夏めきぬ。

血天井

松原織きの芝生は一面に擴がつて、午後の日が乾いた砂地を照らしてゐる。三

十三間堂の前を向ふに突當る所が、血天井で名高い養源院門前には左右に長い提灯が出てゐて參詣の人と一所に續いて這入つて行くに、左に歡喜天の堂、右に元三大師の堂が在つて、誰が上げたか花と線香が倒れた儘になつてゐた。爪尖上りの石道を突當つた所が本堂で、此所に下駄を脱ぎ捨て、拜觀料を納めるに、羽織袴の六十許りの老人が、さあ此方へと案内をする。眞晝ながら濕つた様な、陰氣な暗い堂の中は、見物の人が既に七八人立つてゐて、襖の畫などを眺めてゐる。案内は先に立つて歩きながら、

「當山は、盛伯法師の御開堂で御座います。之なる本尊の阿彌陀如來は御丈一丈と二尺、惠心僧都の御作文、文祿の三年、豐臣太閤様の奥方、大慶院と仰せられる方が、御父淺井長政公の菩提の爲めに建てられました。火事が有つて焼失致しました。其後、徳川二代將軍秀忠公の御内室、崇源院と申す御方が、御再興なされました。其時に高麗張の天井を許されました。此の御方は、大慶院様の御妹御で御座います。之れなる御座敷は、桃山御殿に在りましたのを遷したので、桃山御殿に置きましては、松の間と申しまして、秀吉公諸大名と對面の間で御座います。板戸の畫は、凡て狩野法眼、元信の筆、元信の描きました飛越の獅

子と見越しの獅子は、日光と此所とよりほかありません」と。

長い竿で指しながら、次へへと歩くのだ。襖板戸の畫は、極彩色の盛上げて、象や虎や麒麟の筆使ひが、元信の畫と思はれぬ迄、古土佐の趣を帯びて居る。太い緩みの無い柔かい線と、思ひ切つた色彩とが、今迄嘗て日本畫を見て感じたことは、一種異つた裝飾風の味が、何とも云はれぬ面白さを與へるのだ。自分等が少し後れて、次の間に這入ると、「一本の角を犀角と申します」と云つてゐる所で、

「此の間の三方襖の畫は、狩野山樂の筆、此の間を牡丹の間と申しまして、太閤様御學問の間、廊下は總て、驚張」と。

と云つて、先に立つて踏んで見せると、きゆうくく、と幽かに鳴る音が、何所と無くするので、皆な頼りに踏んで見る。

「之なる天井が、即ち桃山の血天井と稱へまして、元和元年十八日の戦に、秀頼公は大阪落城と共に、御腹を召され、桃山御殿に残つて居りました。三百八十四名の者が、大阪落城と聞きまして、御廊下で切腹を致しました。死体は、其の儘に、首を切つて二ヶ年と六ヶ月、廊下の上に置いたので、御座います。之れが足の痕で

御座います。血のりの指が五本とも揃ふて御座ります。黒く斑の様なのは皆血で御座います。鳥居左京之介の姿は彼方の天井でわかります。と案内しながら天井に黒く斑點を残したのを指しつゝ進んで真中から少し出口に近い所に來た。

「此の血の痕が鳥居左京之助の姿で御座います。腹を切つて廊下に打俯になつたので、之が両手で、之れが身體今年で丁度二百九十四年になるので御座います。」

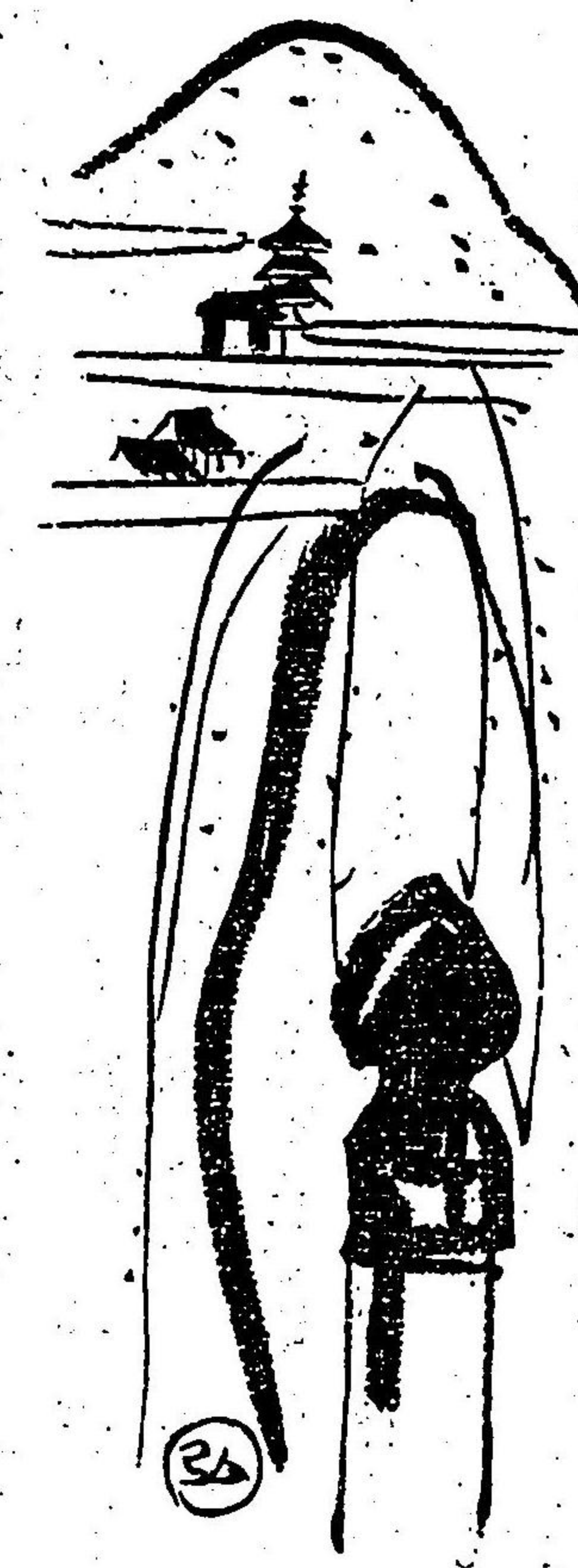
と云ふので好く視るとぼんやり人の姿が見えて、彼方此方に手の形や足の形が残つてゐる。自分等は何となく陰氣な厭な感じがしたので、見て了ふと直ぐに門外に出た。

日は漸う西になつて、光に溶けた三十三間堂は淡く霞み、東山一帯、茫とした青葉若葉、白い雲がぼつりこ一つ浮かんでゐる。

三

夕寂しき松の風巻を吹きて、西日斜めに射す阿彌陀ヶ峯、博物館内の大和繪を見物し了りて、立出でし我等一行は、見上る許り高き石階の下に立ちて眺めたり。赤き夕陽の反映を蒙れる頂は、麓の方より次第に暗き陰影押し昇りて、灰色に暮れ行く常盤木の森、疲れし儘に此所にて待たんと云ふ者多ければ、我のみ獨り石階を登る、一歩／＼に低くなり行く四邊の景色は、蒼然たる暮靄の中に包まれて、脚下に見ゆる博物館、豊國神社、大佛殿、三十三間堂の邊は次第に暗く、眠るが如き京の町、山の央に至らざるに、既に下なる人の影小さく消えて、見上る上は猶遙かなりき。斯くて疲れし足を舉げて、漸う頂に達せし頃は、麓の方に燈火ちら／＼映り、空に残りし夕榮の色も褪め果てつ、廣場に立てる五輪の塔は、豊太閤が埋骨の地にして、絶代の偉人が長久の眠り安らかに、無限の長風只徒らに空を吹きて、茫々たるあるのみ。友や待つらんと心急かる、儘に、忙かはしく石階を下り、打連立ちて五條の橋を渡り、宿に着きしは七時近き頃なりき。

夕餉終りてより先斗町の鴨川眺めんと云ふに、岡野跡見の二子は、急ぐ事ありて、今宵の中に出發せんと、歸京の準備に急はしく、聽て荷拵を了りて宿を出づ。暖き雨の風氣味悪く吹きて、星の光も朧ろなり、四條の橋を右に細き小路を



しか落し來る雨、頬を打つに驚きて空を透せば、星はありながら雲低う飛び、風は次第に吹きまさりぬ、入場券は都踊に比して、些か廉なりしが、茶席の入れ替る間を少時と樓上の大廣間に導きぬ。

樓々水に臨める鴨川の夜は、蕭々として降りそゞぐ小雨に更けて、舞臺に響く鉦鼓の音華やかに、今かくと待つ間に、時はいつしか過ぎて、早くも八時に垂んとす。跡見岡野の二子は、發車の時間迫れる儘に、茶席にも入らず直ちに、七條停車場に向つて去らんとす。あはれ果敢なき旅の別れよ。せめては舞臺の開くを見てと薦めたれど、今の夜行に乗らざれば間に合はじとて、遂に先斗町の歌舞練場を後になし、小雨をば降る五月の空、あやなき闇に別れ行く寂しさ、比するに物無し。遠さかり行く轍の音も、俄に動搖めく物の音に消されて、聽て茶席に入るに、都踊と同じく、小さき禿數多菓子皿を運び、藝子の點茶も同じ様なりき、茶席を了りて棧敷に行けば、歌は西山めぐりと記せし奉書刷、鉦太鼓三絃の響、耳に鋭く、舞妓の化粧も紅きに過ぎて、厭らしく、都踊の如く艶なる風情少なかりき。降る雨繁く、雲暗く、迎に來りし仲居に案内されて、宿に歸りしは、十一時に近く、風の板戸を揺る音物寂しさに、友の二人は都に歸りて、部屋の中俄

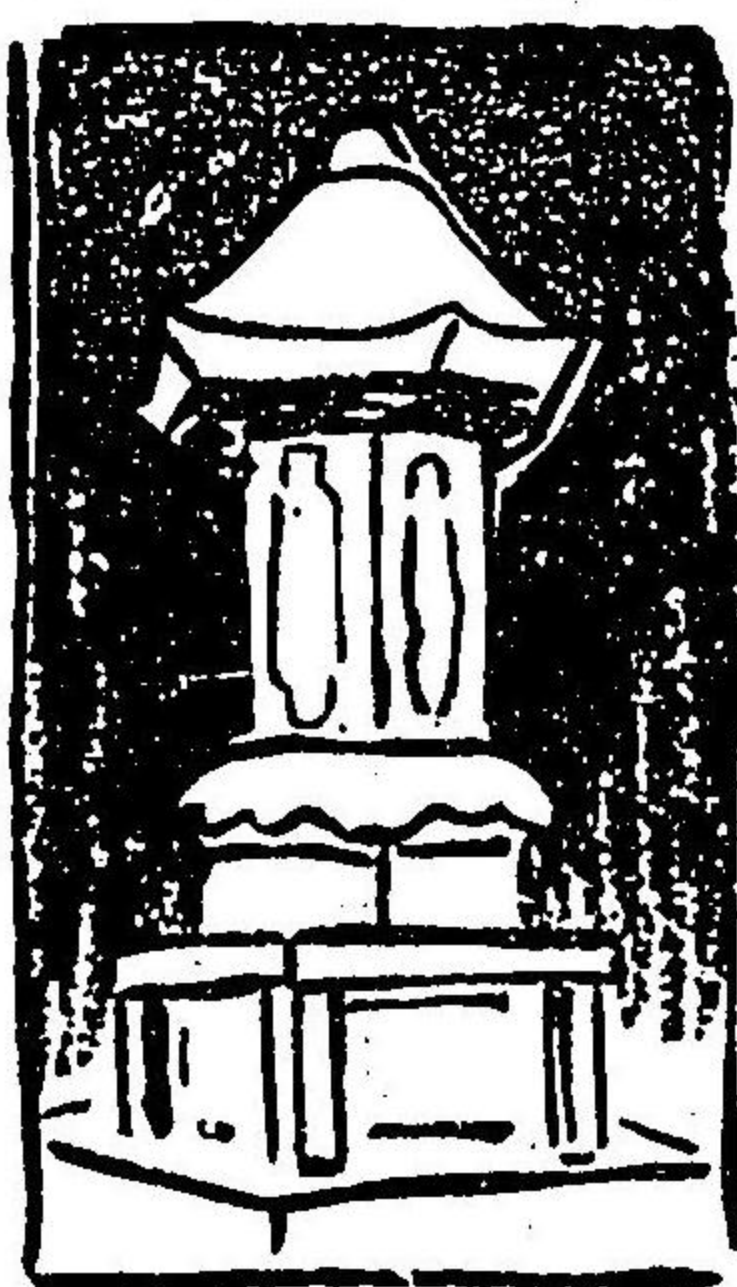
かに廣くなりしも、何と無く物足らぬ思ひなりき。

四

西國十八番の札所、大慈大悲の観音堂、柳の緑雨に霽れて、朗らかなる空に飛び交ふ燕の聲も爽やかなる、五月初めの朝まだき、六角堂の前に立ちて、スケッチブック擴げたる我等は、何所より見るも、同じ様なる位置の多きに苦しみぬ。六角形をなせる堂は、四方に入口を設け、堂内高き壇上、一寸八分の如意輪観世音を納む、聖徳太子の開基にして、四天王寺、夢殿と同じく、佛教最初の道場、嘗て親鸞上人叡山より百日間の参詣をなし、一宗を開きし遺趾として名高く、古雅なる建築の形面白ければ、漸く柳の下に立ちて一枚の寫生を終りぬ。

池の坊生花の祖と仰ぐ専慶は、當寺の坊中に住せしものにて、今猶插花の家

として連綿たり。我等は三條道に出で、賑はしき町を東に進めば、風無き日の空靜かに好く晴れて、相乗車の飛ぶ事頻りに、應て三條小橋の邊に至る。此所に殺生關白秀次の墓ありと聞きしかば、道行く人に尋ねるに、橋の前なる寺なりと云ふ。見る蔭も無き小さき寺の小門を潜れば、右に曲がる石道あり雜木の若葉打重なりて、日影微かに照る所五尺許りの石碑三つ並べる中央は、即ち秀次の墓にして、瑞泉寺殿前關白豊臣秀次入道、高巖一峯靈位と彫られし石苔蒸して、吊ふ人も非れば、香を焼きし跡も無く、僅かに萌え出し雜草の中より、露の臺哀れに伸びて、香れるあるのみ、右は三十有餘人局方等靈位と記し、左は殉死諸大名方靈位と讀まれしが、世にある時は一代の榮華を極め、畜生關白と唄はれし者も、木村常陸之助の隠謀と共に、高野の奥に身を滅せる驕兒が果は、哀れに悲しき心なきに非ず、茫々三百



年、空しく一片の土と化し、恨を吞んで眠れる石碑を拜して、鉛筆スケッチを終り、三條大橋を渡りて電車の客となりぬ。  
 眠気を催す暖き風緩く吹き通して、遅々たる電車は、漸くにして南禪寺停留場に着きぬ。橋を渡りて、閃々として輝く新緑の山を右に、水漫々たる苗代小田の邊を行くに、草の緑は既に伸びて、雨後の露冷やかなるも心地好く、右に曲りて、紅葉に名高き永観堂を訪はんとす。  
 門を入れば、石を敷ける道長く續きて、木立古りたる池の畔、本堂は少しく小高き丘上に在りて、本尊を願見の阿彌陀と稱ふと聞けど、寺は見る程のものにもあらず、池を繞らす青楓朝風に戦きて、雨に濡れし土は未だ乾かず、池の中央に小さき島浮かびて、赤き祠の若葉の中に立てるも美はしく、静かなる水と静かなる木立と、橋渡り行く人の姿など、瀧野川の景に似通ひし様に思はれつ、永観堂より南禪寺迄は僅かなりき。松高き寺内を歩むに、日影漏れ来る道しつとりと濕りて、露落つる音も聞ゆる許り、静かに晴れし空蒼

く、庫裡の方より響く盤木の音、左に高く白壁見ゆる方丈の建築 老松の間を透けて、青き芝生は土塀に沿ふて擴がれり。  
 白き壁は央日光を受け、央灰色の陰影に包まれ、暗き緑と、日向の草と、柔かき色の面白く、少時紀念のスケッチをなせば、山本子は背中合せになりて山門を描きぬ。

見上る空の雲静かに、山門の簷にかゝり、松高き梢風を含んで、松華隕つる事頻りなり。山門の樓上は、嘗て大盜石川五右衛門が籠居の趾として、今も猶出入の鐵鎖長く垂れ、雨に打たれ風に洒され、錆たる儘に三百年の星霜を撿しぬ。斯くて右方の山腹に在る龜山院の御陵を遙拜し、



天授庵を後に山門に沿ふて下れば、颯々たる松の聲、悠々たる雲、暖日遅々として、草氣烟るが如くなりき。

青蓮院門跡の前を過ぎて、楠の若葉日に輝やく練扉に沿ひ、牛車の後より悠々として歩み行けば左は、即ち智恩院、老樹小暗く繁り合ひて、日蔭寂しき石疊を登り、中門を入りて方丈に至る。拜觀料を納めて中に入れば、三百間の廊下は鴛鴦にして、左甚五郎の作、歩むに従つて微かに鳴る音聞えたり、佛間の蓮華極彩色の畫は、狩野尙信の筆拜の間の松に鶴、瀑見の李白、鐵拐長果郎も尙信の畫にして、西王母は狩野信政の筆と傳へられつ、鶴の間は松に鶴、梅の間は梅に雉子、菊の間は菊の極彩色、鷺の間は柳に鷺、柳の間は柳に燕、間毎くの畫は其れく趣を異にして面白けれど、外よりの光微かにして、朧ろげなりき。方丈を出づれば、四脚門あり、左は即ち大御影堂、屋の棟高く空に出で、眞晝の光莖の波に輝やき、東西に二十二間餘、南北十七間に餘り、梵唄の聲、香篆の烟、法の燈火は滅えずして、常久に無

明の闇を照らす清淨の境地、加之法然上人入寂の靈域、屋根裏の傘は魔除の傘と云ひて見物する者多かりき。我等は更に茶所の前より左して、木立繁れる山坂を登り、鐘樓の傍に至りぬ。方四間の樓は、柱の太さ二抱へに餘り、鐘の高さ一丈八尺、徑九尺、見物の物は只呆然として其の大なるに驚けり。我等は此所に、二三の見物と鐘樓とを描き、將軍塚の高き頂を仰きながら、裏山傳ひに荒れ果てし道を下り行く、左に一段高き長樂寺、也阿彌ホテルの焼けし跡を、遙か彼方に殘して、青草を踏み雜木の林を過り、圓山公園に至れば、春逝きて青葉になりし櫻の梢、花咲く頃の夕月夜には、花下に莖を敷きて篝火を燃き、歡樂の限りを盡すと聞きし儘に、ちらほら見ゆる掛茶屋の提灯に、空しき思ひを遣るのみにて、ぶらりくと祇園に出で、川端傳ひに水の流れを眺めつ、團栗橋の上に来りぬ。偶然見れば水草繁き河原のほとり、友禪染の美はしき絹幾つと無く風に閃きて、水中に立ちて洒す者、陸に上りて絞る者、金網張りし籠に入れて、がらくと音高く廻す者二組三組



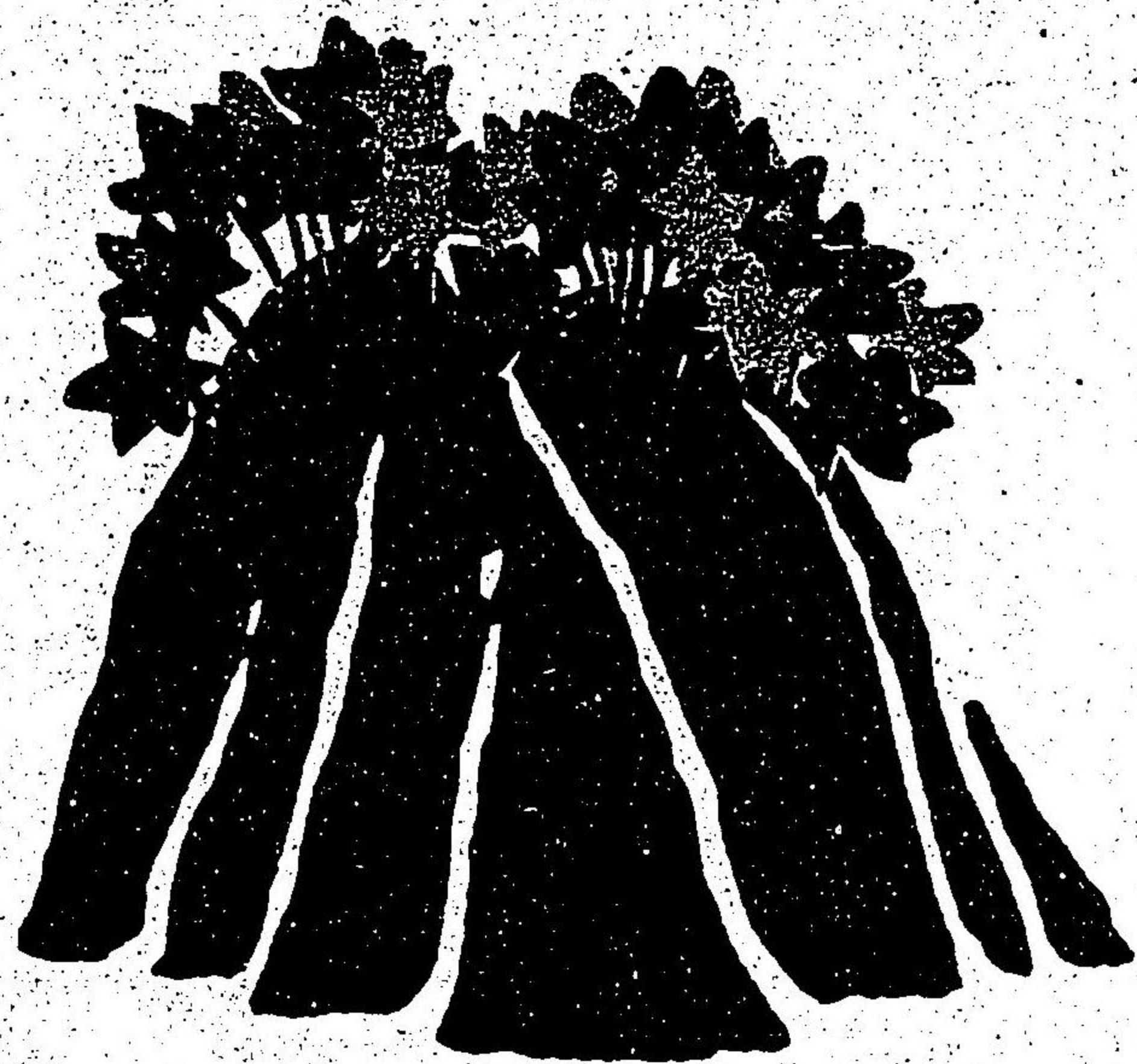
日に輝く布の色と、青き草と、働く人と、小屋掛したる白き天幕、深藍色なる鴨川の水、遠く霞める山の紫、其等様々の色彩に惑はされて、暫時欄干に立ち盡しぬ。

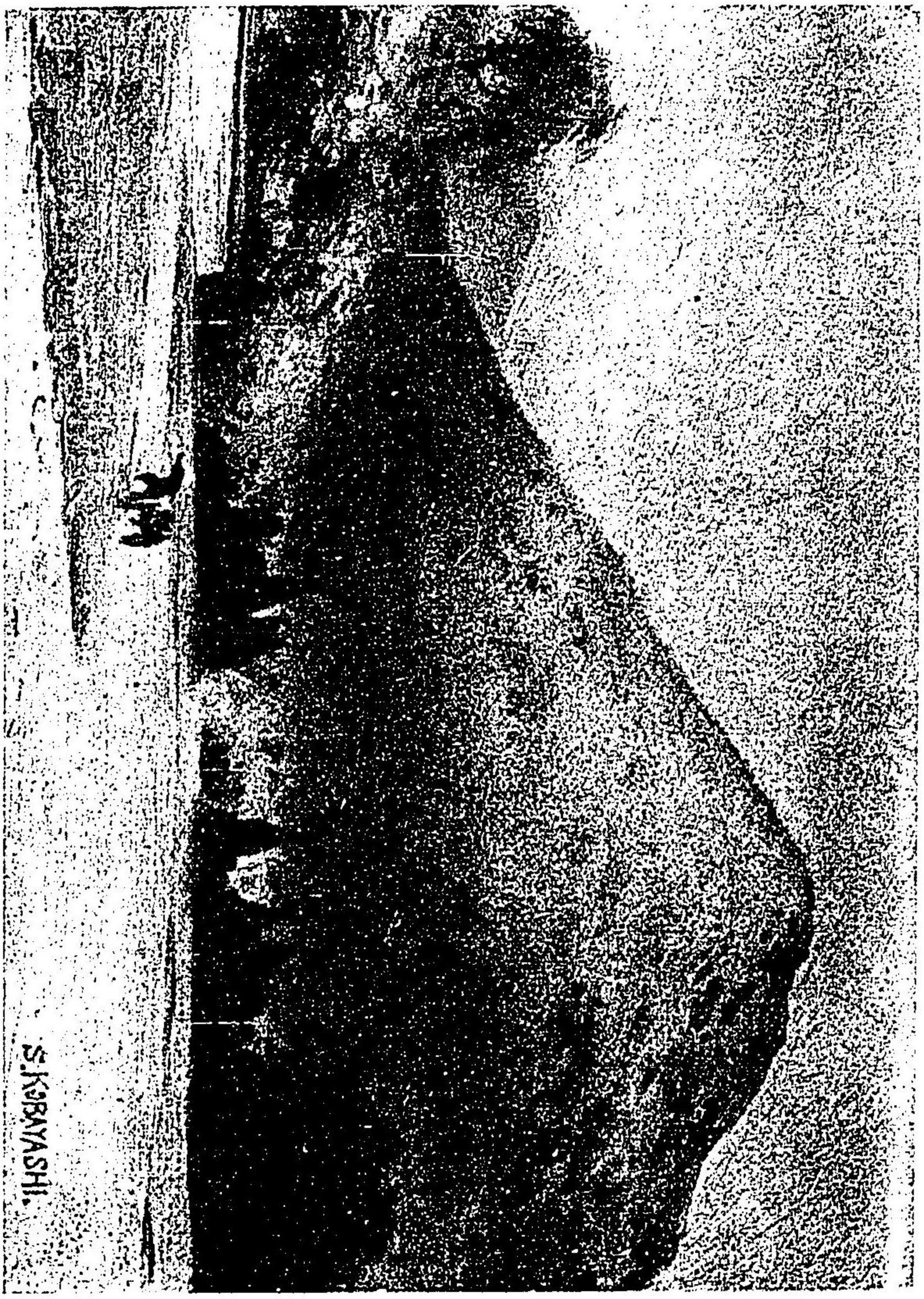
夜に入りて新京極に遊ばんと、打連立ちて巷に出づ、四條通りを左に、燈火明き街頭を行けば、御旅所より道は細く折れて、雑然たる物の音は込み入る群集の中に響きぬ。名物の粽。名所の繪葉書、呉服太物、玩具の店、其等様々の店に交りて、演藝の定席、活動寫真、大阪仁輪賀、浪花節、伊勢音頭に並ぶ女大力、採み返す如き見物は、人波打つて彼方此方に押され行く。我等はとある店にて、人形の首を買ひ求め、漸くにして廣き通りに出づれば、星の瞬き冴やかなる、初夜の大空深く澄みて、そよ吹く風に光を磨く太白星、爛々として西山の上に沈まんとす。



92

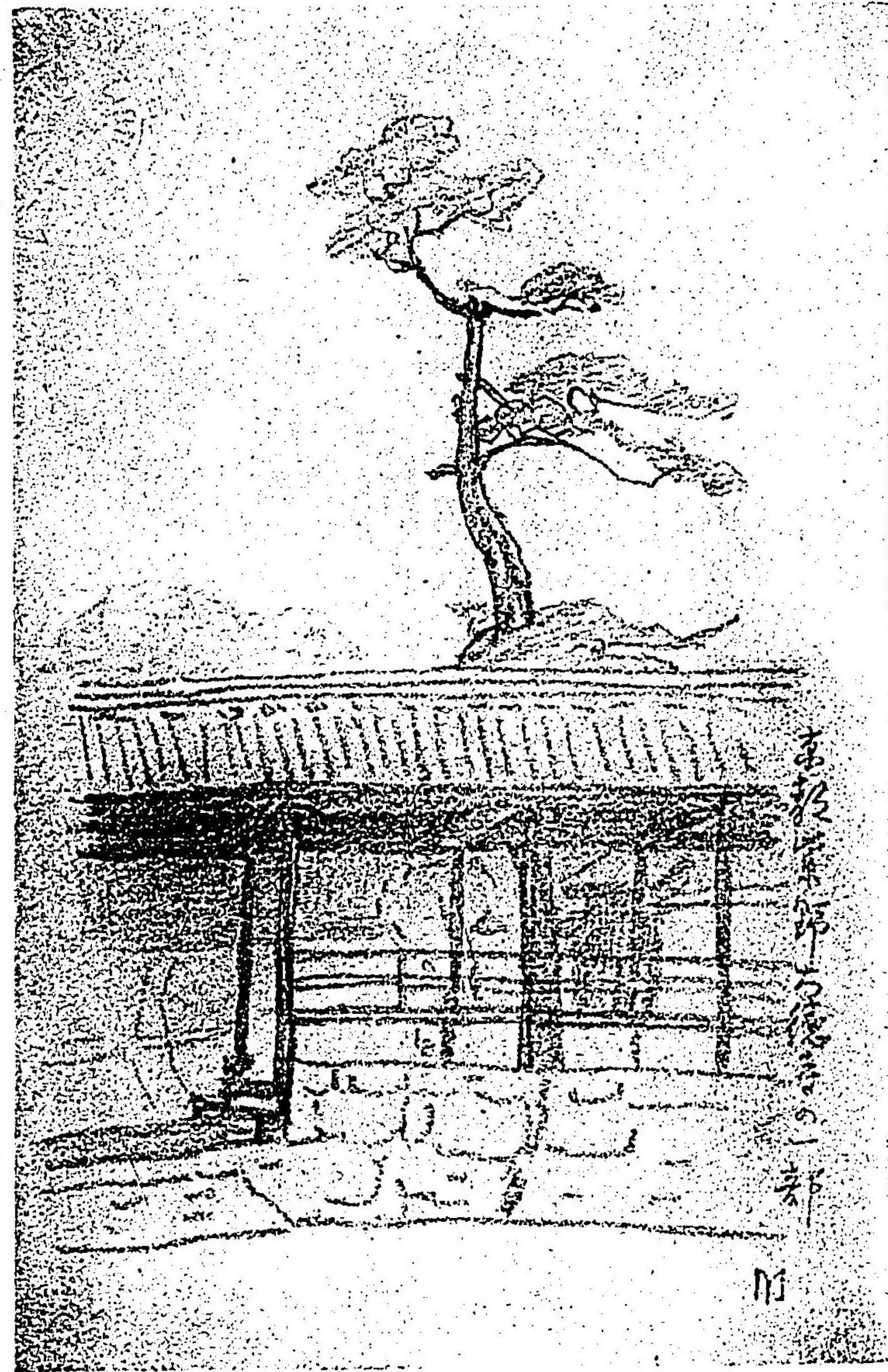
山





S. KIRIYASHI.

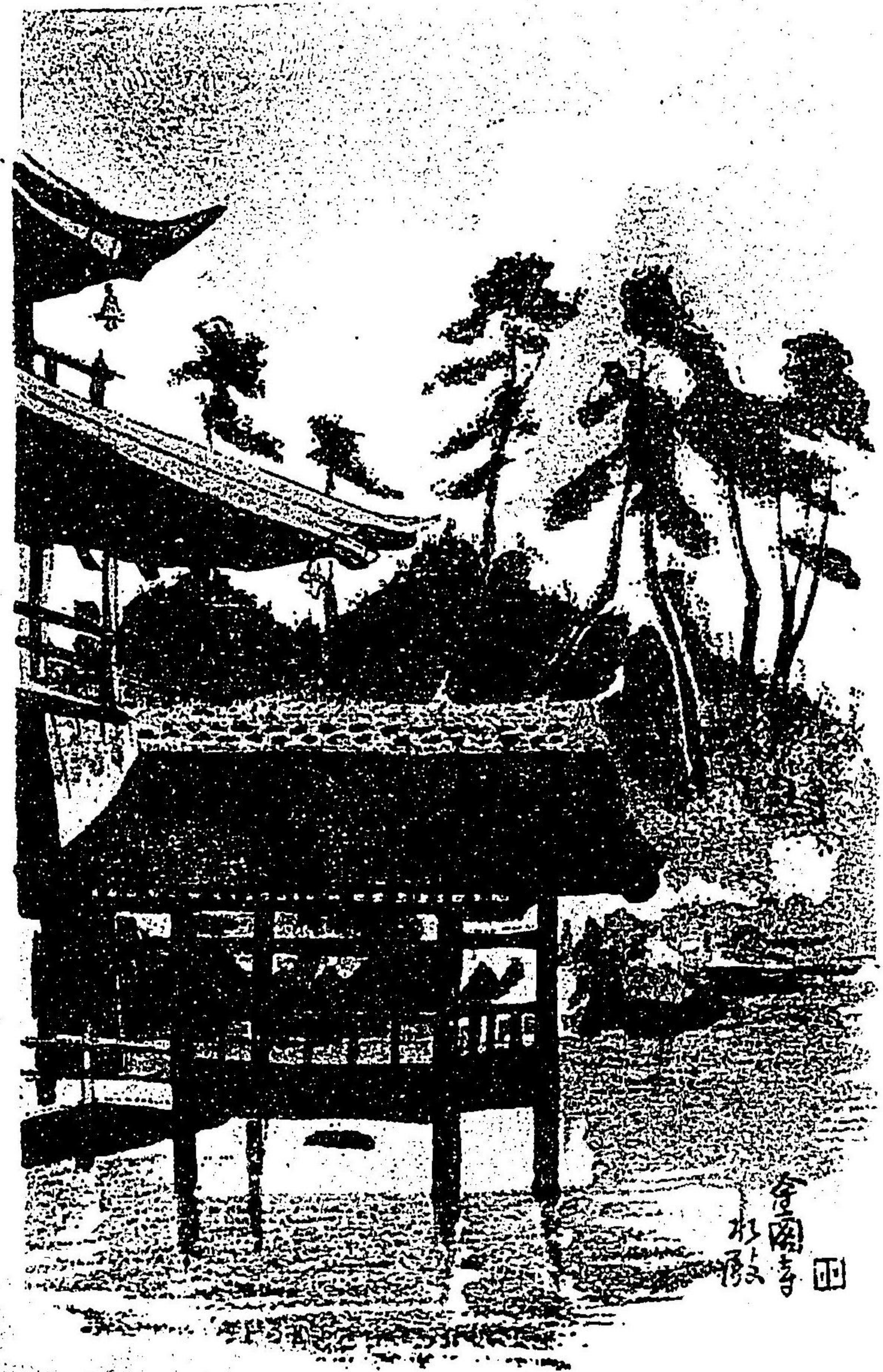
仙 小 林 洞 御 所



東林寺の一角

印

大 山 寺  
助 之 森 六 山





高  
雄  
の  
山  
々

高 雄  
山 本 森 之 助



橋  
の  
景  
四

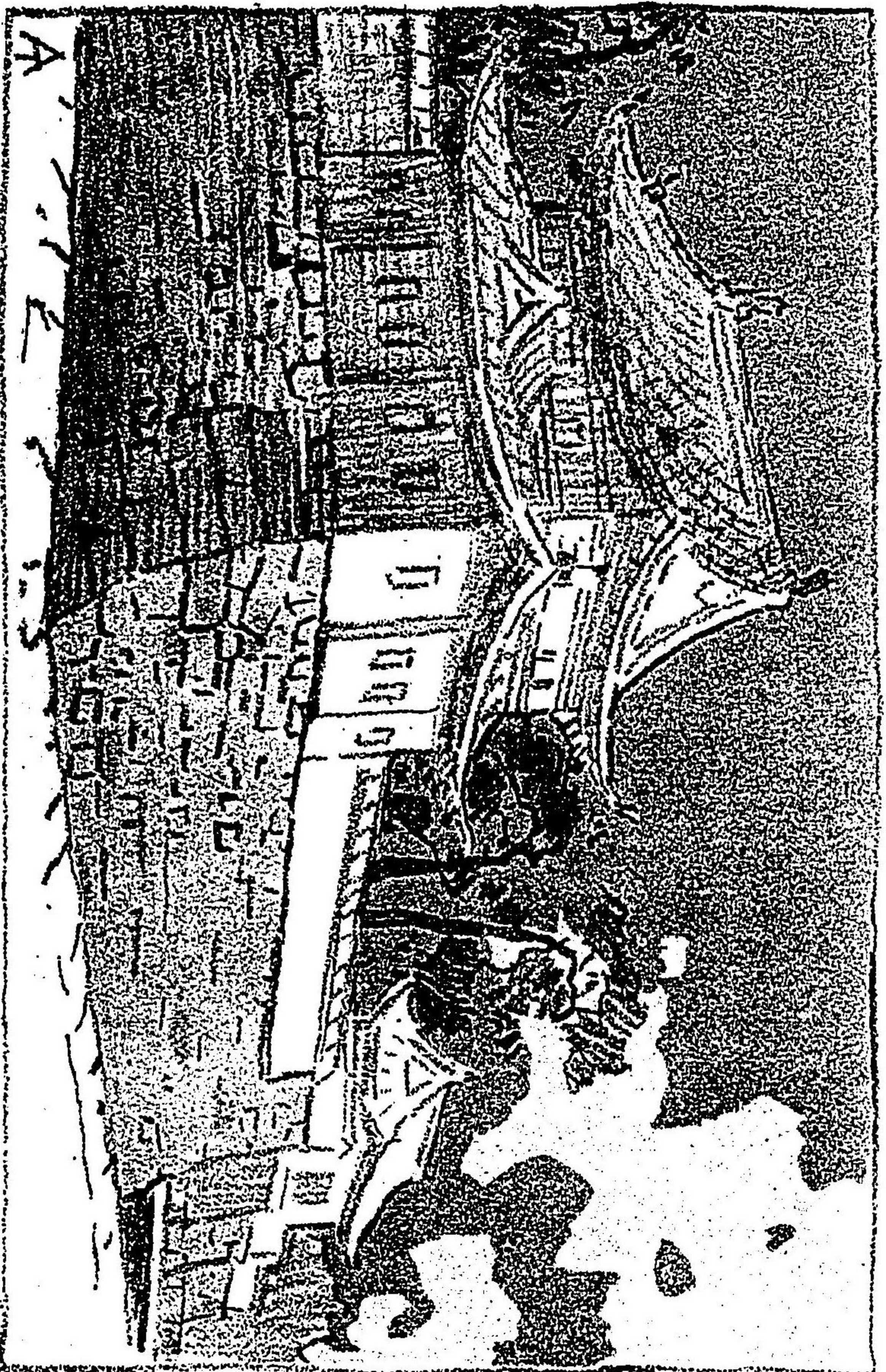
橋雲白尾の楨  
吉鍾林小

愛宕山 小鐘吉



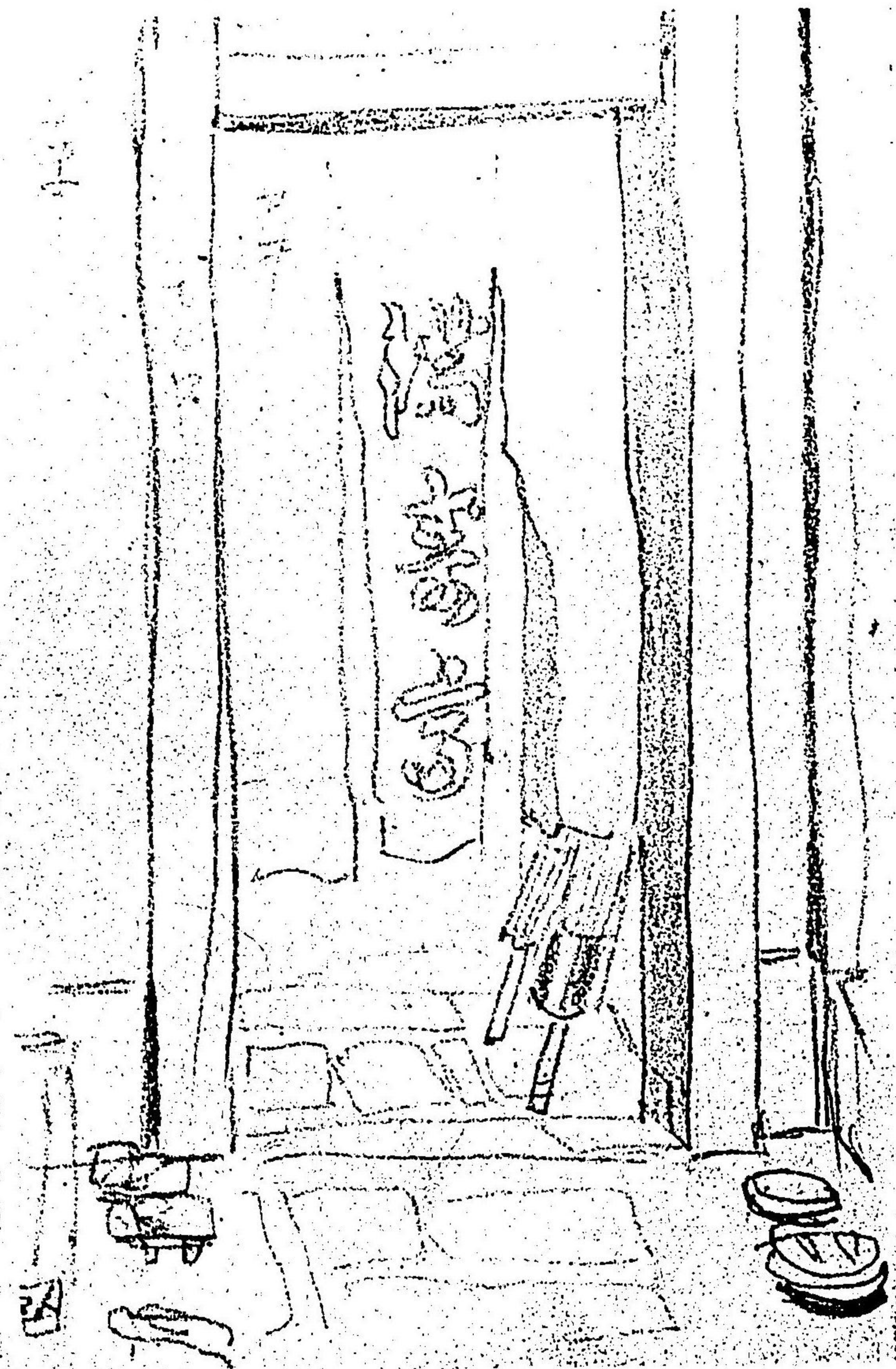
愛宕山



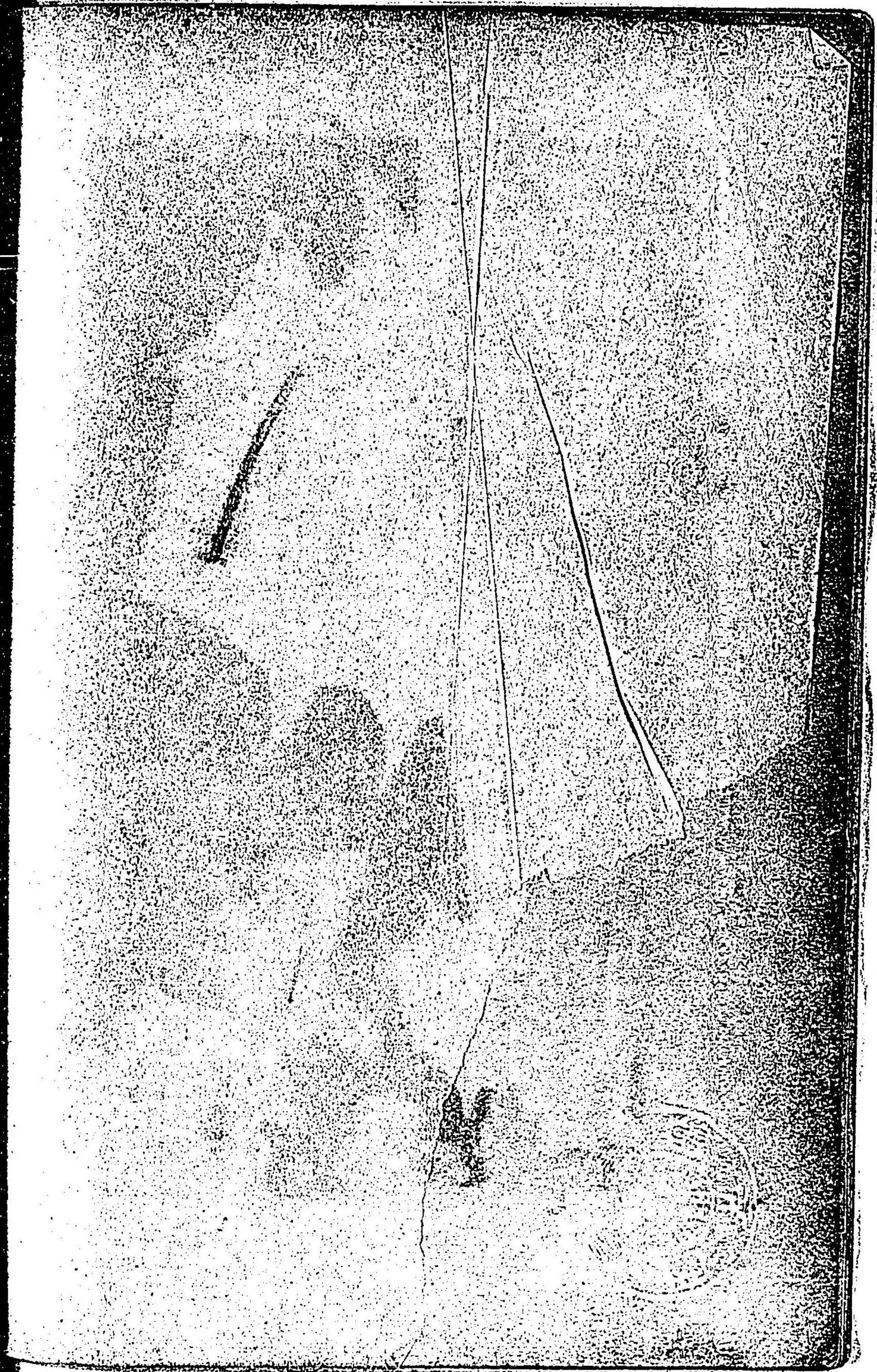


城 隍 廟 二

A. 112. 13

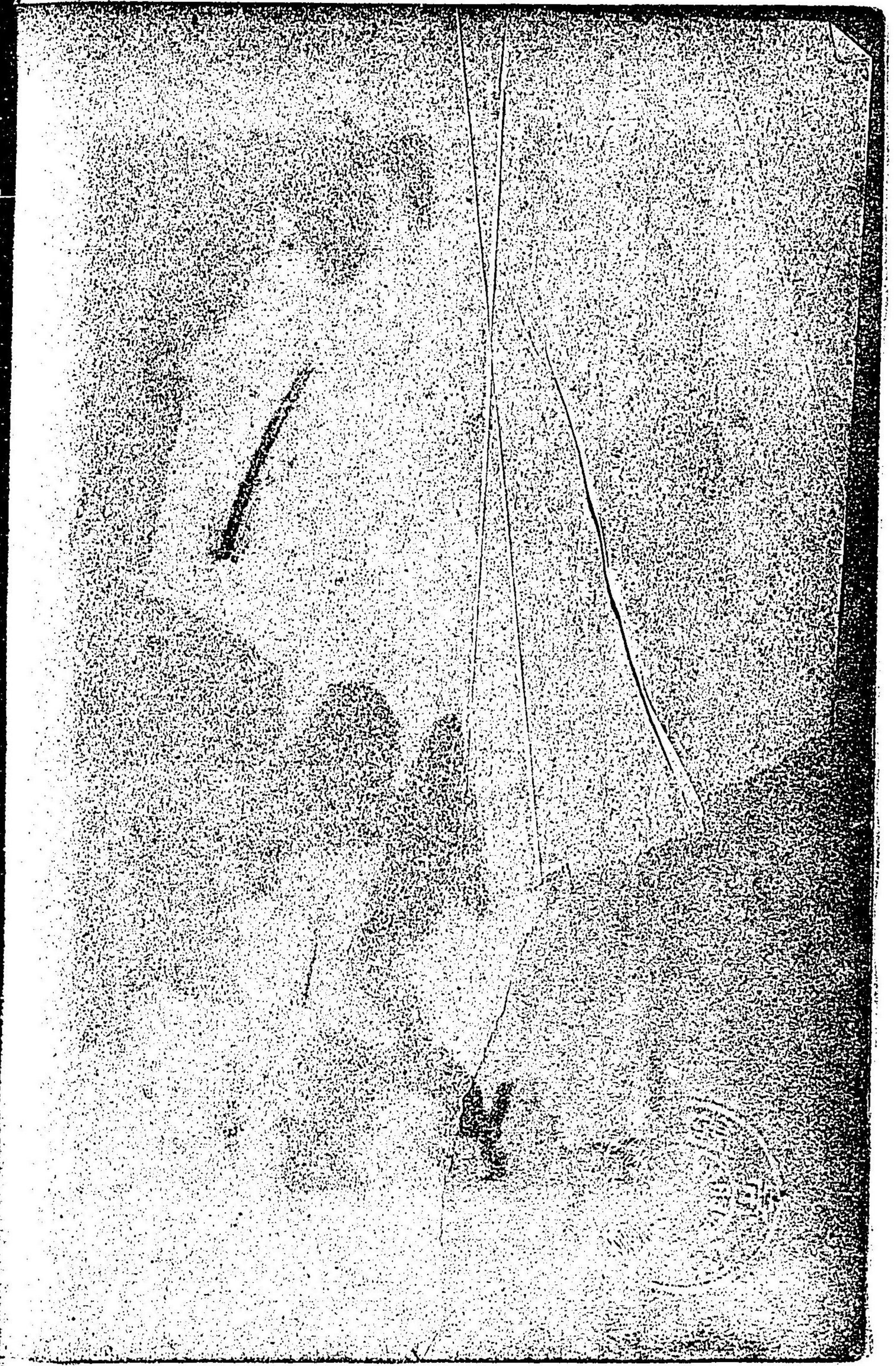


橋屋旅館の一隅  
中澤弘光





橋屋旅館の一隅  
中澤弘光





北 山

未だ東雲の五月の空、朝靄深き洛中の眠りを破る人馬の音、心知らぬ人は何とも言はゞ云へと、老の坂を東に越えて、水に桔梗の紋打つたる旗を愛宕嵐に翻し、時は今天が下知る五月雨の、晴間を窺ふ明智日向守光秀が、本能寺を襲ひしより、今に至る迄三百餘年、本堂は既に焼失したれど、信長公の墓ありと聞きしかば、三條大通より車を小路に曲らしめ、二三十間進めば、とある寺門の前にて轅を下しぬ。白き幔幕の下を潜りて境内に入れば、石道の盡る所大なる卒塔婆あり。高祖日蓮大菩薩六百年御忌の塔婆にして、本堂は其の左に建てられつ、見る影も無き小やかなる寺にて、昔の面影を止めず、

右手を顧れば、崩れかゝりし土塀に日の光暖く照らして、白藤の花寂しう咲ける片邊り、大銀杏樹の若葉風に揺めく下に、五尺許の石塔あり、玉垣に進みて覗へば、惣見院殿贈大相國と記されしは信長の墓にして、一行は少時紀念のスケッチをなし、再び前門の車に乗じて、北に向つて走り去れば、輕塵を揚る巷の風、辻を横ざる燕子の影、



遅日眠るが如く霏々たる京の町。堺町御門を入れば、御苑の芝生緑に打烟り、白き築地長く續ける仙洞御所の上に、高く聳ゆる比叡の山、雲無き空は蒼く晴れて、若葉青葉の薄霞、芝生の所々に松生ひて、草刈る乙女の白き手拭に日を遮り、樂しげに休める風情長閑なるに、車は彼等の傍を過ぎて、右に廣き砂地を走る。

見渡す正面は薄紫の鞍馬山、紫宸殿の屋の棟高く、避雷針の金色、赫々とし

て輝けり、南面の門は承明門、檜皮葺素木造りの雅びたる風情、築地の色迄繪巻物を翻すが如く、彼方此方を眺むれば、平安朝の昔時、源氏物語に描かれし、草木の匂ひ今更に新しく、降つては代々の歴史に残る趾までも、何とは無しに心に沁る心地して、遙かに門内を拜しつゝ、築地を繞りて日の御門の邊に至る、加茂の葵祭に、勅使は此の御門より出る習なれば、拜觀の老若男女は、皆此の芝生に集ると車夫の語るを聞きながら、北にくと進みて曲る所は猿が辻。築地の角三間許りの間隔を落して、御溝水の色深く沈みたり、之は皇居の長に當れば、鬼門除けの爲に造りしものと云ひ傳へられつ。陛下御降誕の産湯の水、祐之井は之れより少し北に當りて、松楓枝を鳴らさず、清げに繞らしたる柵の中、明治文明の源泉滾々として、盡くるの期無き有難さに、何と無く涙さしくむ心地しつゝ、拜し了りて再び車上の客となり、今出川御門を出で、同志社の赤煉瓦に蔦青く纏ひかゝる下を過ぎ、草茫々たる道を北に入れば、菜の花黄に亂れ咲く池のはとり、老松の影婆娑と

して、廢園の夏濃やかなる相國寺の寺中、靜かに長き石道を辿るに、松の影地に落ちて、遙かに鉦の響を聞く、五山の一にして夢窓國師の開基、足利將軍義滿公の創建と傳へられつ、深院人無く、夏徒に更け行く寂しさ胸に迫り、木の間がくれに隠見する、洪音樓を後にして、妙覺寺の前より、水火天神の小やかなる祠を過り、船岡山の麓に至りぬ。打開けたる田と畝は、華やかに射す日に青み渡り、道の邊の鳥居の前より、松暗き小山の頂を望めば、建勳神社の宮殿造り、青葉の上に顯はれて、麓に並ぶ掛茶屋の軒提灯、紅なるも名所らしけれど、本能寺に在し信長公の墳墓、淺ましく荒廢したるを見ては、靈を祀れる建勳神社の美はしさ、何と無く不審く思ひなされぬ。之れより大徳寺迄は二三町、丈低き惣門の前にて車を下り、老樹蒼鬱たる中を行くに、閑寂なる事深山路の如く、鳥の聲さへいと、幽かなり、道を右に採りて突當れば、杉の村立暗く繁り、苔滑かに草深き所、左手に金碧燦爛たる勅使門あり。右は即ち金毛閣、二重の山門は素木造、嘗て千利休自ら木像を造

りて、此の閣上に納めしより、秀吉の憎む所となり、遂にあえなき最期を遂げし所、欄を吹く風松の聲に和して、千古の恨綿々として盡きず、利休の墓は寺内聚光院にありと、車夫の語るを聞きつ、次第に奥深く進み行くに、法堂の後方に本堂あり、明智の亂靜まりて後、信長の靈を慰めし大徳寺の焼香は、此の本堂にして、堂後に高き老松天正の昔を語るが如く、幾多の英雄俊傑、一堂の下に集りし地に立ちて、同じ空、同じ建築、同じ松の緑を眺むるかと思へば、怪しく胸のみ騒がれて、スケッチもせで立盡せしが、聽て長き廻廊の下を潜りて、大徳寺の庫裡に至る。廣き土間には人の影も無く、大聲にて案内を乞ふ事數度、漸くにして六十餘の老僧、悠然として出で来る、拜觀料を納め、老僧の後に従へば、廣き椽に日影射し入りて、庭の白砂に塵も止めず、桃山御殿より遷せし日暮門を稱ふる四脚門に接し、苔蒸す巖石の配置、樹木の濃淡、自然の縮圖の如き趣あるを、僧に尋ねれば、之は小堀遠州作の庭園にして、東に廻れば叡山加茂も一

目なりと云ふ。閑寂なる内殿讀經の聲も聞えず、靜かに椽を繞れば、鬱々たる大樹の青葉山日に透けて、影を落せる白砂の上、風の嘯き幽かにして、眠るが如き比叡山、加茂の森長く連る末は、青田一面に擴りて、びかりくと鉄の刃光るも長閑なりき。

「此所より正面に見えるのが、如意が嶽、當山は花園法皇御隠居の趾で御座いまして、大道禪師の開基、靈光と書かれましたは、後土御門天皇様の御筆、白い文字は後醍醐天皇様の御宸筆、之れなるは信長公束帶の畫像、御一族の位牌は凡て此寺に祭つて御座います」

と暗き内殿の案内をなすに、香烟低迷して、御佛の前なる燈明、いと微かに輝きぬ、斯くて什寶の拜觀を終り、一休禪師が舊居、眞珠庵を尋ねて、二疊臺目の茶室を見、更に金閣寺を訪はんと、再び車を走らすれば、北野天神の華表前より、道は右に蜿蜒りて、雜木の若葉生ひ繁れる田舎道を何所迄もと進み行く。

梅に名高き平野社頭、華表にかゝる御七五三繩雨に洒され、白き幣束のちぎれ／＼に残る下を潜り、寫生する所やあると境内を歩きしも、青葉に蔽はれし社頭の梅は、面白きもの更になく、池の渚の花菖蒲に、僅に夏の風情を見るのみ、斯て轆々たる車の音は、眞晝の光豊かに照らす坦々たる大道を走りて松青き中に入らんとす。

金閣寺

松葉が散らかつた廣い道に晝の日光が射して左右に高い松並木草は烟つて陽炎が立つて、蹺げたたんぼの白いのが、ふはり／＼と飛んでゐる。突當つた所が總門で、其を遣入るゝ奇麗に掃いた砂地がある。正面は素木の唐門、其の右に玄關と庫裡と並んでゐる。自分等は庫裡から上つて拜觀料を納めると、十人許りの他の見物と一所に小坊主が先に立つて案内をする。『さあ此方へ御出なさい、此方丈は延寶年中、後水尾天皇の勅營であります。惣

体の襖の畫は狩野探幽の筆、狩野探幽の筆、鹿苑寺は寺號であります、通稱は金閣寺と申します、文殊菩薩の畫は兆傳司の筆、龍虎の畫は若冲の筆であります。

と次の間に來る、見物の客はごやく、又其の後に尾いて行く。

「本尊の聖觀世音は定朝の作、東福門院の御念持佛、後水尾天皇様の御寄附であります、右なるは開山夢窓國師、左は開基足利將軍義滿公法身の像、向の椿は後水尾天皇様の御手植で、ロビスケと申します。彼の石は女龍石、其の隣が布袋石、其の次が走馬石に幡龍石、其の次が露盤石と申します、皆な名石で御座います。之の舟の様に楳がった松が、陸舟松と申します。

と指す方を見る、四間許りの幅に長くなつた松は背々とした葉を擡げてゐるが、高さは漸う九尺許り。

「此の額は海峰の筆でありまして、書院は貞京年中の再建にかゝりました、惣体襖の畫は伊藤若冲の筆、若冲の筆、上段は後水尾天皇様臨御の玉座で御座ります。小襖の畫は住吉廣道の筆。」

と堂内を彼方此方と歩いて、茶席に來る、銀閣寺と同じ様な、押物の菓子に薄

茶が出る、其を喫し了つて庫裡を出てはかりく、と暖かい日に照らされながら、麗らかな空を眺める、と光り充ち満ちた淡い雲は、烟の様に動いて、吹くとも無い風が、若葉の裏を見せてゐる。中門の前に来て、十人許りの人、一所に暫時立つて待つてゐると、中から鐘で開ける音がして、扉は左右に靜に開いた。

此所で拜觀券を渡して、中に這入ると、十二位

の小坊主が、筒袖に袴を

穿いて先に立つ。奇麗

に掃いた道は砂地で、左

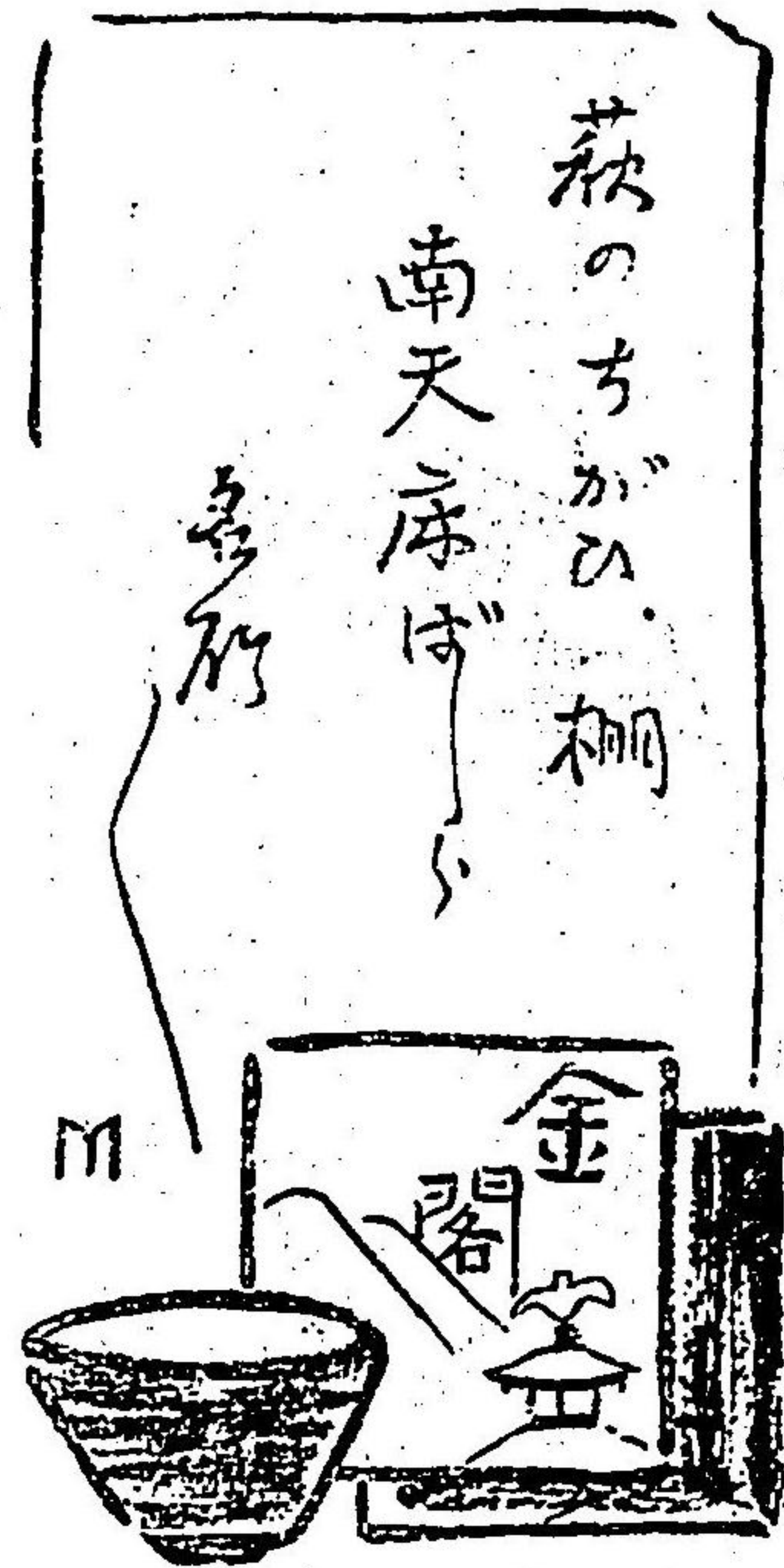
右に高い松が茂つてゐ

る、練塀を突當つて右に

曲ると前に大きな池が

露はれて、暗い森を背景にした金閣が日に照らされて立つてゐるのだ。

「これなる池は鏡湖池と申します、向ふに見ゆるが衣笠山、直ぐ前の島は慈原島、義政公の筆塚が御座います。」





さ大きな聲で吐鳴りながら、ひとり／＼と小波寄する水際を歩いて行く。田舎者らしい若い娘が二人老婆と並んでゐるのが、物珍らし相にうろ／＼眺めて時々急ぎ足になつて、小坊主に離れまいと追つて行く。

「此所に五つ並んである石が夜泊石、其の向が夜啼石、其の左のは九山八海石であります。」



向に見ゆる衣笠山

いつの間にか一行は金閣の下に來た。遠くから望んだ時は只金色に輝やいてゐたのが、近くなるに従つて、柱や欄干が光つて、廂裏や暗い建築の内部は、金色が錆びて沈んでゐる。小坊主に尾いて履物を脱いで上に昇つた。

「此の所を法水院と申します。正面の三尊は運慶の作、東の壇は開山夢窓國師

西の壇は義政公であります、此の御木像は先年國寶となりました。」

何所を見ても漆の上に、金箔が押しあつて、手擦れた所は剥落して、下の漆が少し露れてゐる。日光が射つた廊下は、眩しい様に光つて、前は溶々たる池の水蒼い空の雲白く水底に浮かぶ風情は、田舎源氏の豊國の挿畫の様に、小波がちら／＼動いてゐる。南の様に鯉に遣る鉄が置いてある、一錢銅貨を箱に入れて鉄を取つて投げるときがば／＼と浮かんで來る緋鯉や真鯉が、縦横に泳ぎ廻り追ひ廻り、色々の色が蒼い水を透して、亂れた糸の様に崩れるのだ。西の廊下に廻るとき、水に突き出して建てた水殿が有つて、波は礎の柱をびちやり／＼と洗つてゐる。

「此の所は漱清と申しまして、義満將軍御手水の所、向の石は島山石、手前の石は赤松石、之れなる島は、出龜入龜であります。青原島の前にあるのは鶴龜島、向ふの岡は紅葉山、之れから二階に上ります。」

金色の欄干に手を懸けて上る後から同じ様に急な階級を登るとき、池を渡つて來る涼しい風が吹いて、簾に釣してある金鈴が、好い音を立て、微かに鳴つてゐる。

「二階の名は潮音洞、之れなる巖谷觀世音は、惠心僧都の御作、脇立四天王は弘法大師の御作、天井の圖は狩野正信の筆で御座います。」

「三層は究竟頂と申しまして、後小松天皇様勅筆の額に之れであります。」

「關干から四方を見渡すと、周圍を高い松で圍まれた池は、風の立つ所丈小波が寄つて、島の陸になつた淵などは、只若々々靜かに濺んでゐる。昔時此所で山名細川赤松などの大詰侯が、義滿公の前に伺候した時の光景は如何なであらうか、此の金色燦爛たる究竟頂と、山紫に水明かなる泉石と、大紋の袖を風に吹かせた諸大名とは、繪にするよりは、演劇に近いものであつたらうと考へて、呆然眺めてゐる間に、ぞろ／＼皆な下に降りて行く。」

「自分は庭に出て、金閣の後方に廻り、鉛筆スケッチをしやうと、赤松の下に立つた、山本中澤二子を初め、見物の客は皆な小坊主に尾いて、山の上へ登つて行つた。獨り取残されたので寂しくはあるが、忙がしく鉛筆の淡彩をやつてゐる人聲は次第に高い所に消えて、松吹く風の／＼と鳴るのが耳に遣入る。水殿を描いて了ふ頃になつて、又一隊の人数が歩いて來た、自分の傍に立

つて、圖引いて居るかれと聞くものもあつたが、其の一行の案内に尾いて行くうと思つて待つてゐると、暫時して矢張十二位の小坊主が、先に立つて吐鳴つて來た、自分は其れに尾いて行く。」

「之れなる廟は、神雲と申しまして、當山の鎮守で御座います。此の水は銀河泉、義滿公の御茶の水、此の水は巖下水同じく、義滿公御手水に用ひたと申します。」

「瀧の名は龍門瀧、其の下の石は鯉魚石、鯉の瀧登りの形であります。此の垣は金閣寺垣、此の橋は虎溪橋。」

「さ次第／＼に高くなつて、平らな所に出た。見るに左手に沼の様な大きな池が有る、蒼鬱した老樹が暗く被さつて、水草や藻が蒼い水を透かして見へる、落葉や枯葉が水の上に靜かに浮かぶ、彼方は小さな島。」

「池の名は安民澤、島の五輪の塔は白蛇の塚、此の石は貴人榻、石燈籠と手水鉢は、義政公の御愛玩、之れなる御數寄屋は夕佳亭と申しまして、金森宗和の好み、後水尾天皇様御遊の趾で御座います。萩の違ひ柵、南天床柱と歌にあるのは、此所で御座います。彼の右の隅のが違ひ柵で、白い床柱が南天の木で御座います。萩垣の中の木は鶯宿梅。」

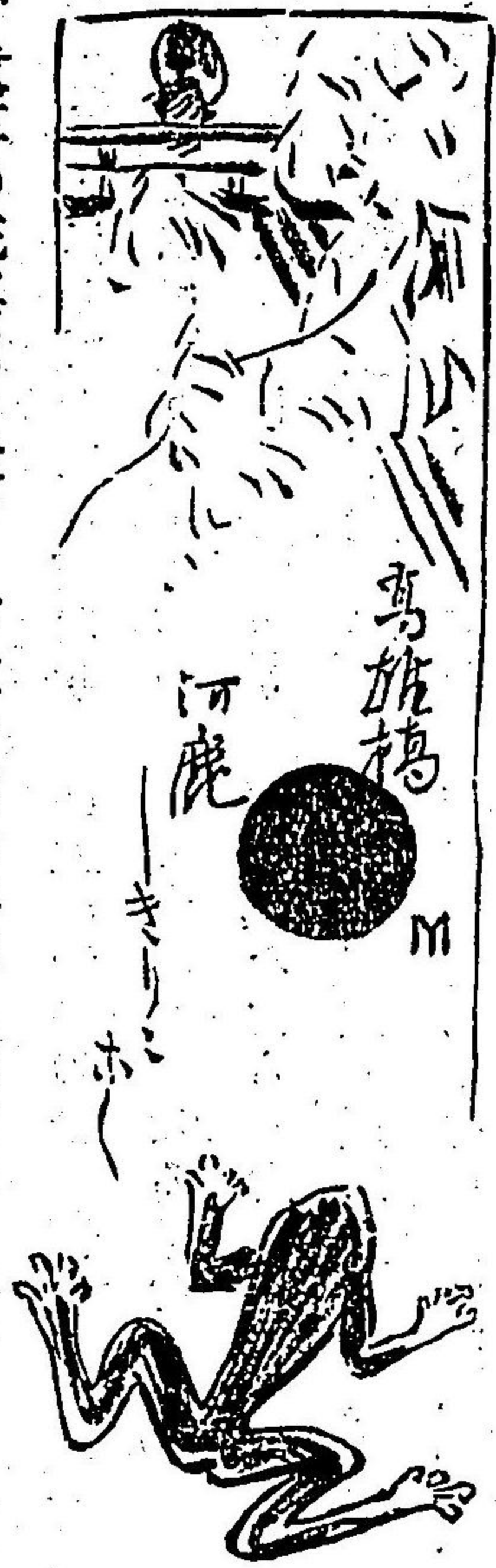
數寄屋は低い暗い坐敷で六疊許り唯見るこ南天の柱も違棚も知らずに濟む  
様なものである。數寄屋に接して右に高き拱北樓義滿公の居間の舊跡である  
が、外から見たのみで、小さな門を出るこ此所で案内は門を閉めて了ふ五六軒  
並んだ店で金關寺の繪葉書を買つて、不動堂の前に出た。  
青葉の風は全山の緑を揺かして、野花芳草更け行く夏の草叢に白い蝶が休ん  
でゐる。遙かに槩木の音がするので空を仰ぐこ、午を過ぎた日が眞上から射  
して、雲の周圍が青貝の様な色に輝やいてゐた。

二

仁和寺街道の夏は既に更けて、麥隴の風爽やかなる、五月六日の朝まだき、  
三輛の車は畑打ち返す畦道傳ひに、ゆられながらに進み行く。何と無く青み  
渡れる古池の水増して、藁屋の軒の椿の花、残り少なに散り果てし邊、柳の  
枝を苜り集めて、車に積み行く男の風俗、面白ければ寫生しつゝ、車上なが

らに物語り行く一行は、仁和寺の山門を過ぎて、次第く山路に入れば、  
六形花紅に咲き續く山田に人の影も無く、五風十雨の御代靜かに、霞み果て  
たる山又山、若葉に戦く風輕く、日向の道は白く乾きて、うねくと長く續  
きたり、古草鞋堆高き道祖神の石斜めに倒れて、陽炎ちらく燃ゆる稻村の  
邊を行くに、天暖かにして地は長閑なり、赤土山の峯の松、雲自ら去來する  
空唯好く晴れて、車はがたりくと、いつまでも同じ様な道を進む。  
緑深き松山續きの道は、少しく右に曲り、松籟颯々たる中を行くに、がたり  
くと情げに廻る水車の音、鶏犬の聲聞えざれば、往き遇ふ人も稀なりき、  
麥青き山畑と、青き空と、白き雲と、高く峙つ愛宕山とを絶えず眺めつゝ、  
一里余りも行けば、清水流るゝ片邊り、梅が畑八幡宮の祠を望む。車は之れ  
より勾配急なる坂を登り、半袴穿きたる乙女の、頭に重き荷頂きたるを、面  
白くも眺めつゝ、次第に迫り來る山峽の、日影寂しき高雄道、とある茶亭に  
車を駐めて、車夫の案内に従つて、だらく坂を下れば、滿地の草青く敷き

たる上に、苔青白き楓の大木、風漏らさじと繁りくつて、幽邃なる事比するに物無し。谷に降れば、前を流る、溪流の響を返して、若葉青葉の木の葉の戦ぎ、日影亂る、地に草に、陰影を落せる緑暗く、河鹿の鳴く音寂しき森に聞えたり。



楓の幹は苔一面に附着して、風に揺らる、霧藻の色の淺緑、鶯草の花真白く咲ける下草を踏み、唐銅擬寶珠色寂たる朱塗の橋を渡れば、清瀧川の早瀬の音淙々として、山と山とに響き、老樹鬱蒼たる坂道斜めに續きて、一步は一步より急に、次第に登り行く頂高く、嵐氣漸く迫り來て、吹く風いと涼しうなりぬ。

坂はうねうね長き九十九折、五六町登りし所に弘法大師額書岩と云へるあり。傳へ云ふ大師在住の砌、帝詔して金剛定寺の額を、空海に書かじめ給はんと、勅使を高尾の峯に遣し給ふ、折から夏の五月雨して、清瀧川の水嵩増り、往來全く絶え果てつ、勅使詮方なくて河の畔に立煩へるを、大師は彼方の岸に立ちて、筆に墨を含ませ持たる額に向て書給へば、墨霧の如くに飛んで、金剛定寺の文字忽然として顯はれしと云ふ、額書岩を過ぎて、峻しき石階を登れば二王門、眞言寺の額は、仁和寺の宮の筆と聞きぬ、門内に入りて、廣き境域を逍遙へば、金堂、五大堂、大師堂いたく年古りて、楓の若葉日に映し、山院人無く、寂々寥々たる木の下蔭、敷石の苔深く蒸して、風に片寄る落葉は、彼方此方に朽ち果てぬ。山高ければ雲霧絶えず往來して、晴れ曇りする雲の影、明るくなり、暗くなり、何所とも知れぬ山奥に、おぼつかなくも啼く幽禽の聲、我等は金堂の前よりだらりと降る坂を下り、更に赤土山の上に登れば、隠すもの無き青き芝生華やかに、空うら

く雲白く飛ぶ山の上、地藏院趾の方丈に至り、案内を乞へば、留守居の女出て來りて、茶を薦めつゝ紅葉の秋を語る、此所に宿より持來りし辨當を開き、澁茶啜りながら眺むれば、前は幾千尋の溪谷深く陥り、青き楓、雜木の若葉、斷霞の中に明滅して、清瀧川の水白く流るゝ面白さ、幾重の山、幾重の雲、翠巒重疊せる愛宕山脈日に霞みて、靜寂なる山中愈々靜かに、嘗て文覺上人が一念發起して、入にし山の趣今も昔に異らぬ如く思ひなされ、鱧の壽司に舌鼓打ちて晝食を終り戯に土器投げを試むるに、小さき土器は木の葉の舞ふが如く、飄々として翻り、下にくんと落ち行きて、行衛も知れず消え去りぬ。

方丈を出で、再び金堂の前に來りし我は、鐘樓の後方なる和氣の清麿の墓に詣でんと、松杉暗く苔深き石段を登り、山本中澤二子は、麓なる橋の袂にて清瀧川の寫生をなさんと、別れくになりしが、案内に立てる車夫は、うねく登る細徑を、悠々として歩みつゝ、夏の日の強く背に射して、少しく熱

き眞晝の光を物ともせず、草氣蒸すが如き山道を、登りつ降りつ、竹藪の中を潜りて草深き所を行けば、足音に驚く小さき虫がさくくと走りて、石に隠るゝ青蜥蜴の、背光るも厭はしかりき。

木立小暗き阪の上、小さき素木の鳥居朽ち果て、濕りし土に積れる落葉堆高さ中に、二尺許りの石、苔に埋れて立られつ。之や昔時道鏡の爲めに、配竈の身となりし功臣が遺骸收めし所かと哀れに果敢なき心地して、涙ながらに幾度となく眺むれば、石碑の文字苔に隠れて定かならず、朝嵐暮雨、唯徒らに更け行く夏の物寂しさ。斯くて元來し道を返りて文覺上人の五輪の塔を、五町許りの上に吊ひ、橋廣相の序、菅原是善の銘、藤原敏行の書を以て名高き、三絶の鐘の鐘樓に至る。

麓に降れば、中澤山本の二子は既に寫生を終りし所にて、打連立ちて橋を渡り、紅葉の頃や如何ならんと物語りつゝ、日影微かに漏るゝ青葉の蔭の川添を、上へくと辿り行く。苔の細道幽かに通じて、耳に涼しき河鹿の聲、川

瀬の流れ漕々たる溪底の、草の緑鮮やかに、歩くとも無く行き盡して、右に小高き断崖の蔭、蒼き水深く殿みし彼方の岸は、水車の音長閑に響きて、水に浮びし材木筏の如く積み重なり、若き娘の半袴穿きたるが、白き手拭に日を避けて、子供相手に遊び居る風情、曆日無き山中の趣深く、面白き事極なかりき。

右に曲りて川添の片岨道を進み行けば、川幅漸う狭くなりし彼方に、朱の欄干の橋高く溪流の上に架り、日影遍き向ふ山、巖にむせぶ水の音響にひびきて、左手に高き崖の上、御堂の屋根青葉隠れに露はれつ。楨の尾の西明寺は即ち之れ、楓は思ひしより多からねど、名所圖會めきし位置、面白ければ寫生しつ。之より更に榭の尾に詣でんと、橋の袂を右に細き道を登り、藁屋の前を過ぎて稍廣き大路を辿れば、牛車のそり／＼と幾つか續きて、歩みにくき事限なし、忙しく一二町を抜きて、だら／＼と坂を下れば、楓の老樹蒼鬱たる緑蔭に、白雲橋と記せし橋横はりぬ。溪水亂石の間を走りて、鏘々たる音

山谷の間に響き渡り、深き所は蒼く、浅き所は白く、山影樹影逆に落ちて、青葉亂る、溪の風、橋渡り行く杣人の後より、彼方の岸に至れば、寺に登る道は左に長き石階續き、右に川添の廣き道青葉の中に消え去りぬ。我等は一歩／＼に長き坂を登り、古りたる寺門を入れば、此所に杣山石水院と記せし木標あり、後鳥羽院詔して建保六年、加茂の御別墅を此に移轉せらる、明治二十八年迄、六百七十八年と書添えられし邊に立ち、幽草離々たる庭内の堂宇を眺むれば、風雨に年古りたる建築、朽ちなん許りに、人も訪ひ來ぬ山寺の、花咲く儘に咲き、散る儘に散り、荒廢し行く寂しき、身に泌む許り哀れなるに、遙かに麓の方を願れば、青葉の中行く牛車と、流るゝ水と、白き道と、水彩の如き輕き趣捨難く、暫時鉛筆のスケッチをなし、次第／＼に元來し方に引き返せば、折から山より柴木背負ひし若き女の一隊、半袴姿にて降り來りぬ。

橋を渡りて廣き道を、何所迄もと登りつゝ、半里許りにて紅葉屋の邊に至

る、車預けし茶屋に立寄りて、冷たき清水に乾ける唇濕しつゝ、媼の語るを聞くに、梅が畑の媼が頭に載する巾は、白木綿を四角に切りて縫ひ合せ、中に藁を入れしものにて、嘗て昔時何某の帝、戦ひ負けて高尾に逃れ給ひし時、梅が畑の若き女子が木綿の袋に米を入れ、菖蒲谷の假御所に送りしより、今に至る迄用ゐるものにて、梅が畑の者は京は云ふに及ばず、瀬田の橋にても近頃迄橋錢を取らざりしと、得意氣に話す面白さに、暫時時の移るを忘れつ。



歸りの道は坦々として砥の如く、眞一文字に走り降り、雲雀の聲を空に聞きなしつゝ、麥生の緑長く續ける山蔭を、ゆられくゝて走り行く。仁和寺近く五智如來の山を左手に望み、日影傾く午後三時、松吹く風に送られて、いつしか並が岡の蒼翠を右に、白壁輝く町に入り、妙心寺の裏門に至りぬ、我等は此所に車を乗り捨て、松の影長く地に曳く寺内を行くに、法堂佛殿昔の儘にありながら、何と無く物寂しく、雪江の松の傍を過ぎて十六羅漢に名高き山門前より、再び待たせ置きたる車に乗り、家疎らなる新開地の、荒涼たる大道を駛る。西の京の水田緑の色浅く打畑り、白き家鴨の鳴きつれて、道を横ざるも長閑にて、立本寺の門前より右に曲れば、大極殿趾と記せし、大なる石碑の立てるを見る、桓武天皇皇都造營の趾にして、幾度か炎上の災に罹り、いつしか今の地に移れるもの、千有餘年の遺跡と思へば、一塊の土、一片の石、皆悉く歴史の趾を語るが如く、何とはなしに立去り難くて、少時懐古の想ひに耽りぬ。

此の邊三面聚樂と稱へて、豊臣秀吉が豪華の限りを盡せし、聚樂御所のありし所、四方三千坪の石垣、銀の柱、黄金の扉、瑤臺の春、花に明るく、水樓の秋、月に更けて、阿房宮の昔を忍ぶ目ざましさも、秀次滅亡の後悉く毀ちて、伏見の城に移したれば今は、唯空しく残る町の名に、榮華の様を想ふのみ。之れより道は狭き小路に入りて、右に曲りし所



は、石垣積きの練塀高く、之は何ぞと車夫に尋ねれば、監獄の裏門なりと答へたり。塀の盡る所を左して、行く事僅か二三十間、濠の水繞らしたる城壁、折しもの斜陽に照らされて、松吹く風の響夕に迫る二條城、今は離宮となりて、外廓を眺むる許りなれど、西の空明るく晴れて、叢立つ雲の色黄に輝やき、次第く赤くなり行く背景と、白き城壁と濠の水との配合の、絶えず

移らふ面白さに、車上ながら幾度と無く顧みられつ、夕闇白く仄見ゆる堀川の流を橋もとゝろに打渡れば、柳の緑暗く垂れて、里へと歸る白河女の手拭白く、暮れなんとする家々の、軒の街燈ちらくくと、夕忙しき人の足は、走馬燈の如く縦横に亂れて、空に聞ゆるは騒然たる大都の響。

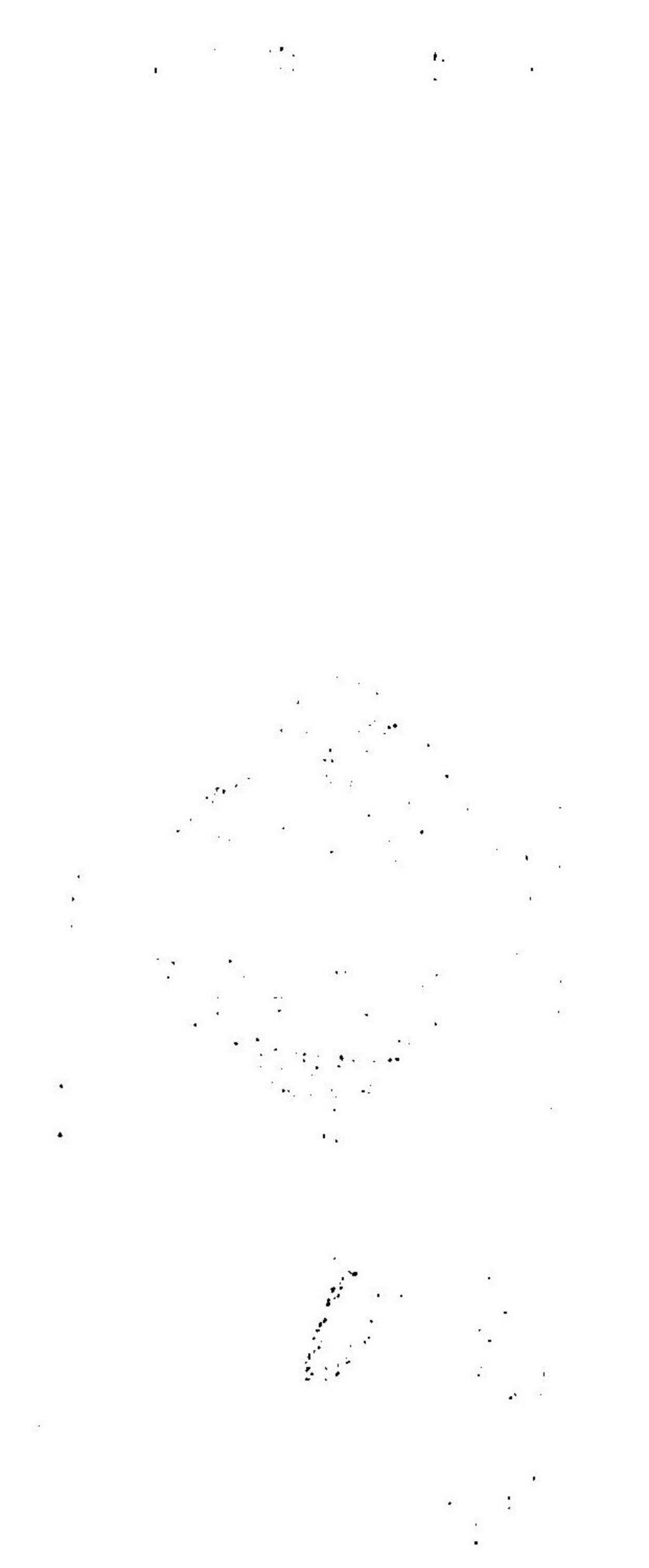


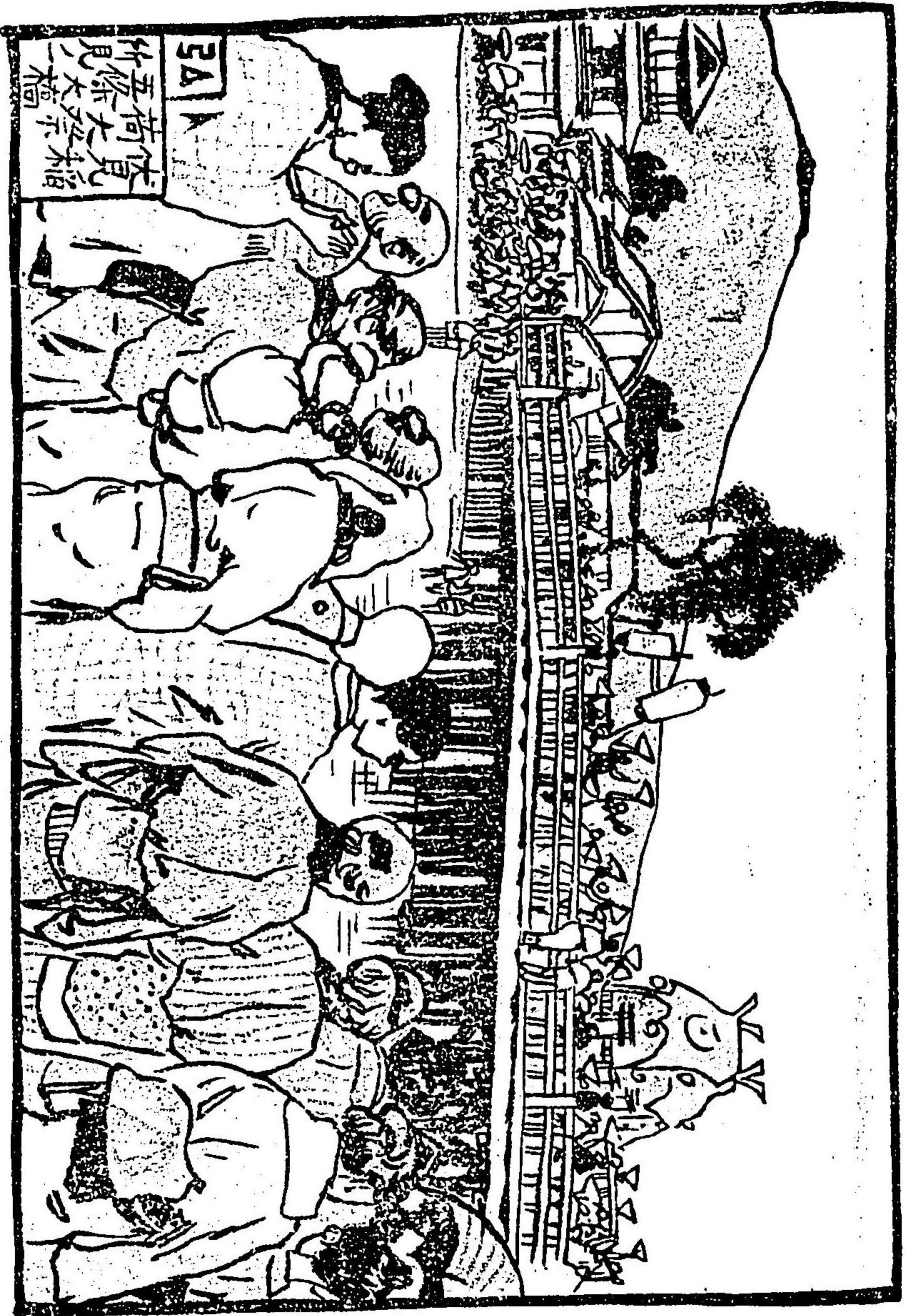


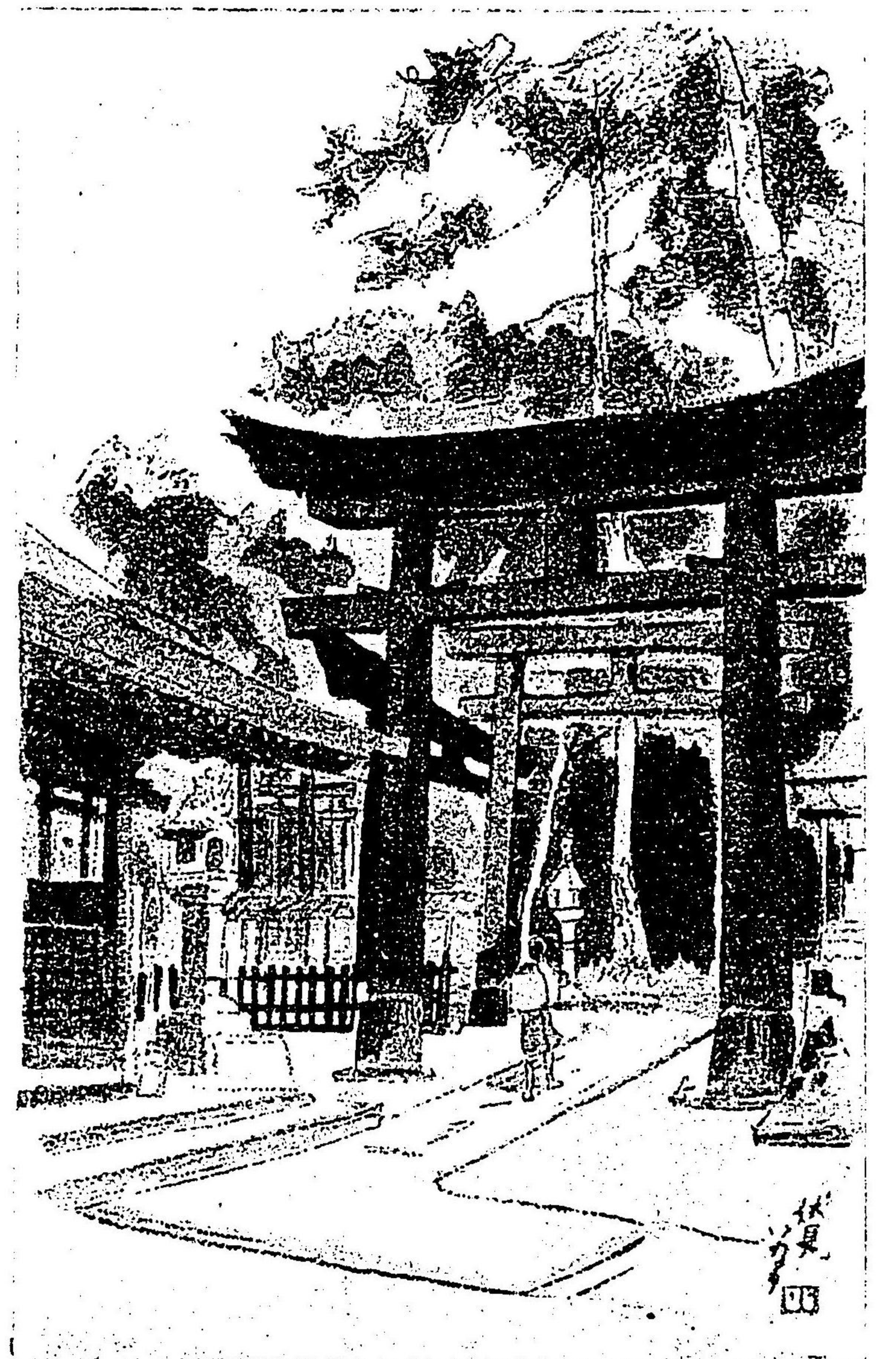
182.

山 北



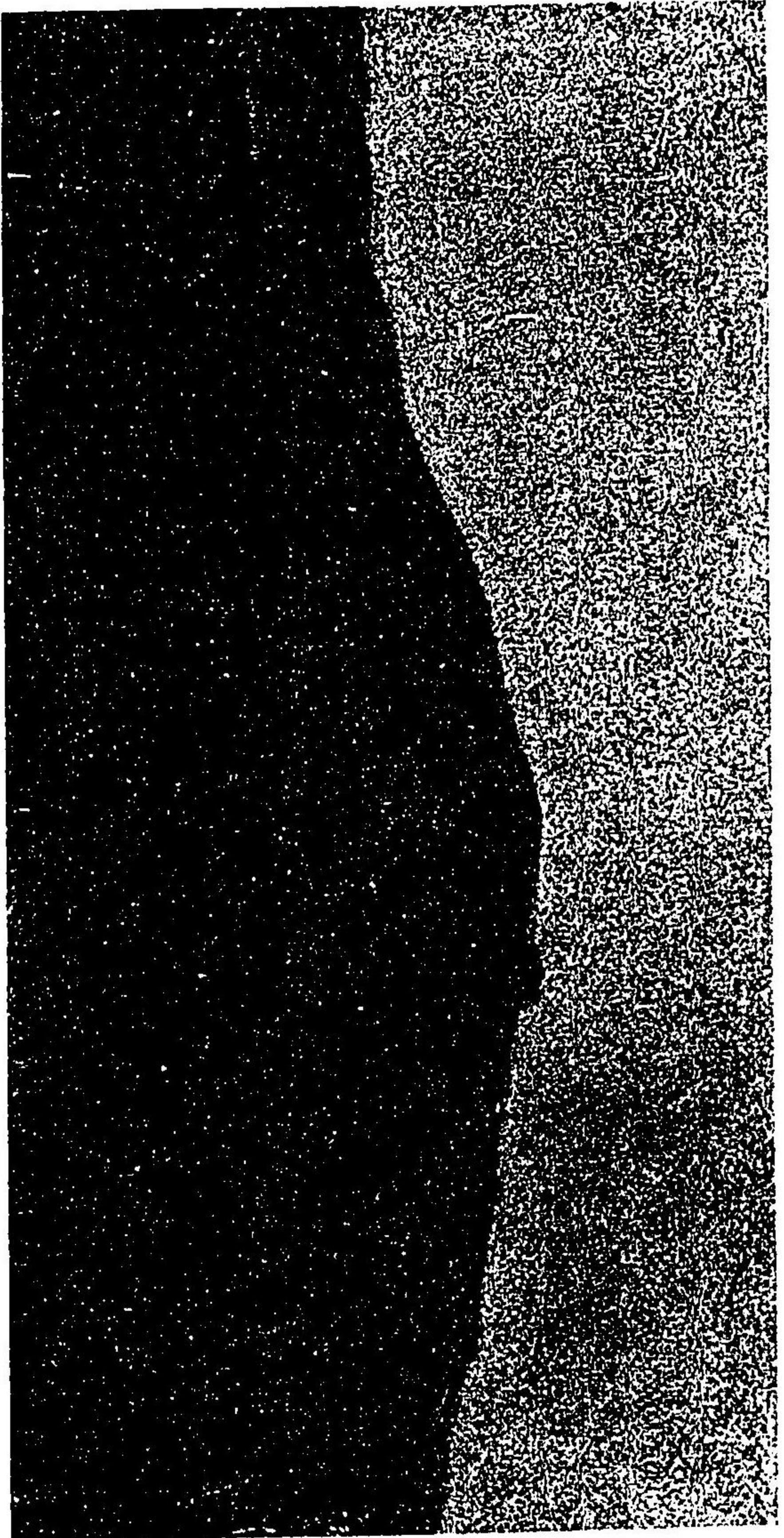




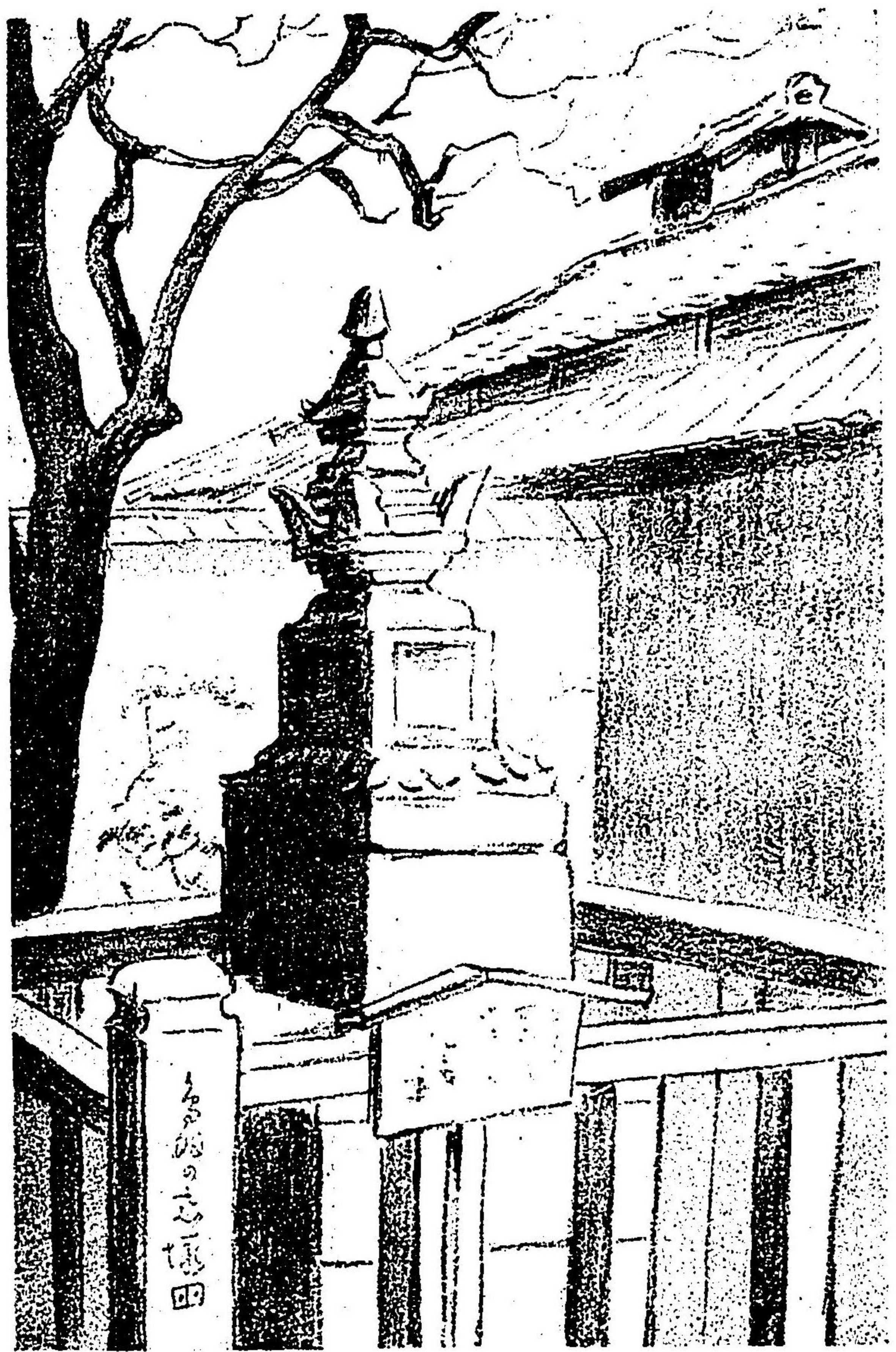


秋見  
印

東の寺  
山の本  
森之助







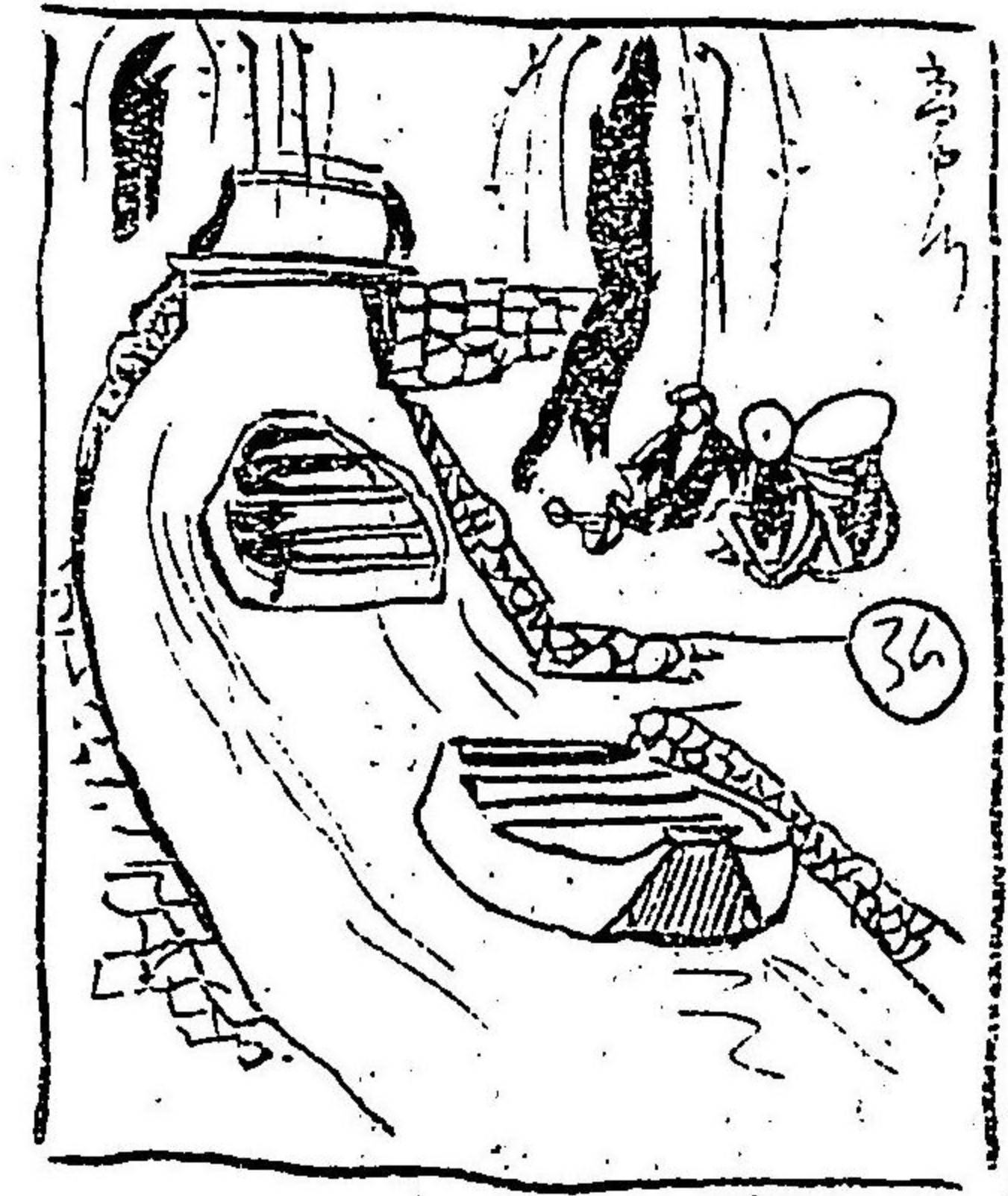
戀塚  
小 林 鍾 吉

伏見鳥羽

五月七日の曉早く、高瀬舟の聲に眼覺めて、顔洗はんと河原に立てば、柳烟りて水温みぬ、緑に埋もれし東山、日和かに雲を透かせる蒼き空は、融々として霞み果てつ。静かに流るゝ水を見れば、青く茂れる傍に、今日も晒しの職人まめやかに働きつゝ、友禪染をさぶくを晒しては流し、流しては晒し、引き上げて又がらくと水を絞る風情面白く、少時呆然として眺むる間に、朝餉の仕度出来たりと呼ばれて宿に歸れば、今日は伏見の稻荷祭なれば、是非見物してと云はるゝ儘に、朝餉をこゝくに片付けて町に出づ。風無き日なり、高瀬川の柳地に垂れて、緑更けたる水のほとり、長き綱肩に



懸けて舟を曳く男は、エイホー／＼と掛聲鈍く、後に／＼と繋りて、川上を  
 して遡り行く。團栗橋より五條迄は僅か二町許り、ぶらり／＼と歩きつゝ、  
 京の町は何所も同じ様なる家作り  
 て、殊に厠の一部に、三角の穴ある  
 箱置かれしを、初めは何とも解き兼  
 ねしと、物語りつゝ打笑ひて、唐銅  
 擬寶珠の欄干大なる五條の大橋に至  
 りぬ。



幼き昔草双紙縊きて、辨慶牛若丸の  
 勇しき戦に、我等の胸跳らせし事幾  
 度ぞや、團々たる紅月欄干に昇りて、  
 柳小暗き鴨の水、虫垂絹に姿を包む御曹司が、豹の尻鞞腰に穿きて、横笛の  
 音も澄み渡る秋の夜中、影の如く後に窺ふ荒法師の怪偉なる姿は、野獣の如

く跳りかゝる光景、欄干の擬寶珠と共に、忽ち腦裡に浮かび來りて、遙かに  
 見ゆる清水の塔東山の緑、千古の昔を語るが如く、往來忙しき人を見送すれ  
 ば、初夏の日暖かく照り輝き、衣香傘影霽々として霞み行く。

稻荷祭

金屏風立て運れた家々の店先は、帳場格子を表近く出して、中には毛氈を敷い  
 て、寶珠の紋の付いた幕と提灯とが軒に下つてゐる。何所に行つても狭い通  
 の右も左も同じ様に、神輿の渡るのを待つてゐる人がぞろ／＼歩いて、紅い日  
 傘、藍の日傘、長い袂の派手姿が入り交つて、町中が動いてゐる様だ。  
 最う彼の角に來たと言ふものが有ると、浮ついた人の足は一度にどつと其の  
 方に崩れて、ばら／＼散りながら團まつて、寺町通を押して行く。金屏風の  
 前で、重詰を開いてゐた者が總立ちになる。アアワツと云ふ人聲が空を傳はつ  
 て、何さなく騒がしく、日は乾いた町並の瓦に照り返して、汗がしつとり額に浮

いた。折から又向ふから駛けて来るものが、何やら吐鳴つて行く。警官を先に立て、静々長い祭の行列が来る。白丁を着た男が先に傘を擔いで行く。左右に濺色の雜司が四人、橋の曲り角なので、急いで曲つて了ふのが惜しい様に、首に勅裁の繪旨、赤地錦の袋に遣入つたのを持つて、次に弓次が桐櫛の葉のむしり取られたのや、菅蓋や、錦蓋後からくさ来るのを忙しく迎へて、見送つて、人波に押され、橋の袂に来る。折しも寺町道の角を曲つた神輿は、電車の前を突き切つて、橋の方へさ動いて来た。強い日が眞上から照らすので、金の金具、金の屋根、金の千木がきら／＼光つて、エイサ／＼と響む聲につれて、金具の擦れる音が、が／＼と響く。屋根に纏ふた緋の中は、眞赤に燃えて、白衣の若い者の頭が群つた儘急に進む。橋を少し渡りかけて、又颯と後ろの方に崩れて来る。其の度毎に、アツと上る人の動搖きに連れて、神輿は再び橋の方に進んで、頭上高く差上げた儘橋の中央迄押して行つた。

高張提灯が二つ、橋の中央より先をうる／＼と東山の薄霞、緑に烟る岸の柳をすれ／＼と動いてゐる。光つた金の神輿と、白衣の若者と、扇を上げて煽り

上げる音頭取りと、古い祭禮の繪屏風でも見る様な面白さに、高い積木の上に乗つて見てゐる。又後から二番の神輿が、エイサ／＼と掛聲勇ましく燃つて来る。中央まんなかに来る神輿は、屋根の上に千木が無く、風風が高く止まつてゐる。五つの神輿が橋を向ふに渡り盡す。又元の通を此方に返つて来るので、見物の群衆は、其後を追つて急いで行く。自分等も伏見の御本社を見やうと思ふので、急いで電車に乗つて了つた。七條から先は風を切つて走る廣い平野野にも山にも日が照つて、蒼々とした空の下に、緑を敷いた、洛外の景色は、光に溶けて茫々霞み、南へ／＼と走つて行く町を外れた加茂川傳ひ、土手の草は青く伸びて吹き入る風が涼しいので、窓から外を絶えず眺める。左に婉々として尾を張つた小高い山、松が多いので、黒っぽく見えるのを、稻荷山にしては近いと思ふ中、勸進橋に着いた。

土手の上から見える田中の大鳥居、青い草の配合が如何にも面白く、だら／＼と細い徑を降りる。小さな溝流れる水に、咲き残つた花が映つて、泥蟹が穴から出ては、足音に驚いて隠れて了ふ。長い暖路を進むで、行く。突當つた所に、又大きな朱の鳥居、其所から遙か北を見る。長くうねつた田中の道は、陽

炎が立つて、青い／＼田や畑が地平線迄擴がつて、愛宕の山が淡く霞んだ下に、東寺の塔が建つてゐる。

自分等はさある店に立寄つて、晝食を済して神輿の來るのを待つてゐる間に、伏見焼の店に這入つて、土人形や狐を買つてゐる。主人は人形屋幸右衛門の事を話し出す。伏見の狐は元來伏見の土で焼いたので、赤土の儘のが好いと云ふのを聞いて、少時立つて眺めてゐる。樓門の方で俄に人の聲がする。自分等は直様石段を降りて、其の方に進む。拜殿の前は雲霞の如き人で埋められて、高張提灯が幾つと無く並んでゐる。神輿は丁度一つ這入つて來た所で、拜殿の周圍を、エイサ／＼と擽み廻す。金具の音や、大鈴の音が、がさ／＼鳴つて、凄まじい勢の若者は、押ししては戻し、押ししては戻し、ぐるりと廻つてから漸く御本社に納めて了ふ。後から／＼と來る神輿も、同じ様に擽み合つて、御本社迄來ると其所に置くので、其れから社司が神饌を上る。彼方此方に、疲れた若者は、石の上や小礫の上に腰を下して、烏帽子を取つて、煽いでゐるのや、水を飲むのや、嵐の後の様に静まりかへつて休んでゐる。

日は丁度五時少し過ぎた頃なので、次第に寂しい風が松に渡つて、夕に近くな

つて來る。折から聞ゆる笙の響、内殿の奥の暗い中に、衣冠正しい神官が動いて、拍手の音がぼん／＼とする。自分等は最う祭を見て了つたので、御山に行かうと、上の宮の前へ來て、大きな朱の鳥居を潜つて、幾つとも重なつた小さな鳥居の中を行くと、行つても／＼

果しが無い、暗い／＼松の蔭に、寂しい風と赤い鳥居、何と無く薄暮の氣が迫る様に思はれて、さう／＼

て來て了つた。

で、行かすに出

\*奥ま

電車停留場に來ると、疲れた足を引きす

つて、乗る若い者が一杯で、田甫の方を見る。細

い長い一筋道を、繋がつて行く白衣の人が、沈み

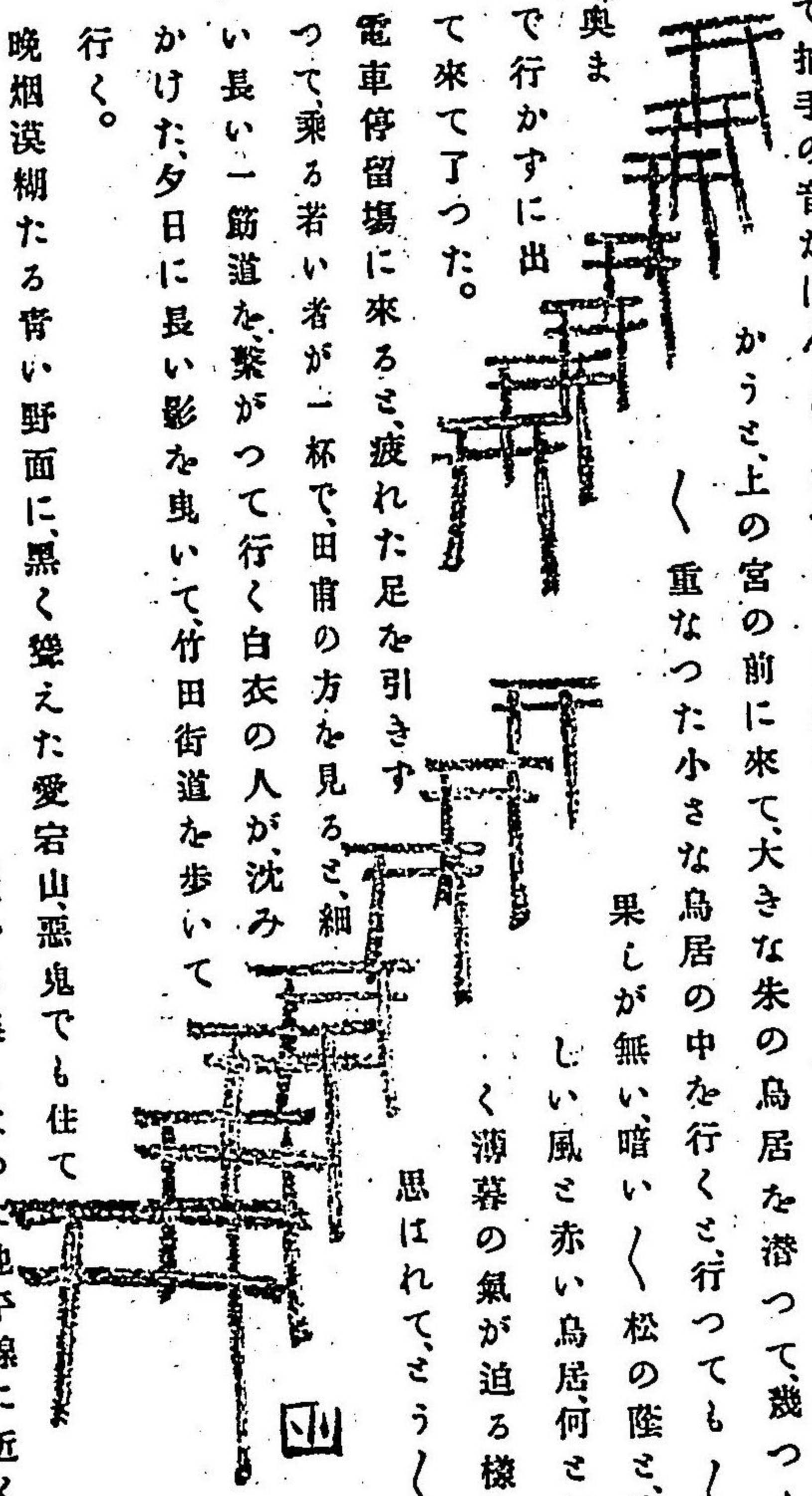
かけた、夕日に長い影を曳いて、竹田街道を歩いて

行く。

晚烟漠糊たる青い野面に、黒く變えた愛宕山、惡鬼でも住て

ゐさうに、頂丈けこんもりした所が有つて、微かに淡くなつた地平線に近く、ち

らく／＼黄ろい光が見え出した。



宵より吹きすさむ風巷に荒れて、空飛ぶ雲は千々に亂れ、灰色の山、灰色の水いと寂しく、風邪引き添えて、熱さへ加はりし山本子は、朝より床に打ち臥して、講談に親しみ、中澤子は奈良に残せし荷物を取らんと出發したれば、只獨り車を雇ひて出で立ちぬ。

七條停車場の前を抜けて、鳥羽街道に進めば、荒れたる町の古壁作り、鐵工場に並ぶ牛宿のいぶせき様、夕顔の巻も思ひ出られて、吹く風寒く身に沁むを忍びつゝ、次第く東寺の塔に近づきぬ。

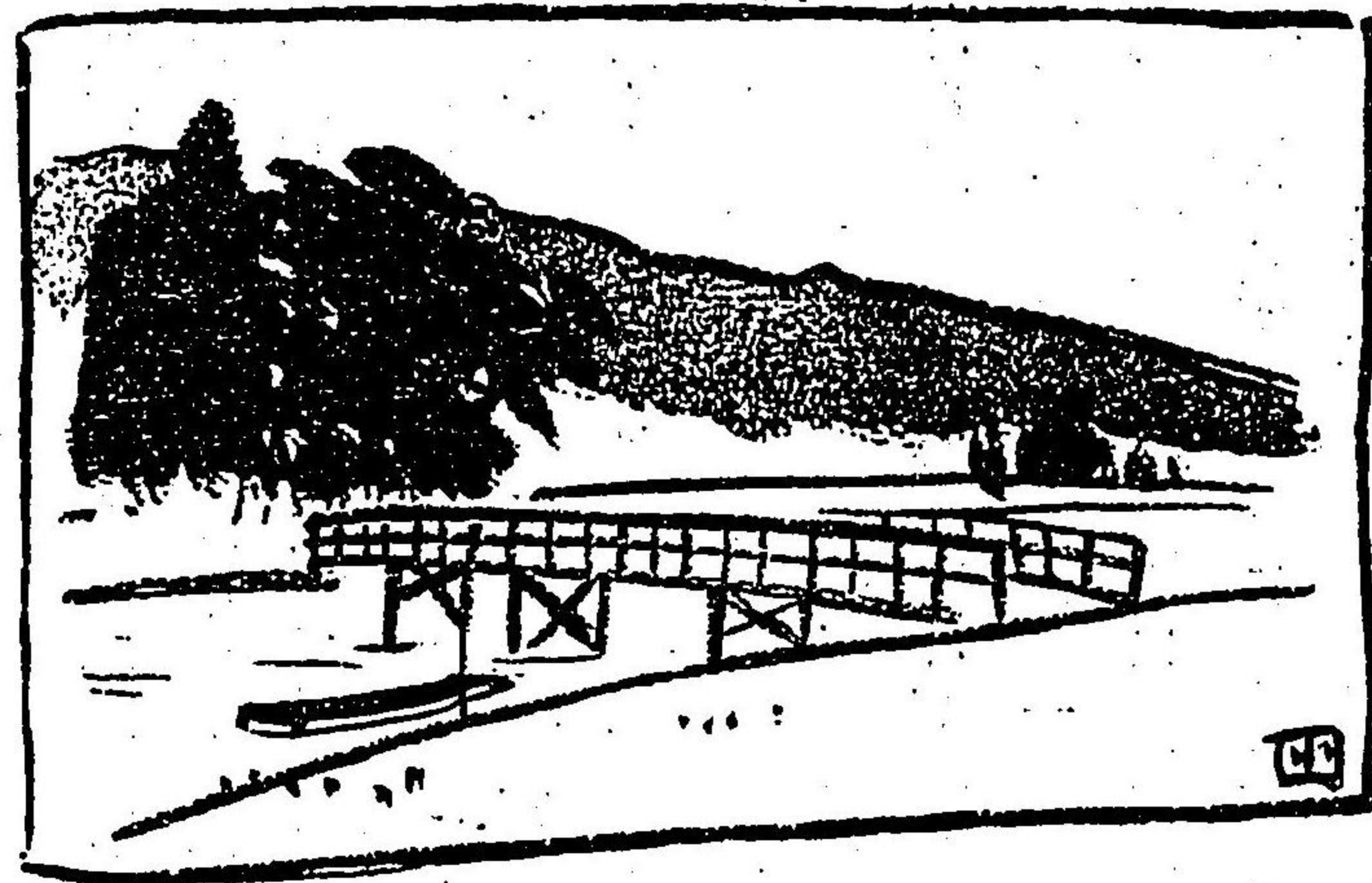
白き土塀長く續きて、風に揺らるゝ松高く、石橋の前にて車を止め、人氣少なき寺内に入れば、轟々として天を指す老樹、鬱として生ひ茂り、觀音堂講堂大師堂の、古りたる建築を眺めつゝ、五重の塔を小暗き森の中に望み、桃

山式建築の跡を止むる金堂の前に至る。豊臣秀頼の再建に懸り、二重瓦葺の屋根、大佛殿の建築に似通ひて、豪放なる趣面白く、小時佇みながら千餘年前鴻臚館の頃は如何なりけん、高麗百濟の賓客も、此の所に立ちて、東山の花、伏見の月を眺め暮らせし事ありしやと、果敢なき昔想ひ起しつ、應て灌頂院校倉などを見て、弘法大師が残せし奇蹟と、佛教の力の大なるを歎じつゝ、南大門を出づ。濠の水静かなる事油の如く、風に亂るゝ垂柳茫茫とし、灰色なせる白き壁、空には高さ五層塔、ちぎれ雲北にくと流れ去る東山一帯、烟るが如く微かなりき。

鳥羽街道を南に眞二文字の驛路、眼も遙かなる苗代小田の淺緑果なく連り、吹き荒るゝ風空を渡りて、轟々たる中を、何所迄もと走らすれば、一時間許りにして、低き家建て連ねたる上鳥羽に達しぬ。古りたる家多くは軒傾き壁落ちて、荒廢せる驛路の、日毎に荒み行く寂しさ何と無く悲しげに、家はありながら人の影なく、聞として眠れる如き大道を、二三十間進めば、荊萱道心

が住みしと云ふ刈萱堂、小路の横にあ  
り、猶南する事一二町、町を外れんとす  
る所を左に折れ、田甫の縁に添ふて七八  
間行けば、小さやかなる寺門の前、松ひ  
よろ／＼と高さ下に苔蒸したる石碑あ  
り。寺の名は淨禪寺と稱へて、遠藤武者  
盛遠の爲めに、果敢なき最期を遂げし袈  
裟御前の碑、林羅山の序銘あり、我等  
は少時車を止めて眺めしが、折しも通り  
かゝりし里の女に聞けば、下鳥羽の戀塚  
寺は袈裟の墓なりと云ふに、再び車を  
走らしつ。

雲の絶間を漏るゝ日は、幽かに青田の上



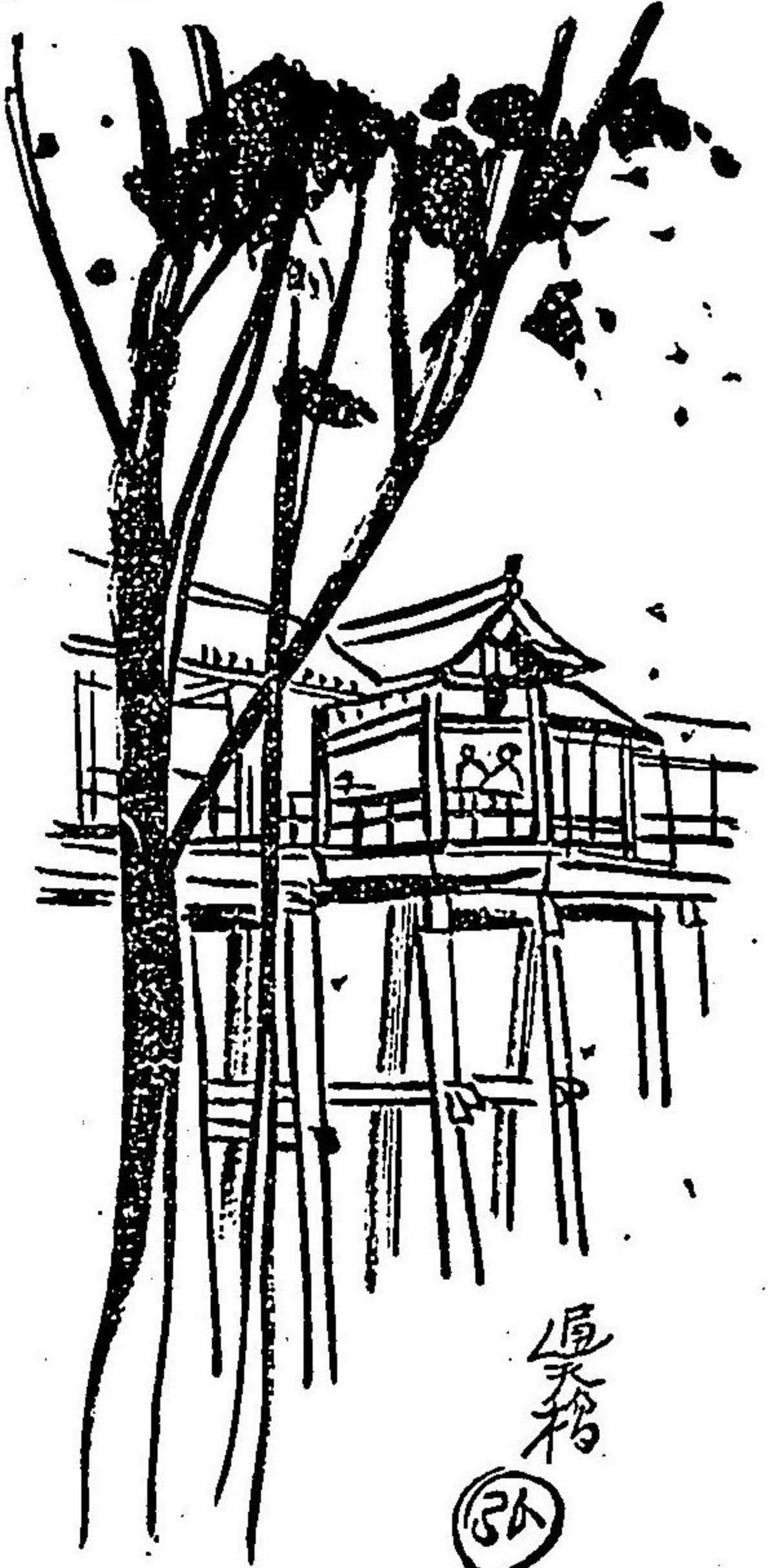
下鳥羽の戀塚

を照らして、灰色に白き街道筋、町を離るゝに従つて、漠々たる平野の風強  
く當り、土手の草青き鴨川の邊に至れば、橋を隔て、黒く聳ゆる城南宮の蒼  
翠、灰色の空を抜き、川水頻に波立てる渚の小舟、彼方此方に流れ寄りぬ。  
橋を渡りて行く事大凡五六町、下鳥羽の人烟稀なる堤防を走りて戀塚寺に達  
す。堤防を降れる所、椿の花紅に散亂する田家に接して、新しき寺の本堂に  
進めば、右手に古りたる五輪の塔、乾に向つて立てられつ、寺僧に問へば文  
覺上人遙かに高尾の山にありて、袈裟御前の墓に向ひ毎朝供養せん爲めと  
て、乾を向けしと物語りぬ。身は五濁の浮世を脱れて、高峯の月を望む身  
に、猶煩悩の羈絆離れ難きかと、可笑しくも思ひなされつ。少時紀念のスケ  
ッチをなし、再び車上の客となりし時は、午後四時少し過ぎし頃、亂れ飛ぶ  
雲次第に影を收め風風きて、薄日射し添ふ鴨川土手を、のそり／＼と歩む牛  
車遠く小さく、城南宮に近づく儘に、空に迷へる鳥の聲いと哀れなりき。  
橋の袂を降りし所は城南宮の森、日光達かぬ木の下蔭の縁暗く、白き石の鳥

居ほのかに見ゆる前を行けば、陰森たる空翠、荒廢せる殿舎、松の枯葉堆積せる道東に通して、小川流るゝ水田の畦に連りぬ、嘗て後鳥羽院の離宮營みたる地に近く、神功皇后三韓征伐の砌、勸請したる眞幡寸の社は即ち之れにして、千有餘年の星霜を経たる松の嵐、草依々たり冷露夕に遍く、花落ちて鳥空しく鳴きぬ、森を出づれば、野花仄白き畦道傳ひ、白河鳥羽兩帝が、仙居し給ひし兩殿北殿の趾、今は僅に字に残りて、宮趾蕩然として草徒に長くのびぬ、がたりくと動揺する車は、いつしか竹田の里を過ぎ、西行法師が鳥羽院の離宮に伺候せし時、居住せし菴と傳へられし、西行菴の前に至る、小川の清水音寂びて、水草繁き片邊り杉の生垣中は崩れて、住む人もなく荒れ果てつ。

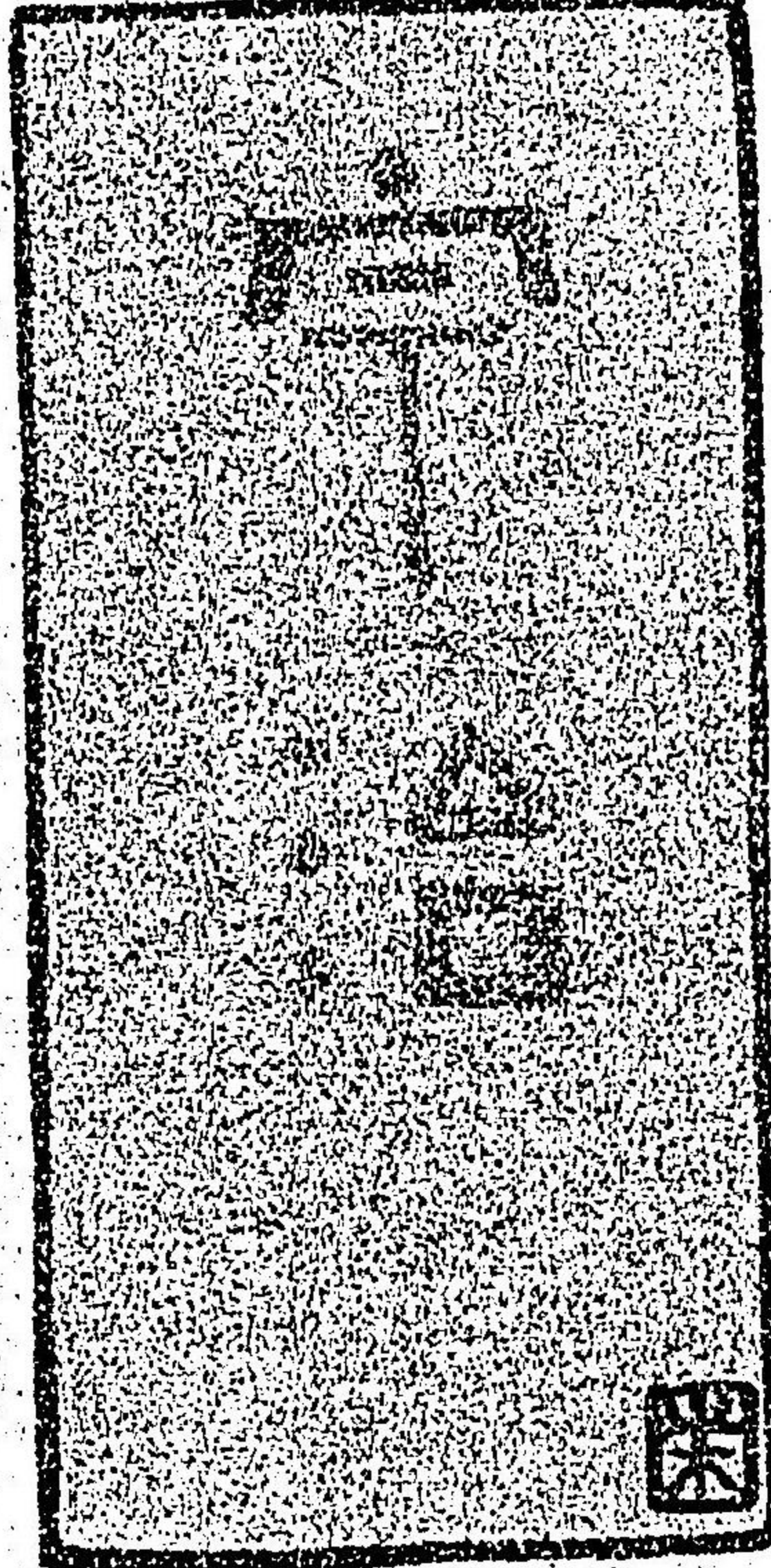
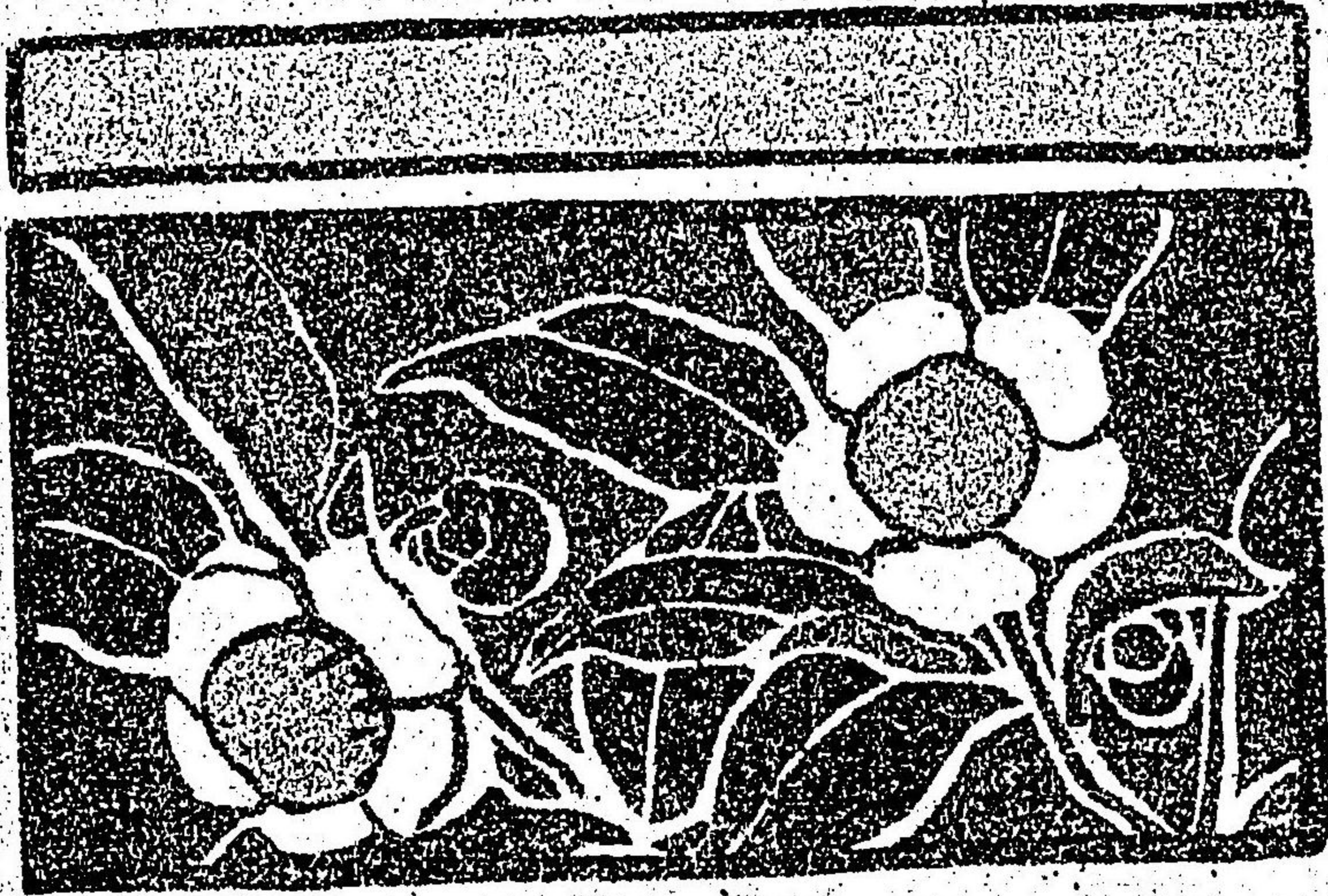
竹田街道を北にくと走らせし車は、加茂川に望める橋に至りて、右に葭青き堤の上を行く、西の空美はしく晴れて黄に輝き、餘光を落す川の水同じ色に流れ去る彼方は常盤木青き稻荷山、暮色靄然として迫り來りて、川瀬の音のみ耳に高く、更に稻荷社頭を過ぎて、東福寺に至る。

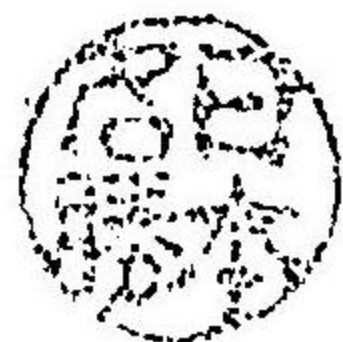
松に暗きだらく坂を登るに、夕闇白き練塀長く續ける萬壽寺は左に、五大堂は其の右にあり、廣き道を何所迄もと辿れば、選佛場の偉大なる建築、夕の空に聳え立ち、松籟颯々の響空漠たる寺内に飮して、幽かに遠き讀經の聲、法堂佛殿の扉閉されて、詣する人無き物寂しさを左して通天の廻廊に至れば、谿を埋むる楓の若葉、いさゝ小川の流れ底を縫ひて、青葉の中を走り行く風情面白く、素木造りの廻廊を渡り終り、左



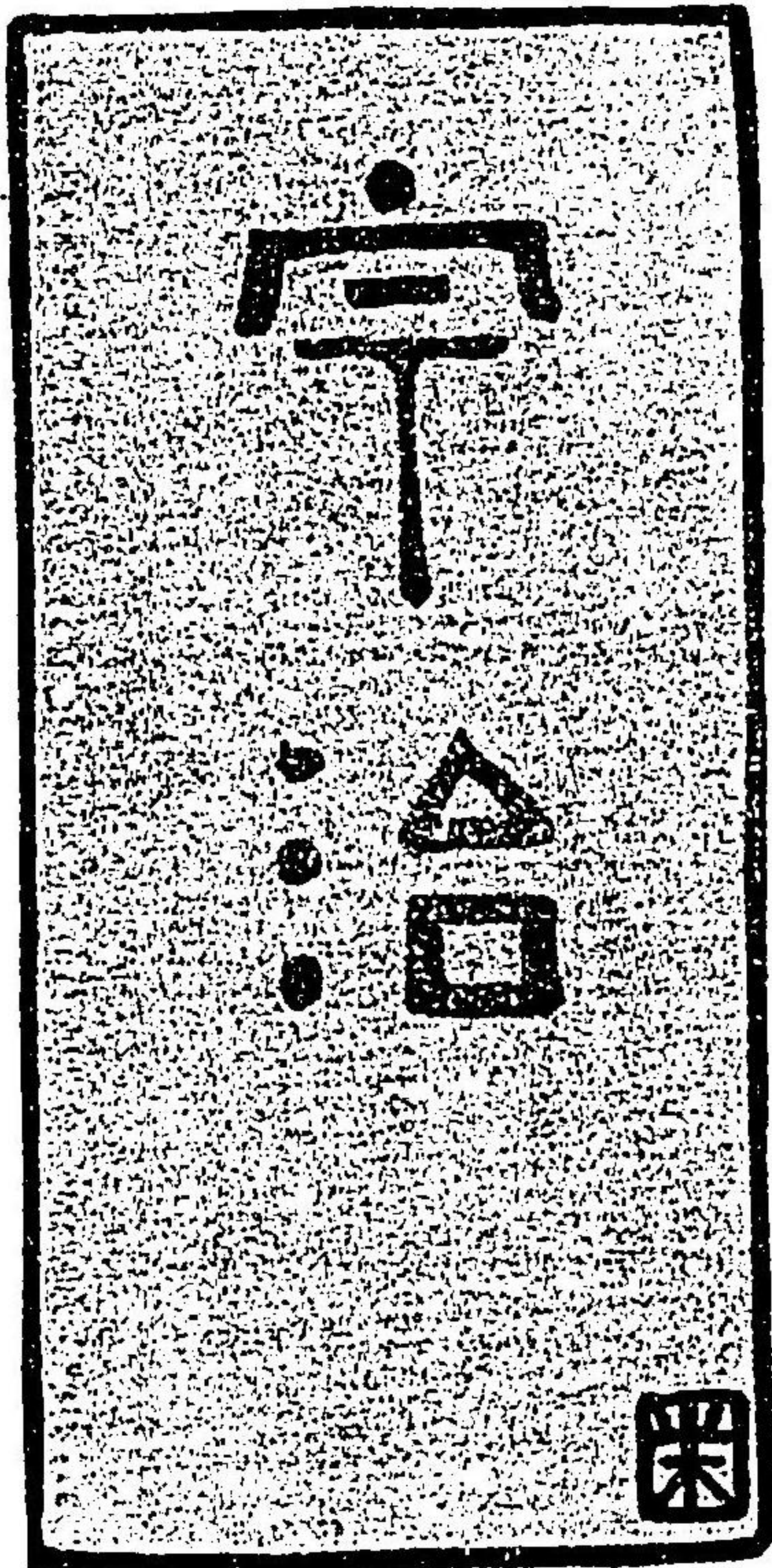
屋天松

手の茶店より眺むれば、黄める空と、廻廊と、青葉の色と、紅き提灯の色と、名所圖會めきたる趣捨て難く、スケッチの筆走らするに、そこはかと無く斐ひ來る夕闇暗く四邊を罩めて、陰々たる鐘の聲。梢を透す一つ星。廻廊の左に高さ傳衣閣を見んと、石階を登り、山門を潜れば、清げに掃かれたる砂白く、淡めきし勾欄、瑠璃の扉、ほのかに明るき餘光に照らされし、建築の明暗面白けれど、次第／＼に暗くなり行く心細さに、元來し道を引き返し、車に乗りて大和大路を北に、燈火黄に輝く街道を走らすれば、夜氣沈々として水より冷やかに、赤より紫に移ろひ行く雲の色、星の瞬きちら／＼して、晚烟靜に町より町を包み行く。



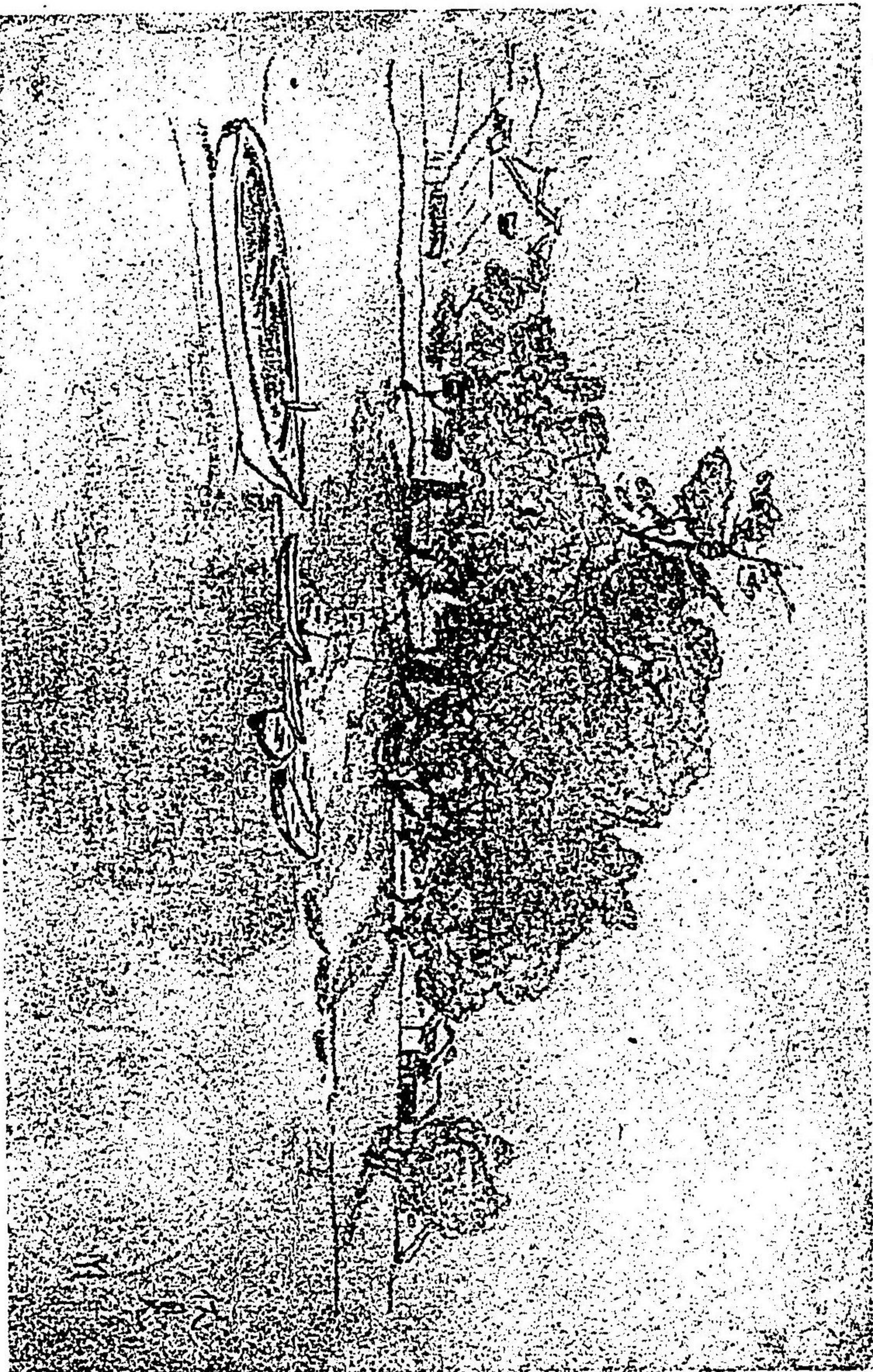


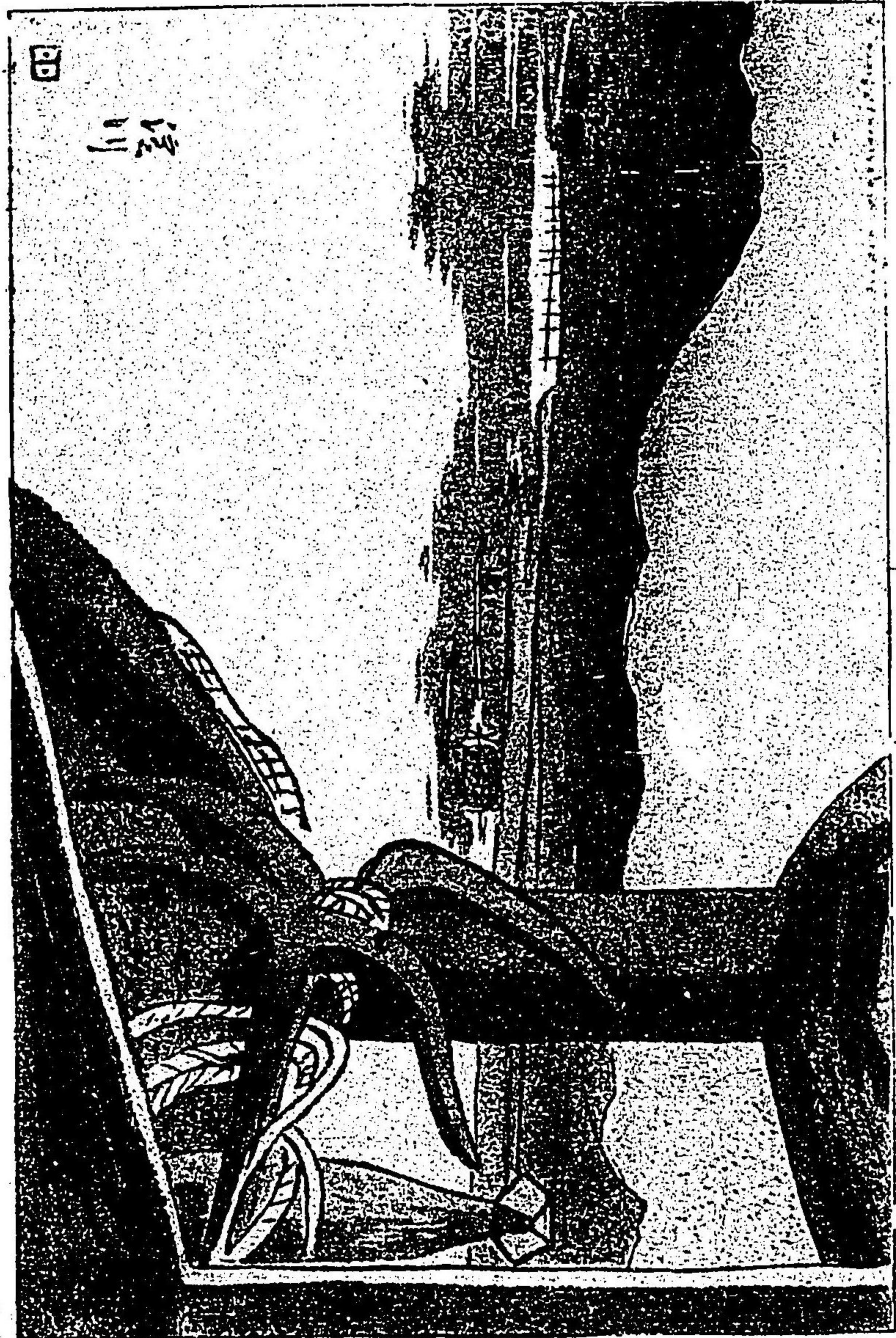
手の茶店より眺むれば、黄める空と、廻廊と、青葉の色と、紅き提灯の色と、名所圖會めきたる趣捨て難く、スケッチの筆走らするに、そこはかど無く、裏ひ来る夕闇暗く四邊を罩めて、陰々たる鐘の聲。梢を透す一つ星。廻廊の左に高き傳衣閣を見んと、石階を登り、由門を潜れば、清げに掃かれたる砂白く、淡めきし勾欄、瑠璃の扉、ほのかに明るき餘光に照らされし、建築の明暗面白けれど、次第くく暗くなり行く心細さに、元來し道を引き返し、車に乗りて大和大路を北に、燈火黄に輝く街道を走らすれば、夜氣沈々として水より冷やかに、赤より紫に移るひ行く雲の色、星の瞬きちらちらして、晚烟靜に町より町を包み行く。

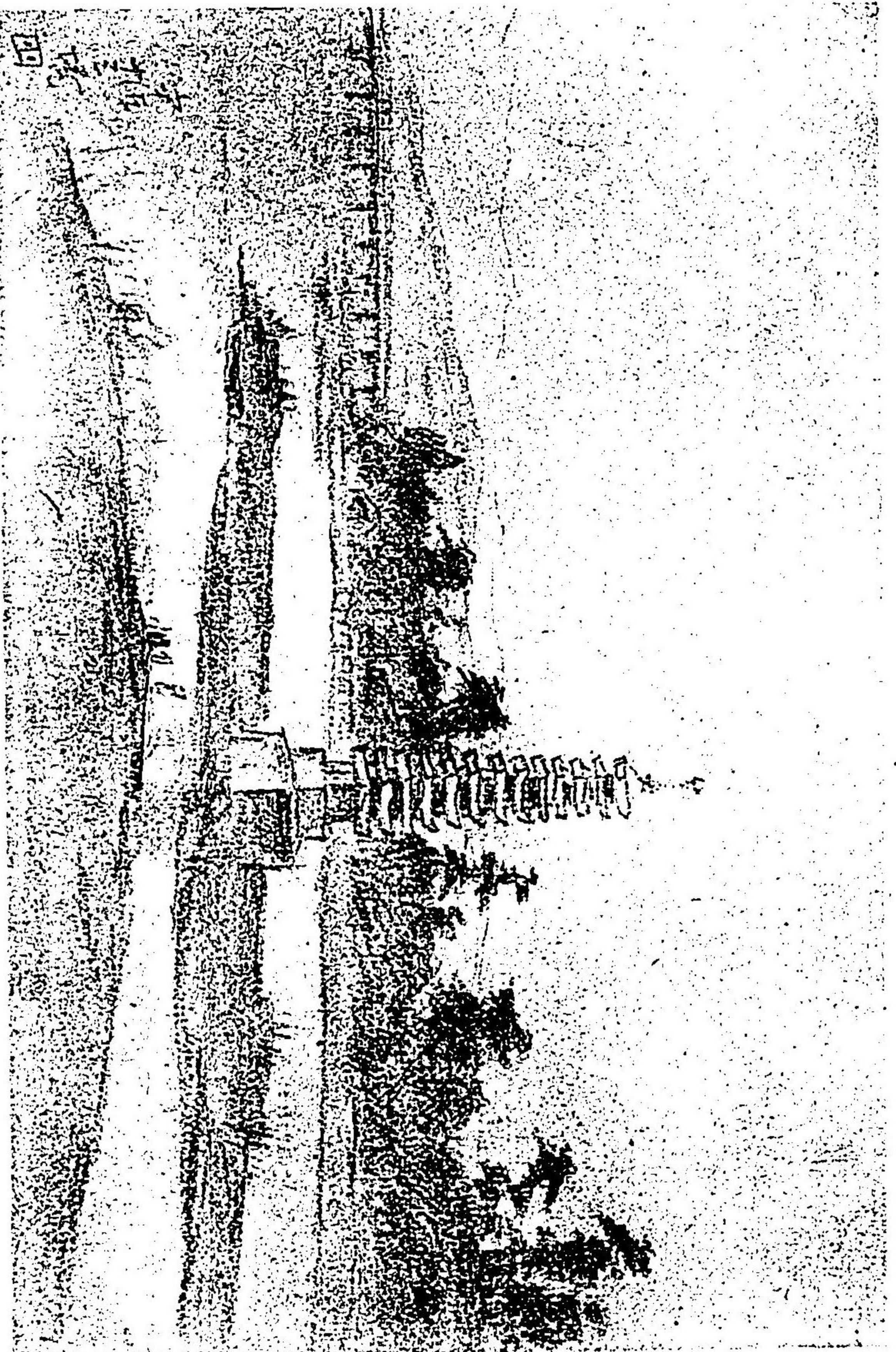




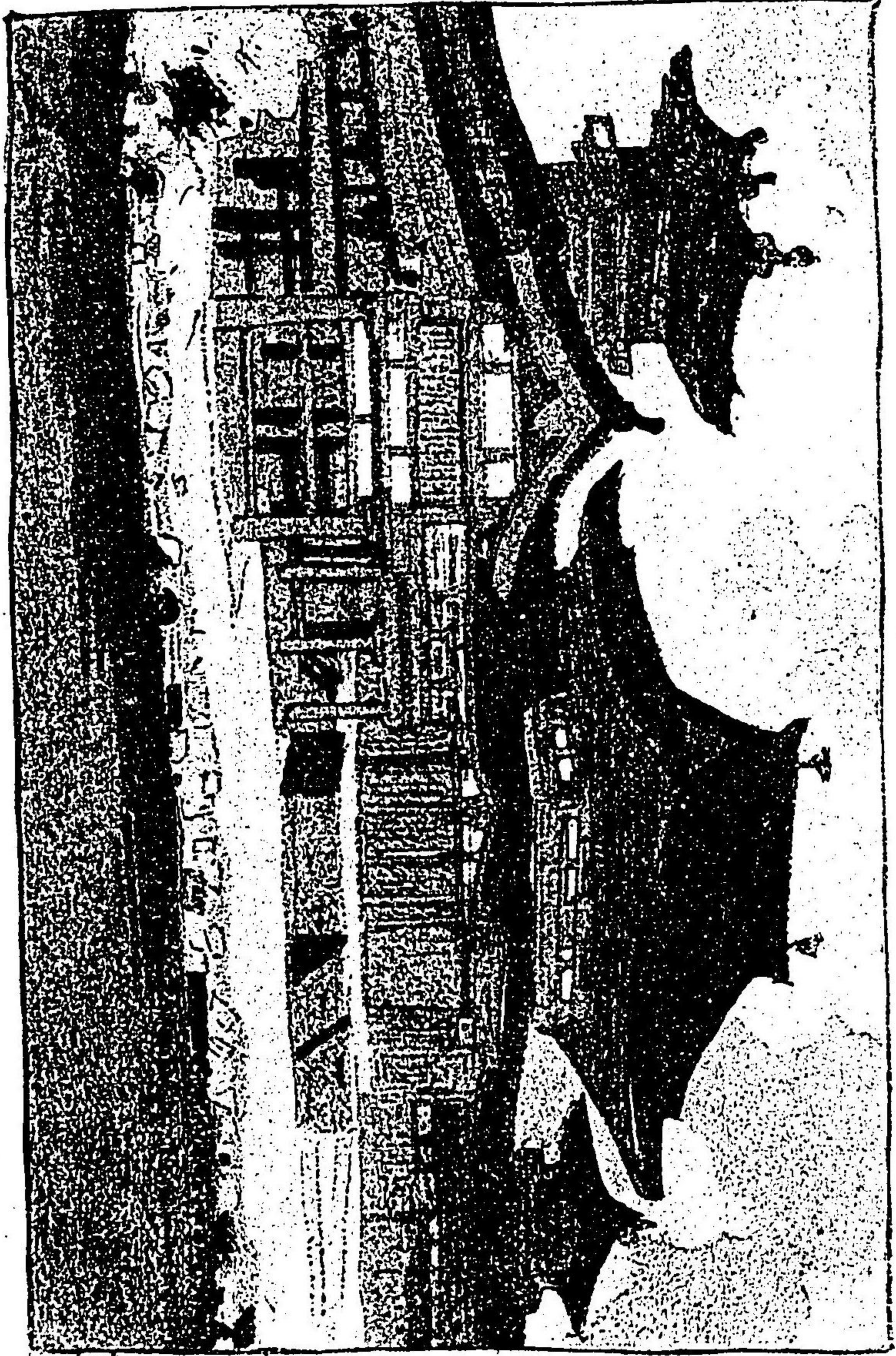
伏見  
山之森之助



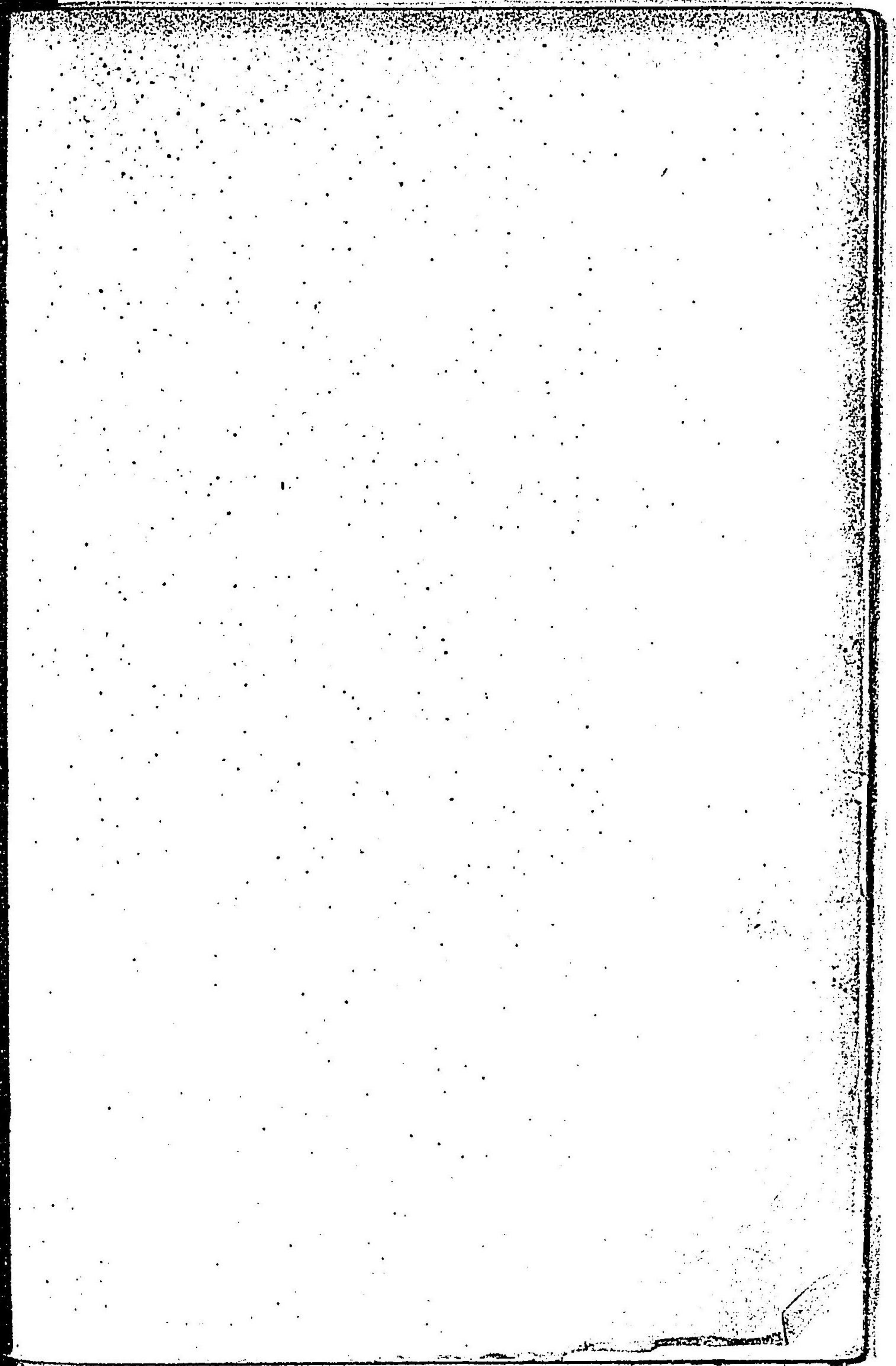


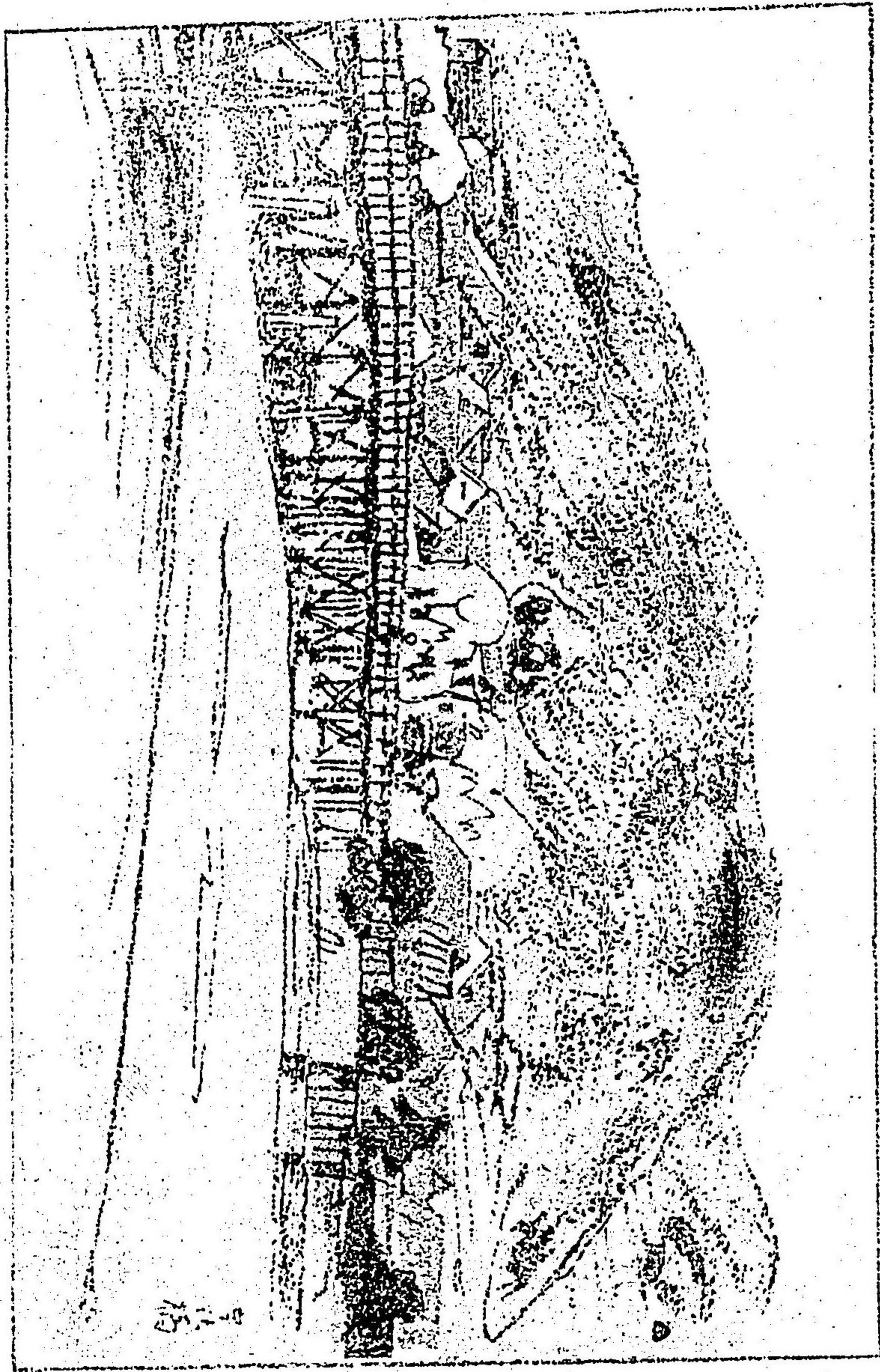


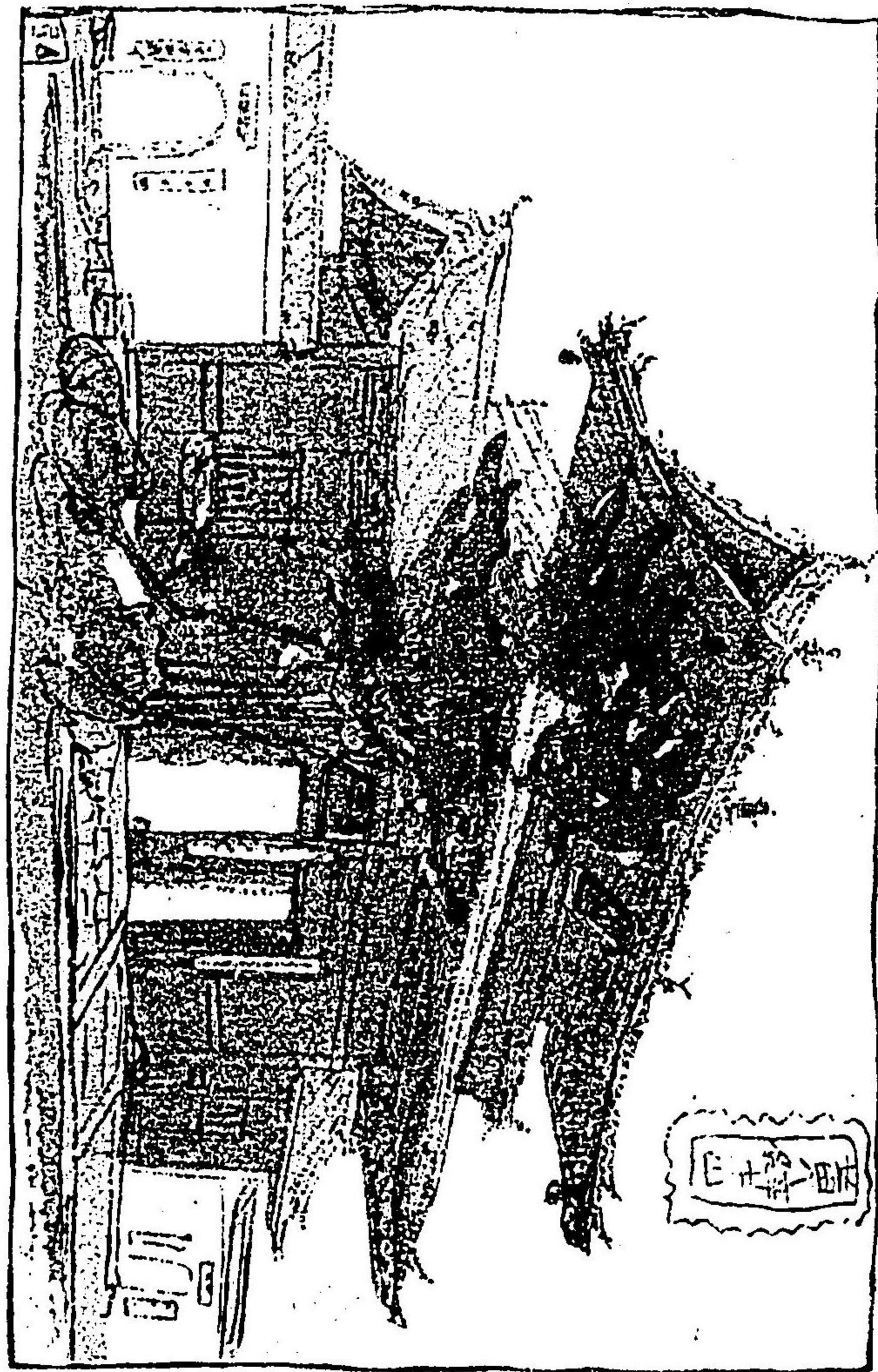
吉  
塔 鐘 林 小  
宇 十 治 三

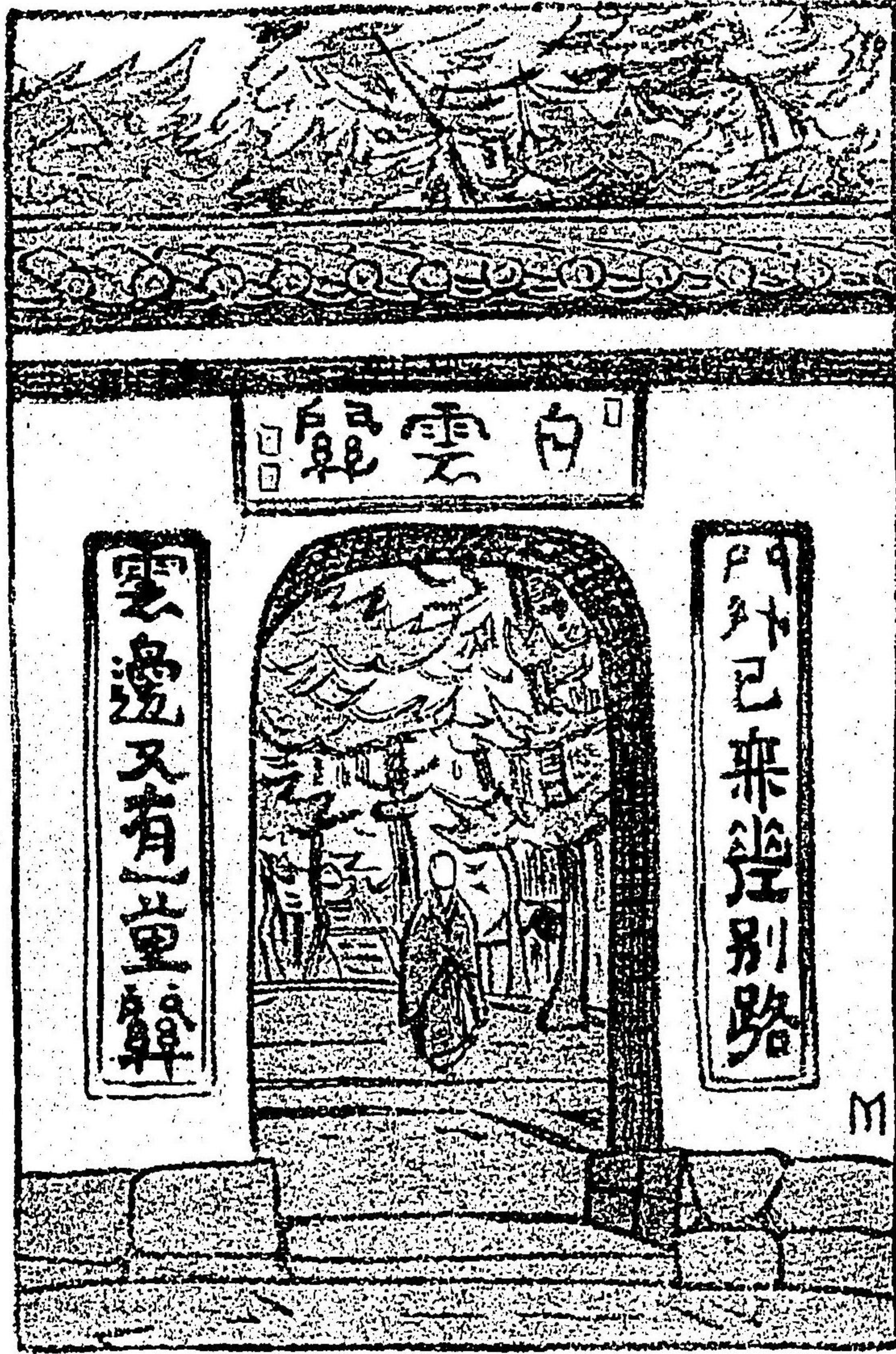


寺の境内







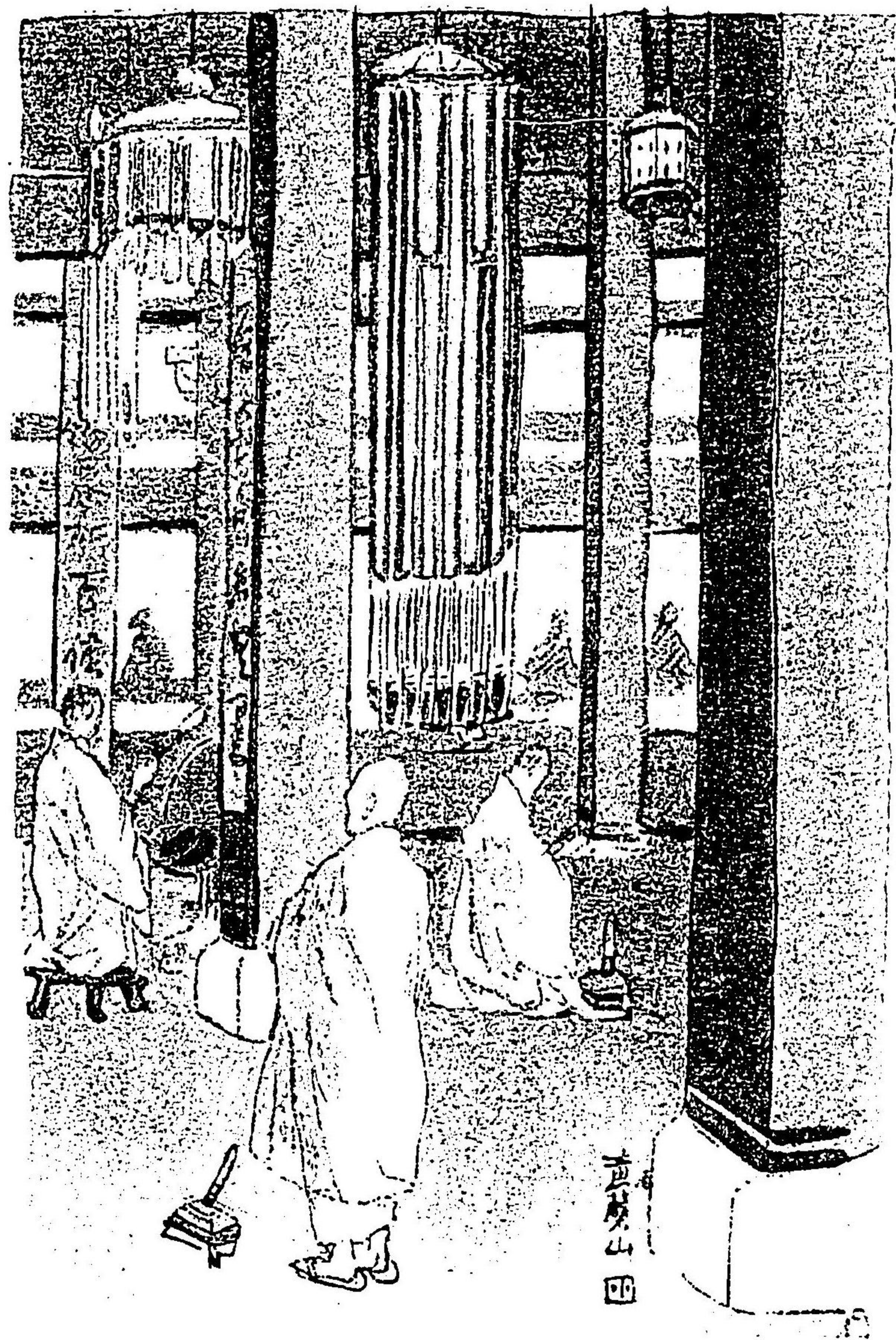


白雲

雲邊又有二重

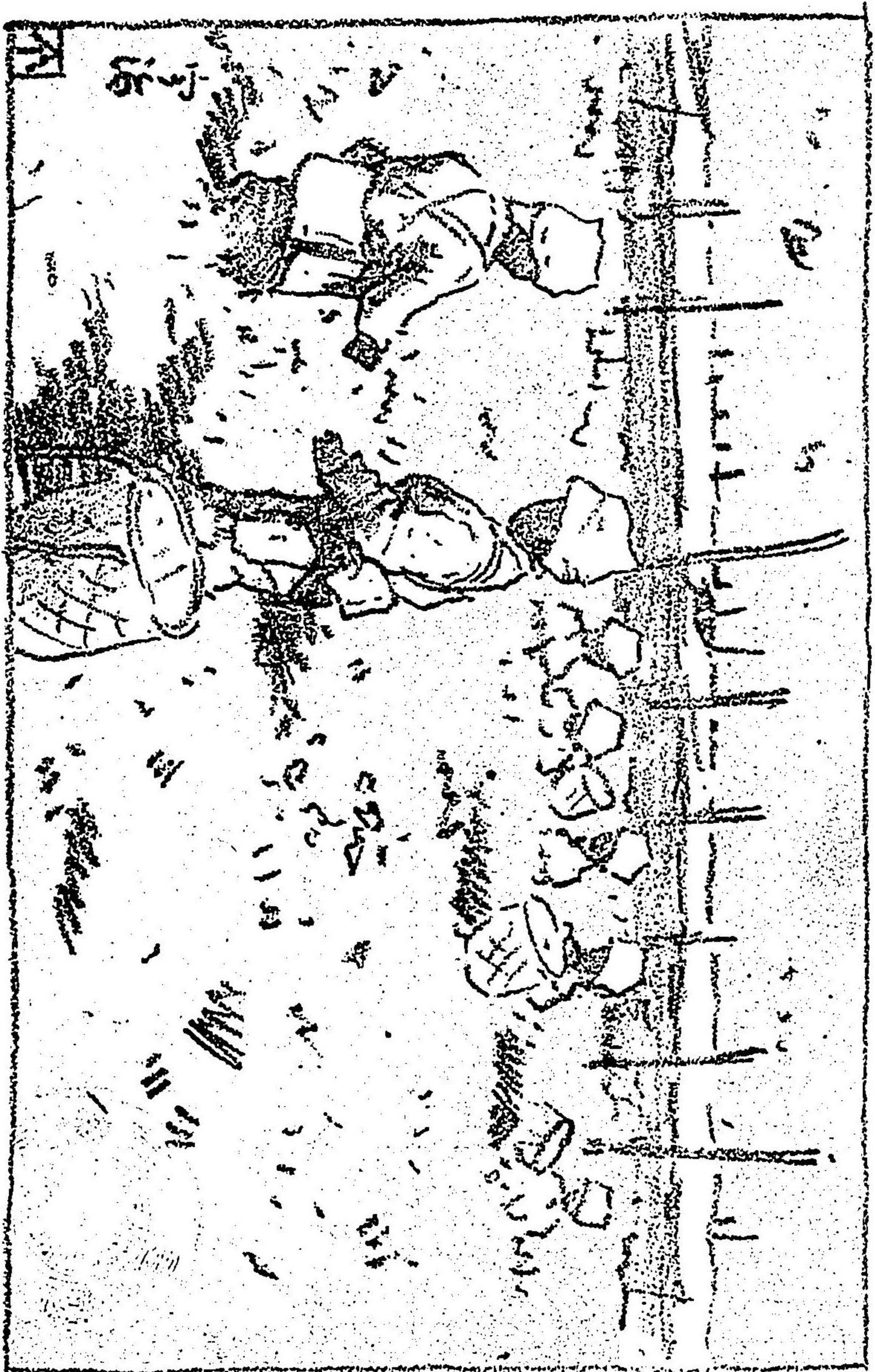
門外已無別路

M



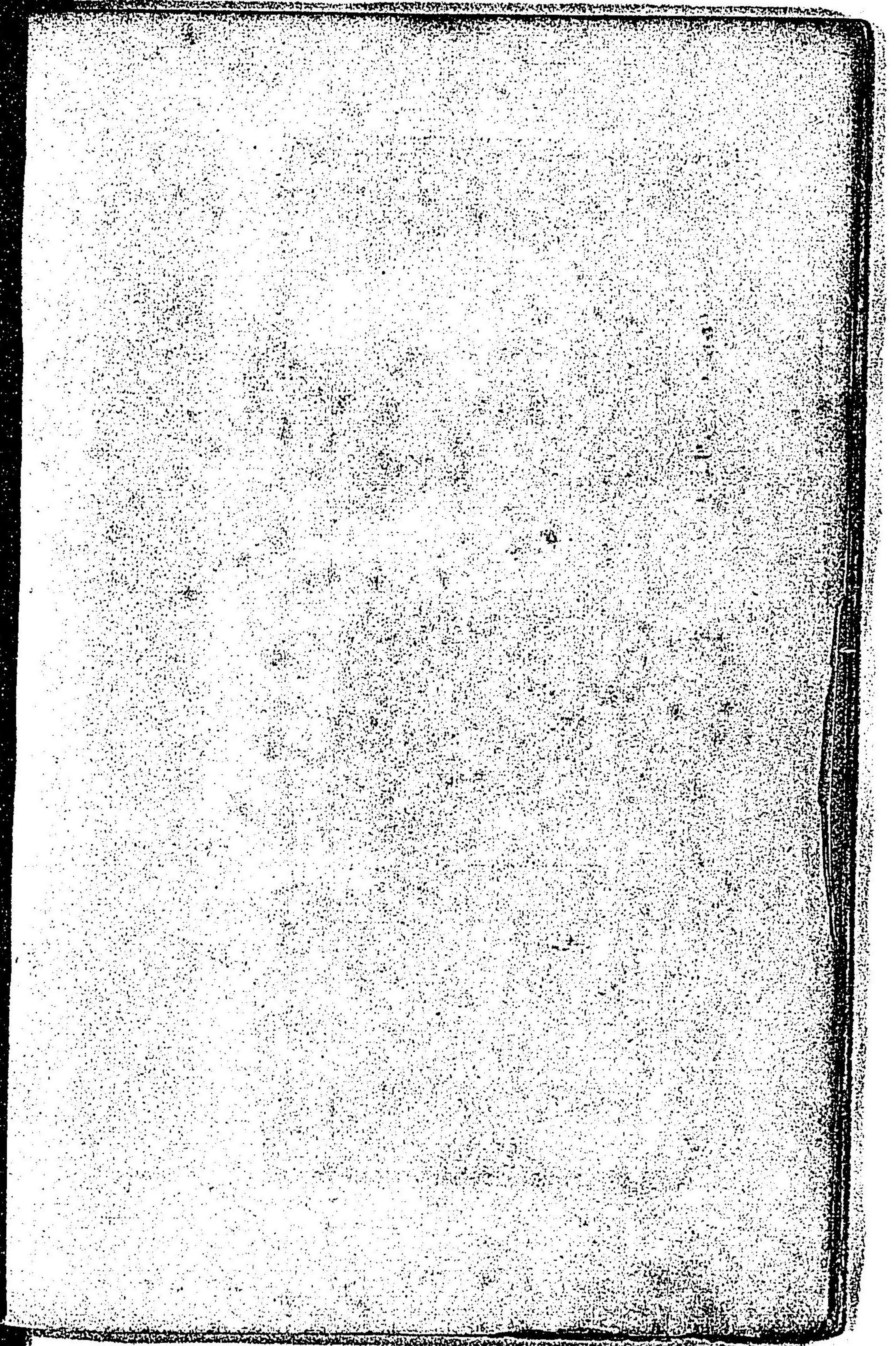


宇治の茶摘  
跡見





茶の心





宇治

武士の八十氏川の流れを亂す、源平二氏の古戰場、丹碧相映じて樓々水に臨める鳳凰堂、朝顔日記に濃艶なる情緒を歌はれし螢狩、大吉大和の名に高き宇治は茶所、喜撰法師の辰巳の山、橋姫の社、其等詩趣多き宇治の名所は、如何に我等の旅情を誘ひたりしぞ、祇園の春の花の暮、舊郡の月に遺瀨なき涙を落せし一行は、加茂の祭を待つ間を宇治に遊ばんと、書囊を肩に發足しぬ。

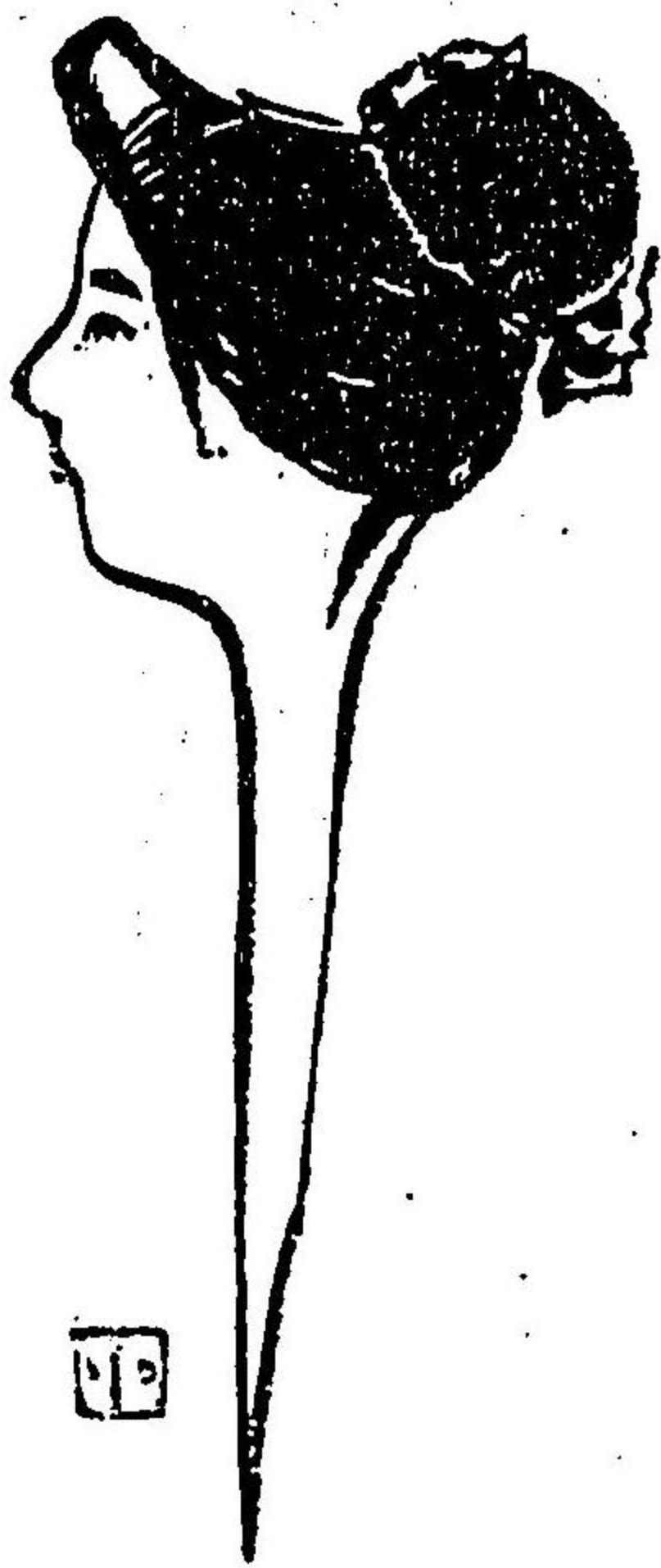
京にて求めし京人形、清水焼、壬生の假面、花瓶等は、既に一つ箱に斂めて送り出しつ、宿に残せるもの少なく身も輕ければ、心地好き事限なく、電車

に乗じて伏見に至れば、日影長閑に柳に罩めて、十字を描く高瀬川、名物の人形賣る店幾つと無く續く、撞木町の通りにて船着場を聞くに、出帆は午後一時過ぎなる可しと云ふ、未だ早けれど晝餉認めんとある店に入りて仕度を命じぬ、聽て運ばれしは鐘詰

の肉を焼きしものにて、齒も立たぬ程堅かりしが、漸くにして喫したり、宿の男を案内に、船着場に至らんとす。

河に垂れたる柳の糸、水にすれ／＼なる片邊り、蘆の若芽

寸に伸びて、主なく繋るうつろ舟、びたり／＼と寄する小波の音いと静かに、辻に立てる燈臺の影長く、水に映るも水郷の趣深く、左に朽ちかゝりし小橋を望み、長き堤を行けば、案内に立つ宿の男は、此所は忠臣藏の大石内



藏之助が、夜毎に通ひし撞木町の遊廓なりと得意氣に語りぬ。

三栖神社の傍なる橋の袂に立てば、船待つ客の多くは京の在郷の老若男女、小さき茶店の彼方此方に充ち満ちて、濃き緑の草の蔭、青々したる川添柳、微けき風に揺めきぬ。待つ事大凡三十分、漁船は静かに進み來りて、我等の前に繋がれつ、待ち焦れたる群集は、早くも乗り込まんとし、舟より降る客は、伴を尋ねて聲高く叫ぶ様哀れに、船員の之を制する聲、静かなる川面に響き渡る。斯くて二等船室に乗り込めば、漁船は蒸氣吐く音凄まじく、左右に動揺しつゝ、ゴーヘイの合圖と共に、いつしか岸を離れ、静かに／＼下り行く。

兩岸の洲を隠したる蘆青く、緑に烟る津々浦々、水を截る音次第に弱くなりて、流るゝ水のまに／＼、廣き淀川に出づれば、遙かに霞む京洛の山烟と消えて溶々たる水藍より蒼く、見渡す限りは水や空、空や水、幽かに遠き白帆の影、鳥の如く浮かぶも美はしく、降るとも無く、降り行く事三十分許り、

ふと見れば左右の岸より、河中に差し出せる水車の形横長く、鍬擔ぎ行く土手の人の、小さく霞む面白さ、隣れる乗客に尋ねれば、彼ぞ名高き淀の川瀬の水車、淀の城趾は彼方に聳ゆる高き山と、指さす儘に好く見れば、遙かに遠き下流に當りて、黒く峙つ一帶の山、虹の如く浮かべる橋微かに白く、漾々たる河水を照す午後光、眼を射る如く輝きぬ。

秀吉の寵を一身に集めし淀の方の居城、今は空しく殘墟廢墻の影だに無く、大江の水日夜に流れ去つて、過ぎ行く星霜幾百年、我に史筆の才無くして、空しく残るは綿々たる美姫が恨。斯くて次第／＼に枚方を下り、酒旗翩翻として柳烟れる渡頭の緑、展開し行く白堊の町、屏風の如く遠く圍める生駒連山、其等書卷物に似たる一帶の風光飽く事なく、猶下る事二時間餘り、漸くにして毛馬の關門に至りぬ。

毛馬は淀川の本流と、櫻の宮の水の高さを、平均する關門にして、夕陽斜めに照らす鐵の扉、渦卷く水、集れる舟、風に揺らるる青き蘆原、眼に入る

もの新しければ、呆然として眺めたり。斯くて第二の關門を開きて、靜かに吐き出さるる舟は、何所とも無く別れ去り、煤烟曇るが如き、櫻の宮の流を下り、八軒屋に着きしは、夕闇暗き川添の家、燈火入りし頃なりき。

大阪に一泊して、奈良に着きしは五月十三日の夕まぐれ、花の吹雪欄干を打つて、雑談に更けし臙夜の、石川三宅八條の三子は、既に別れてより二句に餘り、孤影相弔ふ我等一行のみ、旅より旅を流離ふ寂しさ堪え難く、燈火明るき部屋の中に相對して、語無き事久しかりき。

明くれば又來ん春を契りて、三笠山の青黛を後に、奈良驛を發して、茫漠たる大和國原はる／＼に、霞み盡せる野邊山邊、列車の窓に吹き入る麥生の風、夏の匂ひを置めて、雲に聲ある雲雀の歌、木津川を渡れば、玉氷長池の小驛、いつしか後に残り、漸くにして宇治驛に着きぬ。此所より黄檗迄の車を雇ひて、家々の軒に下る新茶賣出しの幡を眺め、朝日暖かき町を行く。

宇治橋の袂より右に曲りて、縣神社を拜し、細き小路を過ぎて、川の邊に出

づ。清く澄みたる水は、底ひも知れず渦巻きて、影を涵せる山影樹影、早瀬を下る柴舟は、矢よりも疾く押し流されて、橋の彼方に消えて行きぬ。右手を見れば青み渡れる蒹葭を抜きて、空に聳ゆる浮島の十三塔、白き石は日に照らされて愈白く、水に落つる影波に碎けて、山色水聲轉た昔の儘ながら佐々木梶原の先を競ひし夢の趾、茫として尋ぬるなく、喜撰が嶽の翠巒、空しく千古の色に聳ゆるのみ。松影青き芝を踏んで、次第に



宇治の松

進めば、土の色白く陰影紫なる日向道、左して扇が芝の邊に至る。見渡す所方三間許り、石の柵低く繞らせる扇形の芝は、頼政が最後の恨を残せし所に於て、幾百年の緑深く、當年兵馬の巻となりし痕、空しき風に夏更けたり。傍に立てるは河原の左大臣、融公が釣殿の趾にして、昔ながらの建築寂増り、嘗ては宇治川の流に臨みて、水風涼しく簾を捲く所、日すがら糸を垂れたる名残と聞けど、今は平地に接して、川は堤後を流れ行く。

渡殿を過ぎて右に、木立繁れる道を進めば、蓮の浮葉一面に漂へる池の邊、鳳凰の羽を擴げし如き平等院は、丹碧燦爛として聳えたり。朱き柱朱き勾欄は、栴組の碧と映發して、後ろに高き松の緑、莖上には黄銅の鳳凰雌雄相對して呼ぶが如く、天井は格子造り、彫棟彩梁の色彩幾百年の雨露に晒され、七寶の飾り、螺鈿の装、剝落したる趣いと美はしけれど、堂内堅く閉して見る事かなはず、治承四年以仁王の籠りし趾と思へば、何と無く床しく、池の邊を過ぎて後方の廻廊を繞り、最勝院に頼政の墓を吊ふて、元來し道を引き返しぬ。

橋の袂に近く、小さき鳥居立つ橋姫の社あり、住吉の社と並び、塵に埋れし風情哀れに寂しく、スケッチもせず行き過ぎて、宇治橋に至りぬ。橋の中央に立ちて眺むれば、太閤秀吉伏見在城の砌、宇治川の水を汲み、茶の湯に用ゐし趾として、今に残れる三の間は、橋板少しく川に出張りて、其所より汲めば、早瀬の水釣瓶に従つて溢れんとす。秀吉の預けし釣瓶は、橋の袂なる通圓の茶屋に藏すと聞えたり。我等は橋を彼方に渡りつゝ、一年宇治の螢狩に、思を寄せし朝顔日記の一節を思ひ起して、流星の如く螢火亂るゝ眞夏の夜、一度相見て相許せし戀路の闇は如何に深く、盲目となりて郎を尋ぬる長き思は、水碧に山紫なる此の邊にや萌しけん、果敢なきことを胸に浮べて通圓の前を過ぎ、川添の松原道を、物語りつゝ辿り行く。

松の葉越しの日影麗らかに、砂柔かき木の下蔭、散り敷く落葉の上を蹈みつゝ川に臨める御手洗の傍を過ぎ、離宮八幡の社を拜して、猶奥深く進み行けば、川に沿ひたる道の畔に興聖寺の石門あり。だらく上りの坂路の兩側、

岩石に包まれて、下蔭暗き青楓、山吹の花崩れ咲く下を過ぎれば、樓門あり閑寂なる本堂の晝靜かに、曹洞宗最初の道場として、支那めさし建築面白く彼方此方を繞り

て再び琴坂を降り、朝日焼賣る店に立寄りて、値切るものは風流に非すと記せし主人の、奇人めきたる様子面白く、一つ二つ

の茶器を購ひぬ。晝近ければ午餐認めんと、鳳凰堂の傍なる浮舟園に引き返して、八重山吹咲ける柴の門を入れば、中より出来りし十六許りの娘、京訛



の言葉優しく一行を導びきて、川に臨める水亭に誘ひぬ。京大阪の客に知られて風雅なる主人の道楽と、美しくしき娘二人の愛らしき風情噂高ければ、先づ傾くる杯の間に、春は必らず此所に暮らすといふ、廣瀬子の事を尋ぬれば、いつしか用意したりけん短冊二三枚持ち來りて、畫を求むる事頻なりき、午餐終りて此家を出でしは、一時少しく過ぎたる頃、山吹ほろく敷石にこぼれて、興聖寺の盤木の音、眠るが如く静かなる空に響き渡りぬ。

宇治橋を渡り坦々たる道を走らすれば、宇治十帖の浮舟と名づけて、柵の中に松一本立てられつ。夢の浮橋は、洪水の爲めに流されしと、車夫の語るを聞きながら、日光遍ねき宇治街道、麥生に續く茶畑の間を北にくと走り行き、焙爐の香り強く迫れる、小屋の前を通れば火氣蒸す許り暖かく漏れて、幽かに聞ゆる歌の聲、歌へる主の姿は見えねど、透き通りたる若き聲耳に残りてなつかしく、幾度となく顧み勝に、雜木林の間より、白き手拭ちらくする茶畑の邊を駛る。

黄檗山第一義門は、街道に面して立てられつ、純然たる支那風の建築を模して、明代の遺制を窺ふ可く、丹青を盡せし形面白き下を潜りて、中に入れば放生池の前木立奥深く繁りて草青く雲に聳ゆる山門の樓上、黄檗山と記せし隠元禪師の額高く掲げられつ。

左手に續く白壁は、白雲關と記せし緑青の文字色寂て、松に聲ある御空の風、

茫々として幾百歳、山門の柱には千呆の聯を懸け、天王殿には木菴の聯を、雙の柱に掲げたり。案内の車夫は大寶殿の石階の上に登りて、

「本尊は釋迦牟尼世尊、左右の脇立は迦葉波、阿難陀の二尊者、兩單は十六





羅漢、支那閩南范道生の彫刻、正面の額は真空、忝くも今上陛下の御筆、寛文八年の創立でありまして用材は明より取り寄せました鐵梨木、御拜の天井は蛇腹で御座います、此所で打つ盤木は三十六盤と云つて、食事の時に叩きます。

と饒舌るを開きながら、見上る許り高き室内の、暗々たる天井を窺へば、煤けし天井より下る幡、天蓋、曼陀羅の紅白と、緑の調和面白きに、黄金の燈籠彼方此方に下り、太き柱の根本に並ぶ一列の僧は、手にく總長く垂れたる鉦を持ちて、夕の勤行を始めんとす。廣く高き室内にひやく木魚の音、一勢に起る讀經の聲、立ちては座り、座りては立ち、本尊を拜む形面白ければ寫生しつ。

法堂を見て、座禪堂の前に至りし頃は、午後の日いつしか西に傾き、若き僧の力を籠めて、魚形の盤木を打つ音琴々と、寂しき寺内に響き渡る。選佛場祖師堂、鼓樓を巡覽して、通玄門を出でし一行は、門前に待たせ置きたる車に

乗りて、再び宇治驛に引き返しぬ。

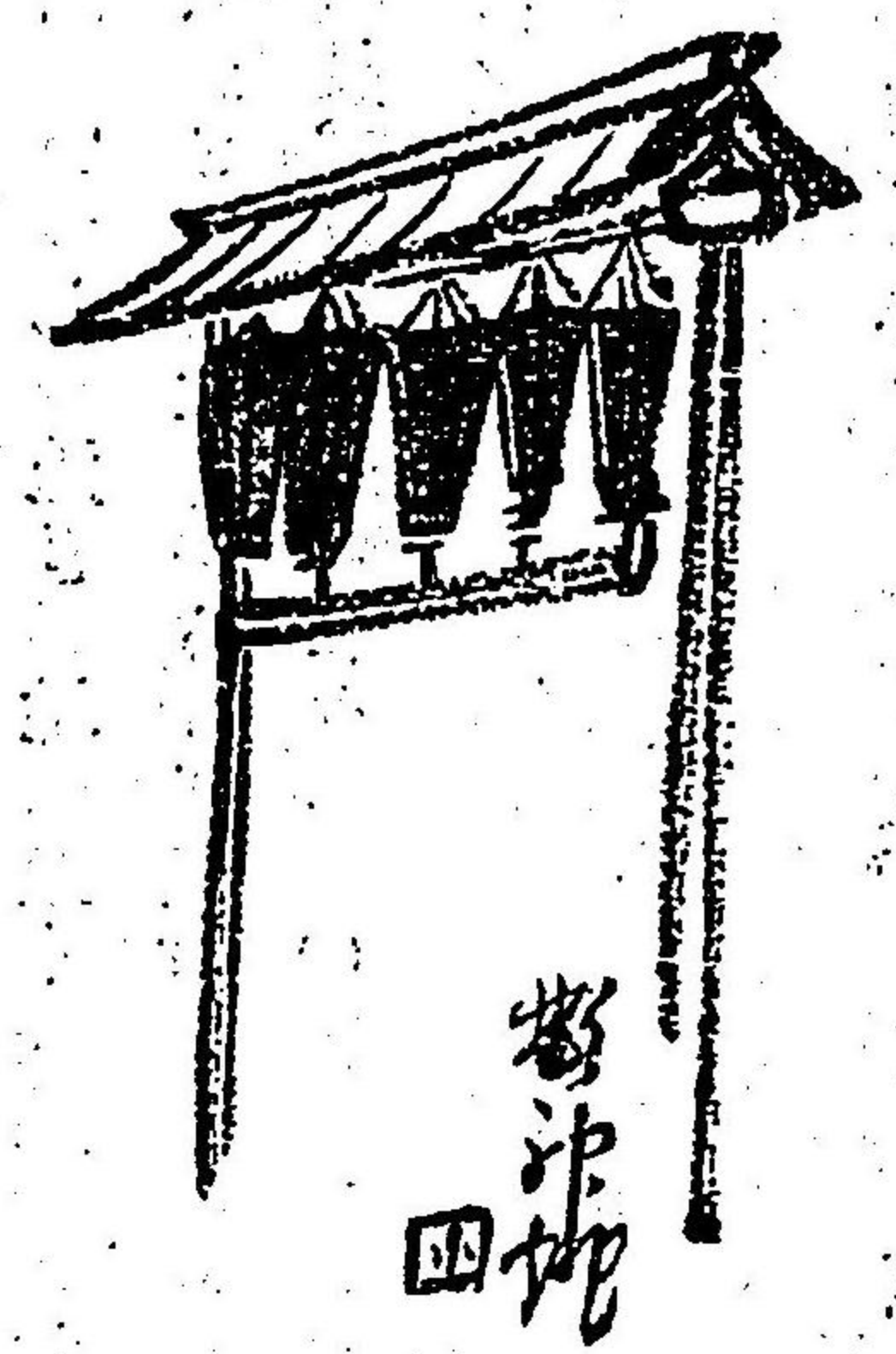
寺前の揚柳斜陽の色に靡きて、黄金を流す五十氏川、晚烟漸く深くなりし、山々暗く暮れ行きて、茶店の提灯に火點る頃、京都行の列車に入り込めば、日すがらの車に疲れ果て、巨掠の油もいつしか過ぎ、桃山近く葎簾かけたる茶畑を、右に左に残しつ、そこはかこなくたそがる、伏見竹田の野路の夕、青芦淺水の夏酣に、浙歷たる風の聲、ほのめく空に夕つ々の光、水の如くに輝きぬ。

二

歸らぬ水に思を寄せし花の旅路は、見果てぬ夢と消え去りて、草隠れ咲く野の花、いつしか夏の匂となりぬ。明け放れ行く鴨河原は、靄々として烟るが如き水氣に閉され、ほのかに淡き曉の月白く褪めて、柳靜かに吹き靡く、四條五條の朝ぼらけ、古き都の起き伏しも、今宵限りと心細く、獨り宿を出で

で、小路くを逍遙へば、敬神燈と記せし提灯五つ並びたるが、狭き辻に立ちて、人通なき朝の巷露に濡りて心地好く、ほのどく昇る白き炊烟、そよめく風に流れたり。

宿に歸れば、朝餉の仕度既に終りし所にて、青葉に更けし東山の翠微を眺めつゝ、膳に向へば、燕子頻りに水を渡り、日影射し添ふ欄干に、影を落して閃きぬ。



葵 祭

長いく鞍馬街道、縁に纏く松原は、果なく遠く山の麓迄伸びて行つて、右は畑つた様な比叡山、翻若した加茂の森は青葉に埋められて、橋を往來の人がぞる

く、紅や藍の日傘を翳して行く。橋の袂の紅白段々染の幕を張つた棧敷には、外國人の一隊が陣取つて其の下を流れるいさゝ小川倒れる様な川柳の新芽に日が射して燃える様に閃めく風が下から煽り上る。廣いく、糺河原一面、白い小礫や砂がざらざら光る中を、群青の様な水が流れて、萎びた月見草の花が、黄ろくあちこちに咲いてゐる。

橋の下に水屋の店が並んで、菓子賣の姥が白い手拭を被つた儘菓子買うてんか、人の後を追つて行く、河原に降り立つた人が、彼方此方に團つて、水を渡つて來る人は、後からく、足を濡らした儘日に焼けた砂地や石の上を歩いて來る。

來るか、待つ人は、時々伸び上つて橋の上を見るが、一時間許りは只がや、するのみで日は漸次に熱くなつた。

するさ橋の上の警官が、次第に往來の人を止めるので、最う間もないさ待つてゐる、少時立つて眺めてゐたが、疲れて了ふので、又礫の上に坐つてゐるさ、俄に土手の人が崩れ出して、砂塵が烟の様にばつさ上る。警官の姿が靜かに橋の上に顯はれた。

露拂ひは萌黄色の狩衣を着けた男が左右に二人橋上人なく只照り渡つた日光の中を静々と歩くので輝く許り美しくしいのだ。騎馬巡査が三人前後して進む後から二三間離れて空色の衣冠正しいのが二人其の後から下に白衣を重ねて棒色の袍を着け、矢を肩にかけたのが四人、燦然として歩いて来る。次いで白の狩衣が一人、急ぎ足に進むと馬上寛かに鹿毛に跨つた鈍色の神官が黄の鞞、長く風に靡かして悠々として打して行く。

後からくさくさ續く白丁、大きな傘から錦の巾が下つて、紫の總の附いたのを、重相に持つて行く男の後には、烏帽子狩衣の人が、幾人とも無く續いて白い巾で包んだ傘を持つ白丁が多勢の中に交つて行く。

行列が次第に真中に近くなる、遊色の籠を兩の肩にかけた白丁が、籠の上に同じ色の被り笠と傘を載せて歩いて直ぐ其の後は十一二のいたいな童、燃え立つ様な黄の狩衣、紫紺の奴袴、藁靴の大きなのを穿いて、牛車の綱の尖を持つて静かに歩いて来る。白丁が八人、緋や白や黄で頭を飾つた牛の左右に附添つて、御所車を曳いて来た。

紫や白の藤の造花を、山の様に挿した牛車は、ぎく／＼音を立て、廻つて行く

さ暗い陰影になつた御簾の色は青く、屋根や轆の黄金が、日に映じてきら／＼光つた。後からくさくさ續く衣冠束帯の人は、色々の色に交つて、頭には皆な葵と日蔭のかつら挿してゐる。總て牡丹の花笠が来る。馬上の神官が来る。淡紅や緑や、俗緒色や、薄紫や、目にも残らぬ虹の様な美しくしい行列は、いつまでもくさつながつて、桃色の狩衣を着た童が来る。見物の群集は、只其美しくしさに酔はされて了ふ。

花笠が終りに近く二つ續いて、長い／＼列が橋の中央を渡り盡すと、群集は一度に崩れかゝつた暗い緑の中に、消える様に這入つて行く。雷巻物



かき出し

の様な幻は、次第く影を隠して、青葉に戦く風が颯々吹く、森の木葉の裏が銀の如く輝やいた。比叙は淡く霞んである。加茂の社頭で舞樂が有るので、外国人の一族は、一度に立って其の方に行く、河原の人々は行列の歸路を見物しやうといづれも日を避けて橋の下に這入つてゐる。氷店ではかん氷くさ類に客を呼んでゐた。菓子賣の姥は又一しきり蒼蠅く歩く。一時間許りで、下の加茂から上の加茂に行く行列は、再び橋に露れた。長い鞍馬街道空に澄み行く松の嵐は幽かに鳴つて、青々とした土手の草蒼空に浮かぶ白い雲が光に溶けて眠つた様な四邊の景色、百花一時に咲く様な長い行列は、松高き堤の上は何所までも練つて行くので恍惚として見送つてゐる。夢が夢に非ず、幻が幻に非ず、千有餘年の舊日本の華やかな姿を残した葵祭は、至る所古跡に富んで、昔の事を改めぬ京の町でなければ、見られぬ繪巻物だ。つくづく感じて立つてゐる。次第に麗々と淡くなる。紅や、緑や、白や、樺や、色々の色の影が遙かに長い草の堤に消えて、残るは潺湲たる水の流れ、野山を包む夏霞、川添村の柳がさつと靡いて、牛の鳴く聲が微かに聞えた。

朝は朝星、夜は夜星、明けぬ暮れぬと、花に迷ひし四月の春は旅に老ひて、麥秀でたる舊都の夏、今や漸く更んとしつ、昔ながらの山色水聲、我等の胸をせゝるが如くなるも、夢に驚く蝶は、既に落花の流を追ひて遠く歸らず、友の二人は東に去りて、旅に荒める心いと寂しく、長く馴染みし宿に別るゝ事の辛さはあれど、又來ん春を堅く契りて、夕闇暗き五月の空、遂に歸京の途に就きぬ。

あはれなつかしき京の春よ、舊き都の花の香はうづともなき袖に残りて、夢を載せ行く東海道、雲に重なる山又山は、蒼茫たる暮靄にたそがれて、思ひは遠し平安城。